

神ノ原遺跡発掘調査報告書

2006

大分県
佐伯市教育委員会

序 文

本書は、中山間地域総合整備事業、神ノ原工区圃場整備事業に伴い佐伯市教育委員会（旧直川村教育委員会）が大分県より委託を受けて実施した、神ノ原遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

神ノ原遺跡の所在する佐伯市直川地域（旧直川村）は、佐伯市の西部の山間部に位置し、平成17年3月3日に佐伯市と直川村を含む8町村が合併して新「佐伯市」となりました。直川地域では清流番匠川の支流である久留須川が流れています。また、近隣に上ノ原遺跡・源六原遺跡があります。

調査の結果、縄文時代の層からは集石や土杭などの遺構や縄文土器、中世後期～近世の層からは、多數の柱穴や上墳墓、その他陶磁器類が出土しました。これらはそれぞれの時代における貴重な資料であり、今後佐伯市及び周辺地域の歴史を解明していくうえで役立つものと期待できます。

最後に、この発掘調査に深いご理解とご協力を賜りました大分県佐伯南郡地方振興局耕地課、大分県教育委員会文化課、元直川村教育委員会教育長鴨尾利夫様、地元神ノ原地区をはじめ関係各位に厚くお礼を申し上げます。

平成18年3月

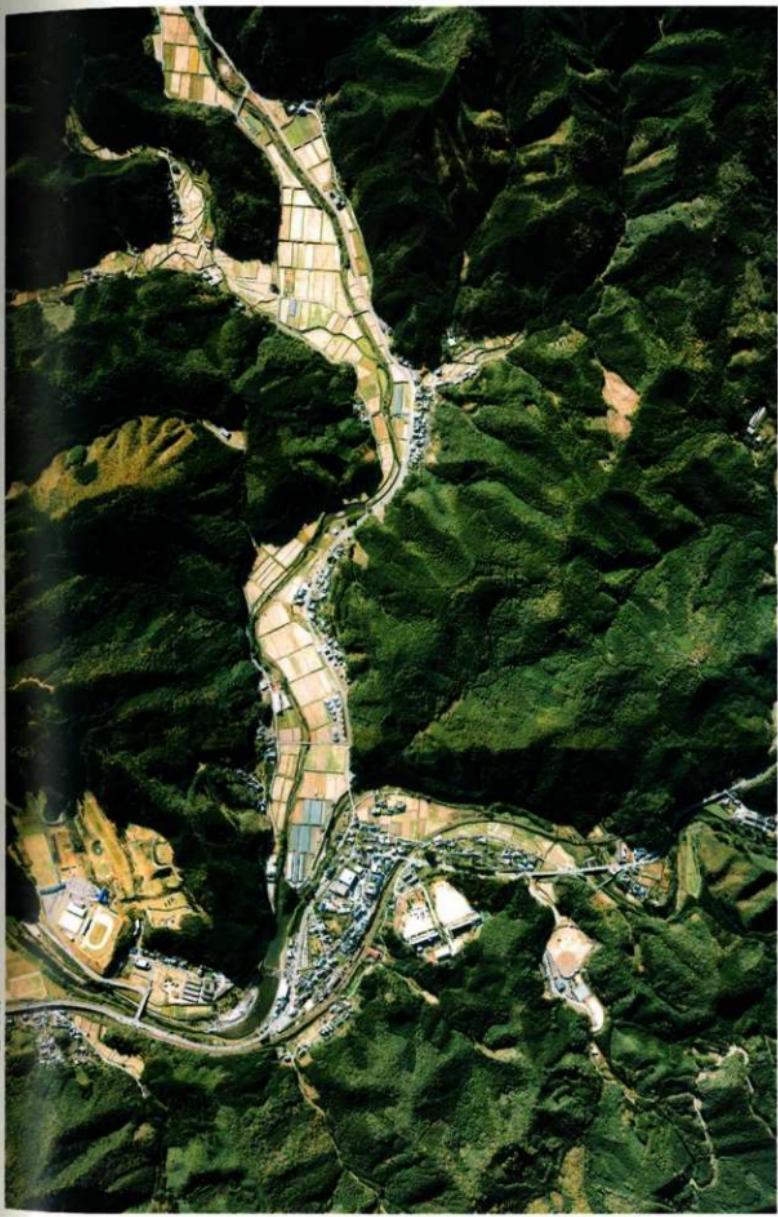
佐伯市教育委員会

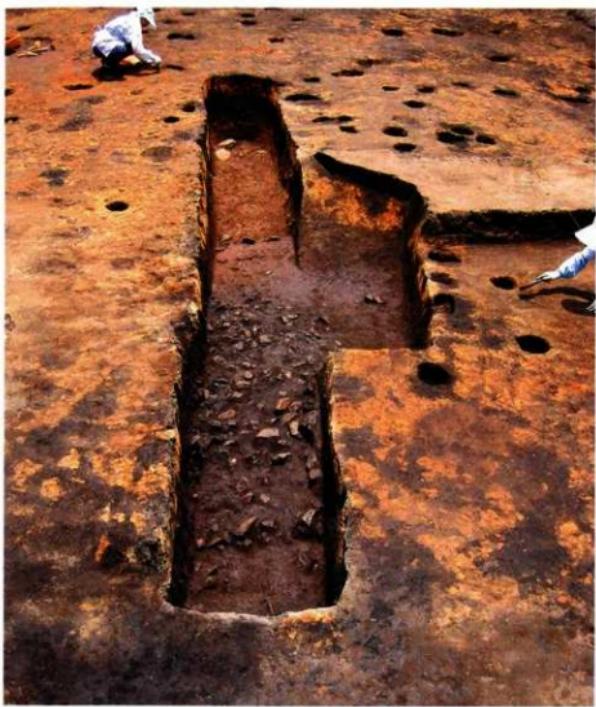
教育長 武田 隆博

至：宮崎

大分

至：大分





基本層序



有舌尖頭器



李氏朝鮮系白磁碗

例　　言

1. 本書は、中山間地域総合整備事業 神ノ原工区圃場整備事業にともなう発掘調査報告書である。
2. 遺構実測は、後藤一重・吉田和彦・下森弘之のほか、一部を埋蔵文化財サポートシステムに委託した。そのほか塙漸浩之・永田裕久・秋吉博美・高瀬真矢・長田伸子・中牟田真由美・東みどりの協力をえた。
3. 出土遺物の整理作業は、佐伯市教育委員会直川事務所（平成17年3月3日の合併まで南海部郡直川村教育委員会）でおこなった。
4. 出土遺物の実測は、石器を清水宗昭・小畠三千代・森 隆重、土器を宮田剛が、そのほかは吉田がおこなった。
5. 遺構・遺物の浮遊は、石器を清水・小畠・伊藤千里が、そのほかは吉田がおこなった。
6. 出土遺物の拓本は、吉田および今崎真樹がおこなった。
7. 出土遺物のうち、石器および環の計測は、清水・稗田智美・大隈 慎がおこなった。
8. なお、本報告書での被熱の記載は、肉眼観察による。
9. 遺構写真は吉田が、遺物写真は塙漸氏の手を煩わせたほか、吉田がおこなった。
10. 第1章1を戸高浅生、第2章を竹中伸吾が執筆し、石器の一部に関しては清水宗昭氏（別府大学）、人骨に関しては田中良之・石川 健氏（九州大学）、馬骨に関しては加藤久雄氏（愛知学泉大学）にそれぞれ玉稿を贈った。そのほかの執筆は、吉田がおこなった。
11. 本書の編集は吉田がおこなった。
12. 発掘調査・報告書作成に係る図面・遺物・写真は、佐伯市教育委員会で収蔵・管理・保管している。
13. 発掘作業およびその後の整理作業では下記の方にお世話になった。
下森 弘之・玉川 刚司・手柴 智晴（以上、別府大学大学院）
安藤 高・今崎 真樹・岩切ケサ子・岩崎多美子・宇戸さゆり・梅田 拓典・大隈 慎・大塚 和樹・
大塚 利明・大畑キミエ・大畑紀美代・小野 英義・甲斐ケイ子・甲斐 水江・河村 健二・高田フジノ・
羽明しづか・稗田 智美・泥谷 新吾・泥谷 政・平井 清源・広瀬 宏子・深田 誠二・村谷 侑亮・
柳井 清水・柳井チエ子・柳井 秀子・山下 慎二・山下八重子・吉田 禮子・渡辺 昭生・渡辺 淑子
14. そのほか本遺跡の調査および報告書の刊行にあたっては下記の方に、ご教示および遺物実見等でお世話になった。記して感謝いたします。
今田 秀樹・萩 幸二・小倉 正五・遠藤 慎・小林 昭彦・後藤 宗後・坂本 寧弘・佐藤良二郎・
塙地 潤一・渋谷 忠章・下村 智・金丸 武司・神田 高士・木村幾多郎・高橋 信武・竹野孝一郎・
橋 昌信・坪根 伸也・西 哲弘・横島 隆二・松本 茂・松本 康弘・宮内 克己・柳田 裕三・
吉田 寛・綿貫 俊一（敬称略）

上記の方々のほか、狭川真一・白木 守・徳永貞紹・中島恒次郎・降矢哲男・美濃口雅朗・山村信榮各氏を含む第3回中世墓資料集成研究会（於：熊本）にご参加の方々。

目 次

第1章 はじめに	
1. 調査にいたる経過	1
2. 調査体制	1
第2章 地理的歴史的環境	
1. 位置と環境	3
2. 歴史と環境	3
第3章 調査の成果	
1. 調査の概要	4
2. 基本層序	4
第4章 遺構と遺物	
1. 繩文時代早期の遺構と遺物	9
縄文土器	23
縄文時代の石器	32
2. 繩文時代前期～晚期の遺構と遺物	47
3. 弥生時代の遺物	47
4. 中世前期の遺物	48
5. 中世後期以降の遺構と遺物	48
第5章 自然科学的考察	
神ノ原遺跡出土人骨について	64
大分県佐伯市（旧直川村）神ノ原遺跡出土のウマについて	66
第6章 まとめと考察	
縄文時代早期	
土器・礫などの分布について	69
土器について	69
石器について	70
集石について	73
中世後期～近世初頭	
土葬墓壙について	81
掘立柱建物について	81
墓について	81
墓と建物について	82

図版目次

第1図 佐伯市真川の遺跡分布図	2	第28図 片刃器・両刃器実測図	38
第2図 神ノ原遺跡調査区位置図	3	第29図 両刃器実測図	39
第3図 神ノ原遺跡遺構配置図	5~6	第30図 墓石・散石・石皿・砥石実測図	40
第4図 土層図	7~8	第31図 織文土器(前期以降)	47
第5図 1区1号集石	9	第32図 4区2号土坑	47
第6図 3区1号集石	9	第33図 3区上器実測図	48
第7図 3区2号集石(左)、4号集石(右)および出土土器	11	第34図 3区1号墓および出土物(上)	49
第8図 3区5号集石	12	第35図 3区2号墓	50
第9図 3区6号集石	12	第36図 3区9号墓および出土鉢	50
第10図 3区7号集石(左)および4区1号集石(右)	13	第37図 3区10号墓(上)と3区5号土坑および出土遺物(下)	51
第11図 4区2号集石(右)、3号集石(右)および出土土器	14	第38図 3区4号土坑および3区6号土坑と3区8号土坑および1号遺物	52
第12図 4区4号集石(左)、5号集石(右)および出土土器	15	第39図 1区性格不明遺構	53
第13図 2区焼土	16	第40図 3区掘立柱建物	54
第14図 2区1~3号土坑、および3号土坑出土土器	17	第41図 1区および4区掘立柱建物	55
第15図 4区1号土坑 遺構および出土遺物	19	第42図 上野質土器および輸入陶磁器実測図	57
第16~17図 掘合縦断面および出土土器の垂直分布図(下)	20	第43図 近世陶磁器実測図	59
第16~21図 石器の垂直分布図	21~22	第44図 七鍾実測図	60
第17図 織文時代早期の土器(条文および横突文・口縁部)	24	第45図 3区馬埋葬遺構	61
第18図 織文時代早期の土器(条文および脚部)	25	第46図 1~2区道路痕跡	62
第19図 織文時代早期の土器(無文・口縁部)	28	第47図 3区6号土穴および出土遺物と3区道路状況	63
第20図 織文時代早期の土器(無文・口縁部および脚部)	29	第48図 神ノ原遺跡出土石器対比図(剥片石器・石核)	70
第21図 織文時代早期の土器(無文および脚型文)	30	第49図 神ノ原遺跡出土石器対比図(剥片石器)	71
第22図 織文時代早期の土器(底部および土器加工品)	31	第50図 神ノ原遺跡出土石器の分類	72
第23図 剥片石器実測図	33	第51図 神ノ原遺跡およびその周辺地域の有舌突頭器	73
第24図 大型剥片石器実測図	34	第52図 集石の構成率の計測(その1)	76
第25図 石核・礫器・凝灰岩加工品実測図	35	第53図 集石の構成率の計測(その2)	77
第26図 片刃器実測図	36	第54図 織文早期包含中の構成率の計測(その1)	78
第27図 片刃器実測図	37	第55図 織文早期包含中の構成率の計測(その2)	79

目次

第1表 神ノ原遺跡の石器組成	32	第5表 土器観察表(その4)	45
第2表 上器観察表(その1)	42	第6表 石器観察表	46
第3表 土器観察表(その2)	43	第7表 神ノ原遺跡出土のウマの骨についての基礎データ	67
第4表 土器観察表(その3)	44		

写真図版目次

馬骨	68	1次検出面(柱穴群)	94
調査区および1・2区全貌	84	墓	96
3・4区縄文包含層検出状況	86	性格不明遺構・3区土坑	98
3区最終サブトレ・4区1号土坑	88	馬埋葬遺構・3区道路・3区6号土坑	99
集石	89	1区掘立柱建物、1・2区道路、柱痕ほか	100
集石・2区焼土・2区土坑	93	遺物	101

第1章 はじめに

1. 調査にいたる経過

佐伯市は大分県東南部に位置し、豊後水道と山に囲まれた県南部の拠点的都市である。今回発掘調査を行った直川地域（旧直川村）は佐伯市の西部に位置し、周囲を山に囲まれ、清流番匠川の支流である久留須川が貫流している。平成17年3月3日、佐伯市及び南海部郡8町村が合併し、現在は佐伯市となっている。

旧・直川村は平成10年に中山間地域総合整備事業の指定を受け、産業振興のため様々な事業を実施してきた。平成16年度に周知遺跡である神ノ原遺跡が含まれる神ノ原工区は場整備事業を実施するに当たり、大分県教育委員会文化課による試掘調査を平成16年3月2日～平成16年3月5日に実施した。その結果、縄文時代早期の遺構を検出した。遺構が発見された箇所の取り扱いについては、大分県教育委員会文化課、大分県佐伯南部地方振興局耕地課、直川村教育委員会の三者で協議を行った結果、工法変更等による保存措置が困難であることから、本調査を実施することになった。

本調査は大分県佐伯南部地方振興局耕地課の委託事業により直川村教育委員会が主体となりおこなった。平成16年度は平成16年6月7日～平成16年10月13日の間、発掘調査をおこない、～平成17年3月15日まで遺物の洗浄・接合などをおこなった。平成17年度は佐伯市の単独事業として遺物の実測、トレイス等をおこない、報告書を作成に努めた。

(戸高 浅生)

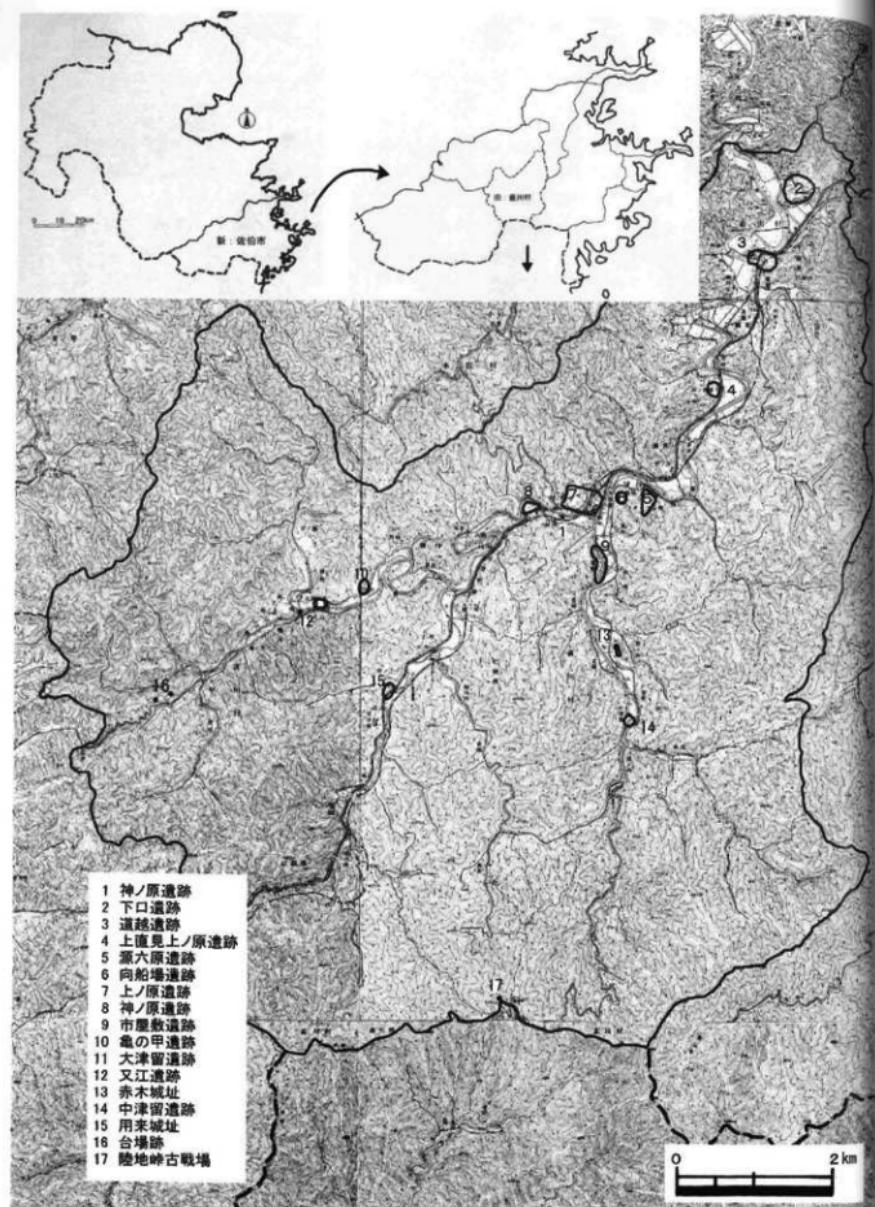
2. 調査体制

平成16年度（～平成17年3月2日）

調査主体	直川村教育委員会	調査主体	佐伯市教育委員会
調査指導	後藤 一重 (大分県教育庁文化課主幹)	調査指導	後藤 一重 (大分県教育庁文化課主幹)
調査員	甲斐 寿義 (大分県埋蔵文化財センター副主幹)	調査員	佐伯市教育委員会
調査事務	直川村教育委員会 嘱託 吉田 和彦	調査事務	佐伯市教育委員会 教育長 藤浦 武久
調査事務	直川村教育委員会 教育長 鶴尾 利夫	社会教育課長	久保田成太
	管理課長 竹中 伸吾	直川事務所長	戸高 浅生
		直川事務所主任	曾宮 浩也

平成17年度

調査主体	佐伯市教育委員会
調査指導	後藤 一重 (大分県教育庁文化課主幹)
調査員	佐伯市教育委員会 直川事務所嘱託 吉田 和彦 (～6月30日)
調査事務	佐伯市教育委員会 教育長 藤浦 武久 (～5月20日) 武田 隆博 (5月24日～) 社会教育課長 久保田成太 直川事務所長 戸高 浅生 直川事務所主任 曾宮 浩也



第1図 佐伯市直川の遺跡分布図

第2章 地理的歴史的環境（第1・2図）

1 位置と環境

佐伯市真川は大分県の南部に位置し、周囲を300m～500m級の山地に囲まれ南の一部は宮崎県と接する。地域の中央を番匠川の支流の久留須川が流れ、横川川と赤木川を合流して北上し、佐伯市本町で番匠川と合流して佐伯湾に注いでいる。久留須川に沿って国道10号線と日豊本線が平行して中央部を南北に緩断しており、古くから交通の便は悪くなっている。直川地域の面積の90%以上を山林が占め、久留須川に沿った冲積地に山畠が集中する。

遺跡の位置する神ノ原地区は佐伯市直川の振興局や郵便局・農協・小中学校などがある中心部に接しており、同道10号線、日豊本線、久留米河に囲まれた地域である。

2. 歴史と環境

直川地域の大字である下直見・上直見・横川・仁田原・赤木は古くから「5か村」と呼ばれ、歴史的・地理的・政治的にみて似かよっており、交流も盛んであった。

久留須川の上流域の仁田原、横川川流域の横川、赤木川流域の赤木を合併し川原木村となり、上直見・下直見が合併し直見村が誕生したのは明治22年であった。合併促進法が制定される2年前の昭和26年4月に直見村と川原木村が合併し直見村が誕生した。

遺跡の在る神ノ原地区は上直見に位置し、横川川・仁田原の久留須川・赤木川が交わる要の所にあり上直見でも最も西に位置する。赤木の神内地図とは小道を挟んで接しており、地域の人でも間違えるほどである。江戸時代に上直見村の庄屋（小野家）かいたのも神ノ原であった。地区的氏神様である御嶽神社には旧直川村の村木に指定されていた「直見杉」の元祖といわれる樹齢400年以上の巨木がそびえている。また神ノ原地区は横川川に沿って宇目地域まで延びる尾道上爪渓谷奥線の基点となっており、被川地域はもとより、宇目地域の産物の輸送路となっている。

大正12年に全線開通した日豊本線は神ノ原駅（昭和36年に直川駅と改称）といい、神ノ原地区と隣接している久留須地区にあるが、直川地域の産物であった木炭や木材、米などの貨物輸送の集積場として、また人々の通学や通勤の人々でぎわった。

このように古くから神ノ原地区は交通の要所として栄えてきた。

(竹中 伸吾)



第2図 神ノ原遺跡調査区位置図

第3章 調査の成果

1. 調査の概要（第3・4図）

試掘調査の段階で、良好な状態でのアカホヤの堆積が確認でき、またその下層には、縄文時代早期の集石の存在が想定できた。またそれらの上層ではアカホヤを切り込む柱穴の存在も確認できていた。よって、縄文時代と中世の2時期を主とした複合遺跡の可能性が想定できた。

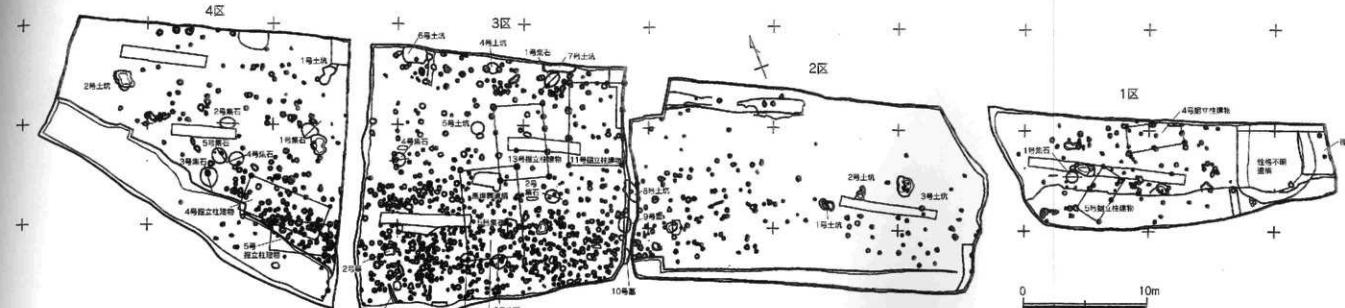
調査区は、調査予定地内の田畠を単位に設定し、東から順に1～4区と名づけた。地形的には、北側の標高が高く、南側が低い。よって田畠や宅地などの造成時の平坦面確保には、高所を削平し、低所をその土で盛地していることは明白であった。予想どおり重機による表土剥ぎでは、北側の浅いところで0.2m、南側の深いところで1.3mで遺構検出面に至った。その後、手作業で遺構の検出に努めた。表土除去後の検出面の状況は、第3図下段右のとおりである。北側ではアカホヤが残存せず、一部で縄文早期の包含層がうすく残存するのみで、ローム層が露出する箇所もみられた。遺構も南側に比べると少ない。一方南側では、3区・4区の一部で良好なアカホヤが確認でき、またそれを切り込む夥しい数のピット、墓、馬埋葬構などが主に検出でき、北側に比べ遺構密度著しく高いことがわかった。

調査はまず、アカホヤの上層に当たる遺構（主に中世後期から近世初期の時期）からおこない。その後、アカホヤが良好に残存する3区および4区の一部に関しては、アカホヤを除去した。なお、アカホヤの除去は、調査中にアカホヤに遺物が含まれる可能性が極めて低いと判断できたので、小型重機で除去した。

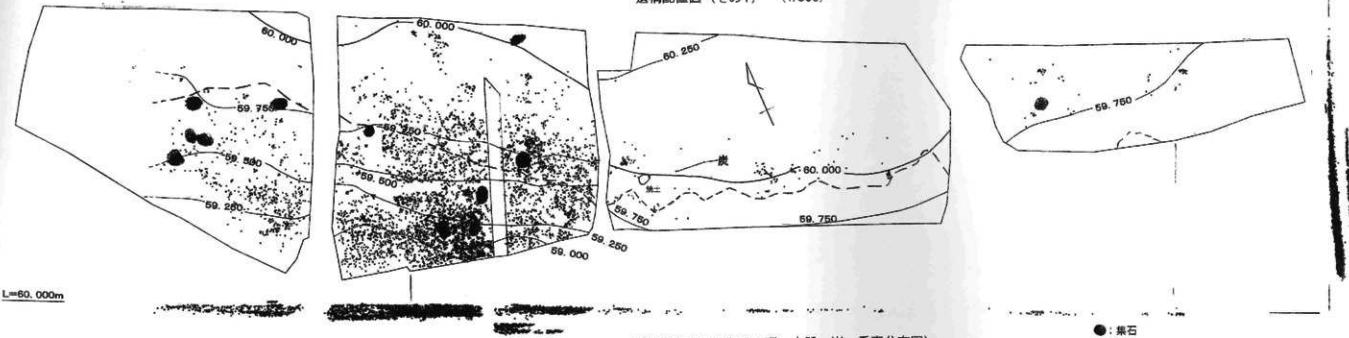
縄文早期の包含層は主に、3・4区に良好に残存していたので、2区の一部・3区・4区の一部を掘削した。包含層中に縄文土器・石器に加え、拳大～人頭大の夥しい量の礫がみられる層で、4区ではさらにこれに砂利が密にまざるという状況であった。これらのうち礫・縄文土器・石器（課器を含む）の3者をトータルステーションにより座標で記録し取り上げた。この礫の取り上げをおこなう過程、もしくは取り上げ後に、集石を確認した。概ね、中央付近では取り上げ過程で、南側では取り上げ後に集石を確認した。現場では、取り上げ過程と取り上げ後の確認の違いは層位の違い、すなわち時期差であると考えていた。しかし、前述のとおり地形は北から南へ低くなっている、南側の包含層がより厚く堆積しているため、検出状況で差異が生じたものと判断した（なお、北側では最初の表土剥ぎ後の遺構検出段階で集石を確認している）。これらの下層（3・4区中ほど～南側）では、さらに礫層とも呼ぶべきものが確認できたので、これらに関しては、3m×3mのグリッド（第3図下段左）ごとに取り上げをおこなった。その後、2区・3区・4区の下層をサブトレーンチによって確認し、調査を終了した。

2. 基本層序（第4図）

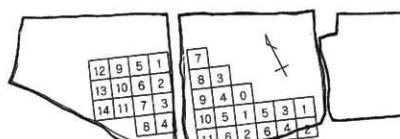
基本的な層序は、以下のとおりである。I層は表土で田の床土など、II層は中世後期～近世初期の時期を中心とした、それ以降の時期ものである。III層はアカホヤである。IV層は、縄文時代早期の包含層で、礫を含むのが特徴である。土の質的には、砂利混じりであることがこの層の特徴である。3区（東側）以東は比較的砂利を含まないものであるのに対し、3区（西側）以西は砂利を含む層で、4区に至っては砂利がベースとなる箇所もみられる。しかし色調的には黒色層（IV₁層）と暗茶褐色層（IV₂層）からなるもので、これが基本となる。黒色層は、下層の暗茶褐色層に比べ堆積が薄い。また下層の暗茶褐色層は堆積が厚くさらに細分が可能である。詳細は第4図に譲るが、V₁層には下位の方に礫層と呼ぶべき箇所もある。V層は、地山である。場所によって、ローム層・礫まじりのローム層・砂利および礫がまじる砂質の層の場合がある。第4図にアカホヤや縄文早期の包含層が良好に残存する3区～4区を中心とした土層を図示した。



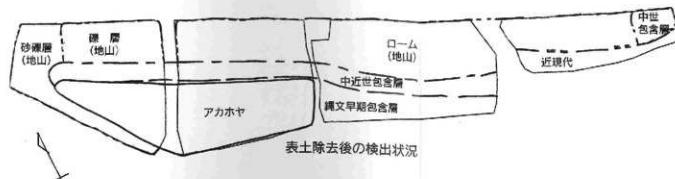
遺構配置図（その1）（1/300）



遺構配置図（その2：礫・土器・炭 垂直分布図）



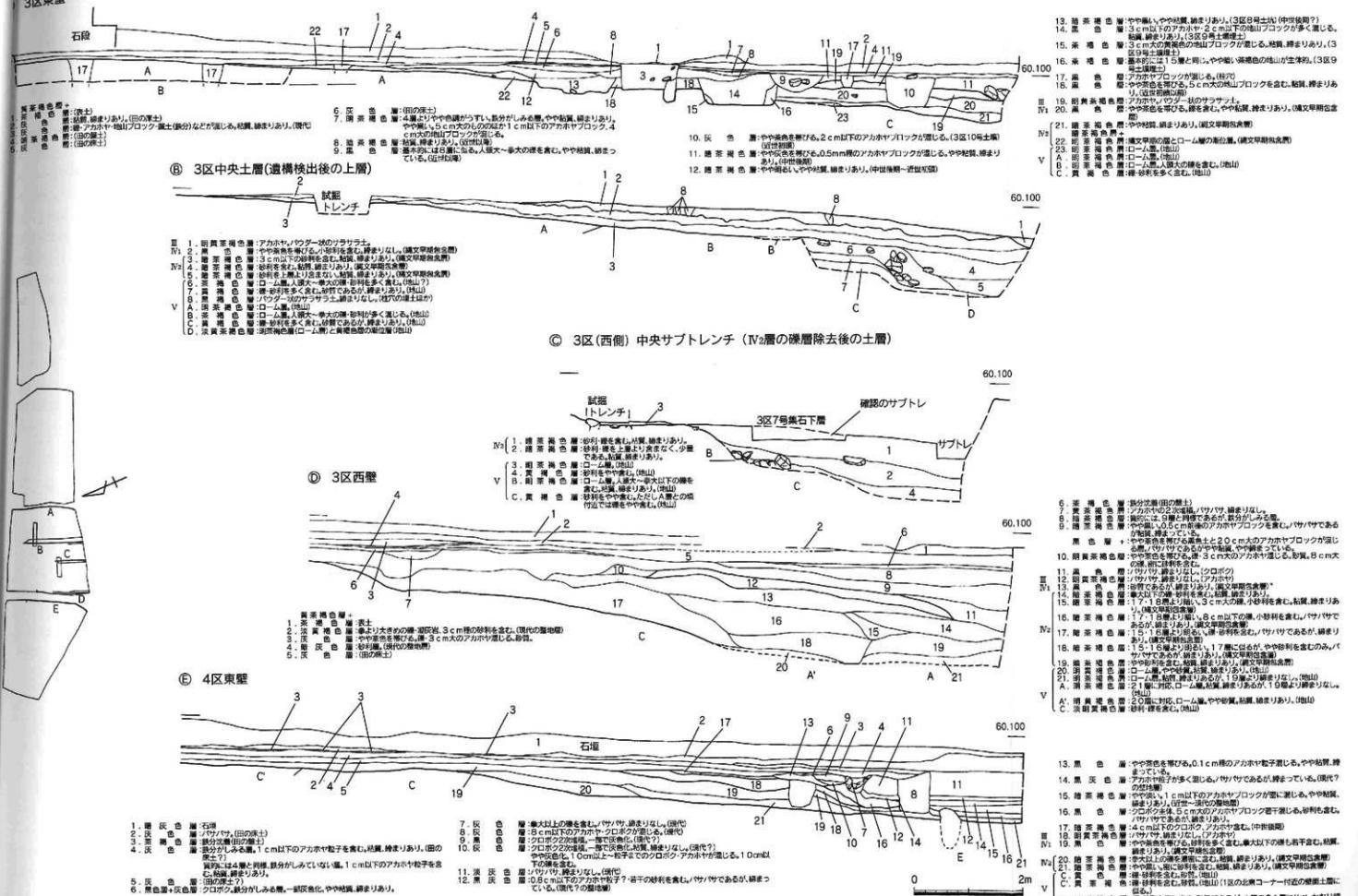
縄文星期下層礎群とりあげグリッド図



表土除去後の検出状況

第3図 神ノ原遺跡遺構配置図

3区東壁



第4図 十層図

第4章 遺構と遺物

時期的には、縄文時代早期と中世後期～近世初期のものが主体をなす。遺構の主なものとしては、前者では集石12基⁵⁾、後者では土壙墓4基が伴なう。また夥しい数の柱穴は、ほとんどが後者に伴なうものと考えられる。遺物の主なものは、縄文時代早期では縄文土器（無文・条痕文・押型文・撫糸文）やチャート製の有舌尖頭器・石礫などの剥片石器、また砾器などが出土した。中世後期～近世初期では、陶磁器類の出土があり、国産のもののみならず、中国・朝鮮産のものも出土した。中でも、土壙墓から出土した李王朝産白磁碗は県内初の完形品である。加えて、土師質土器（陶磁器模倣）・錢貨が出土した。そのほか明確な遺構は確認できなかつたが、弥生土器や中世前期の輸入陶磁器（青磁）が主な出土品である。

以下、詳述する。

1. 縄文時代早期の遺構と遺物

1区1号集石（第5図）：1区の西側に位置する。すぐ北を試掘トレンチが東西にはいる。

上部の砾は拳大前後～拳2個分ほどのもので構成される。西側は後世の搅乱により残りが良好ではない。下部はそれらの砾に比べ大きめで、人頭大前後のものである。掘り込み内に、上面をそろえ平坦を意識するように配置されている。その意識との関連であろうか、下部の砾には1組、接合するものがある。

砾の被熱に関しては、下部の砾は検出時においては被熱していないように見えたが、その後、洗浄し肉眼観察したところ、ほぼすべてが被熱していた。

出土遺物は、上部の砾付近で縄文土器が1点出土したのみである。

1区2号集石：調査時は、集石として判断したものであるが、以下の理由から削除した。1号集石とは試掘トレンチを隔てた北側に位置する。遺構検出時に付近から多くの砾が出土したため、その残存箇所を集石としたものの、洗浄後の観察では、ほぼ砾に被熱が観察できず、また凹面度の傾向（Krumbein 1941、第53図下）も他の集石と著しく相違することから、本稿の概念でいう集石とは違うものと判断した。

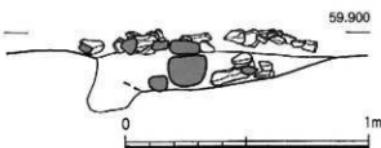
上面

—

下面

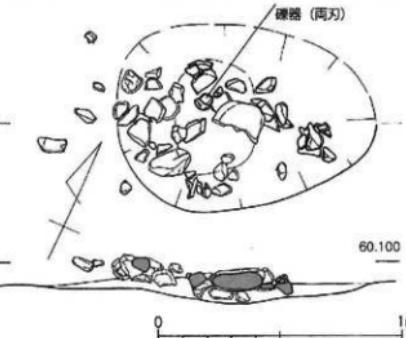
—

第5図 1区1号集石



59.900
0 1m

第5図 1区1号集石



第6図 3区1号集石

3区1号集石(第6図)：3区の北壁付近、やや東寄りの本遺跡の集石中、最も高所に位置する。

削平が著しくローム層の上層に縄文早期の包含層が10cmほど残存する状態で集石を検出した。それを物語るかのように集石検出時には付近より弥生土器1点も出土した。よって、集石の残存状況は良好ではない。

拳大前後の礫で主に構成されるが、なかには人頭大の礫も2点存在する。浅い掘り込みをもつ。礫の被熱に關しては、現場では多少被熱があるものと思われたが、持ち帰り後、洗浄し肉眼観察したところ、75%ほどが確実に被熱していた。

なお、集石内での接合はみられなかったが、集石を構成する礫中に、礫器1点(両刃)が存在することが判明した。

3区2号集石(第7図)：3区中央やや東寄りに位置する。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。

上部の礫は拳大前後～拳2個分ほどのもので構成される。下部は拳大前後～拳2個分ほどのものを主体としつつも、それに入頭大の石も構成に加わる。掘り込み内で、人頭大の平石を中心にやや平坦を志向していると考えられる。

集石内での礫の接合は9組、他の集石との接合(3区5号集石)が1組、確認できた。前者の場合、接合する礫は、上部なら上部、下部なら下部という範囲での接合にとどまらず、上部と下部間においても接合をみた。また礫の被熱は、ほぼすべてにあることが確認できた。さらに、集石を構成する礫の中から、磁石(第30図9)と凹石が確認された。

3区3号集石：調査時は、集石として判断したものであるが、以下の理由から削除した。2号集石の北側に位置する。上層のアカホヤはすでに削平されている箇所である。

礫の状況は、集まっているものの、やや散在するような傾向にあった。礫の大きさは拳大ほどである。礫除去後、浅い掘り込みがみられたので、掘り下げたところ、埋土にアカホヤブロックが混じるものであったため、縄文早期には伴なわないものと判断し、当該期の集石ではないと判断した。

なお、礫の被熱は80%近くあるものの、礫の円磨度の傾向(Krumbein 1941、第53図下)が他の集石と著しく相違することを付記しておく。

3区4号集石(第7図)：3区の中央、西端に位置する。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。礫層の上位に當まれた集石である。よって当初は集石であるのか認定に苦しんだ。しかし、遺構検出時に、被熱している石が当該箇所に密に観察できたこと、礫層の石に比べ、集石を構成していると思われる石のほうがやや丸みを帯びていることから集石として認定し、調査の結果、下部に人頭大以上の平石を配置していることを確認するに至り、最終的に集石と判断した。

上部は拳大～拳よりやや大きめの礫で構成されていた。礫層の上位に集石を営むという性格上、礫層の礫と、集石の礫を完全に分類することは難しく、現場での肉眼観察によって被熱している礫が密集する範囲を集石として認定した。上部の礫を除去すると、下部の中心は、人頭大～人頭大以上の礫で構成されていた。この下位には、礫層の礫を取り除いて造ったと思われる掘り込みを確認した。礫層の上に、集石という性格上その範囲を明確にすることは難しいが、少なくとも下部を構成する人頭大～人頭大以上の礫を埋め込み、平坦に配置するだけの広さはあることが確認できた。

集石内での礫の接合は5組確認できた。また、集石を構成する礫の被熱の度合いは、90%近くであった。

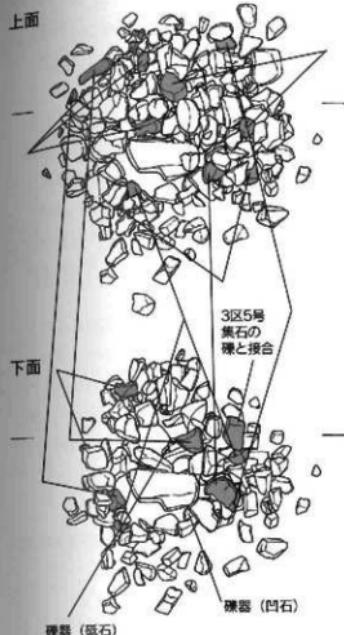
なお、集石内もしくは集石付近より縄文土器が出土している。

1は口縁片で、端部は丸い。器形はやや外方を向く。調整は内外面とともに条痕の後ナデである。外面の条痕は斜め方向、内面のそれは横方向である。2・3は脛部片である。两者ともに一見無文に見えるが、2は、外面が斜め方向の条痕をJ字にナデ消すもので、注視しないと条痕の痕跡を確認できない。内面はナデ調整である。部位は、下端部の屈曲具合から脣部片でもやや下位の方であろうか。3は内外面ともナデ調整である。

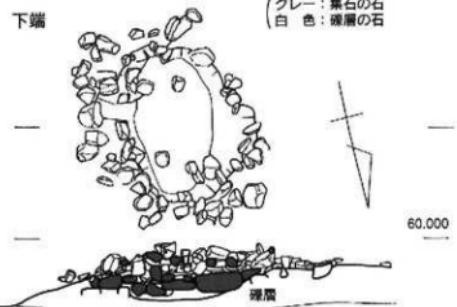
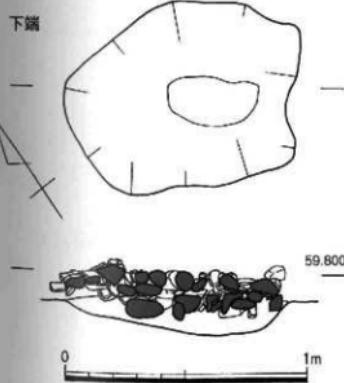
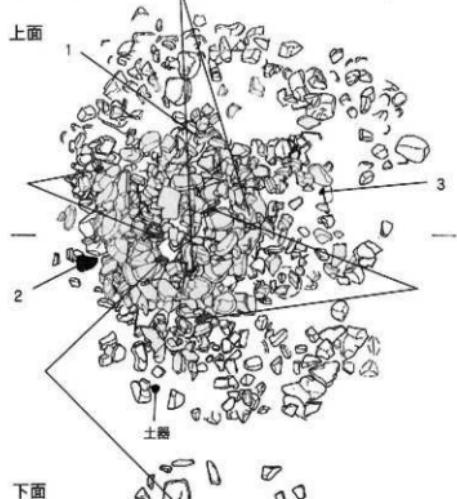
3区5号集石(第8図)：3区の中央、やや南寄りに位置する。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。

拳大～拳2個分の礫で主に構成されるが、なかには人頭大の礫も存在する。今までの集石で確認できたよう

3区2号集石



3区2号集石



第7図 3区2号集石（左）、4号集石（右）および出土土器

に、下部に、人頭大の礫を敷くということも、
掘り込みをもつということもない。

念のため集石の下位を掘り下げると、まばらに礫が出土した。しかし、これは集石に伴なうものではなく、ローム層の中に入り込んでいるもので、基盤層と判断した（第4図の地山Bに対応）。

集石内での礫の接合が5組、他の集石との接合（3区2号集石）が1組確認できた。また、集石を構成する礫のほぼすべてに被熱が確認された。

3区6号集石（第9図）：3区の中央、南端に位置する。前述の5号集石の南側である。
包含層に伴なう礫を除去後に確認した。

拳大～拳2個分の礫で構成される。前述の5号集石同様、下部に、人頭大の礫を敷くということも、掘り込みをもつということもなかった。

集石内での礫の接合は2組確認できた。また、集石を構成する礫のほぼすべてに被熱が確認された。さらに、集石を構成する礫の中から、片刃器が確認された。

3区7号集石（第10図）：3区の中央、南端に位置する。前述の6号集石の西側である。
包含層に伴なう礫を除去後に確認した。

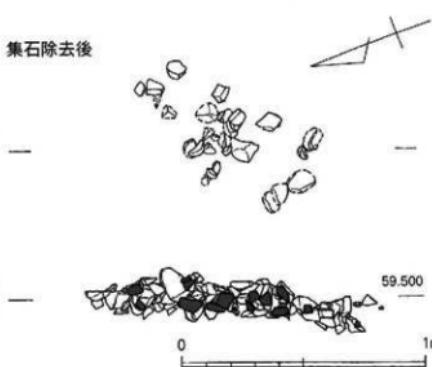
拳大～人頭大の礫で構成される。浅い掘り込みをもつ。この掘り込みの直上では炭化物も出土した。

念のため、浅い掘り込みの確認後、半切し、
掘り込みの下層を確認したが、見解が変わることはなかった。

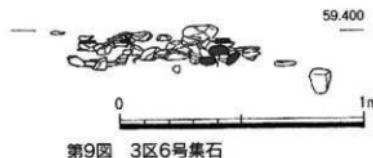
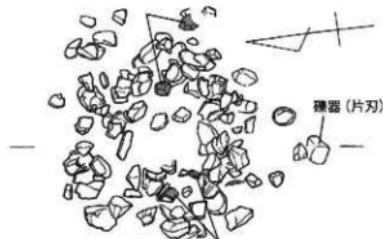
集石内での礫の接合は2組確認できた。また、集石を構成する礫のほぼすべてに被熱がみられた。

4区1号集石（第10図）：4区中央東寄りの4区の集石中もっとも高所に位置する。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。

拳大前後～人頭大の礫で構成される。下部は、掘り込み内に人頭大～人頭大よりやや大



第8図 3区5号集石



き目のものを配置しており、それらは礫の上面をやや平坦にするように配されている。

集石内での礫の接合は4組が確認できた。また礫の被熱は、すべてにみられる。

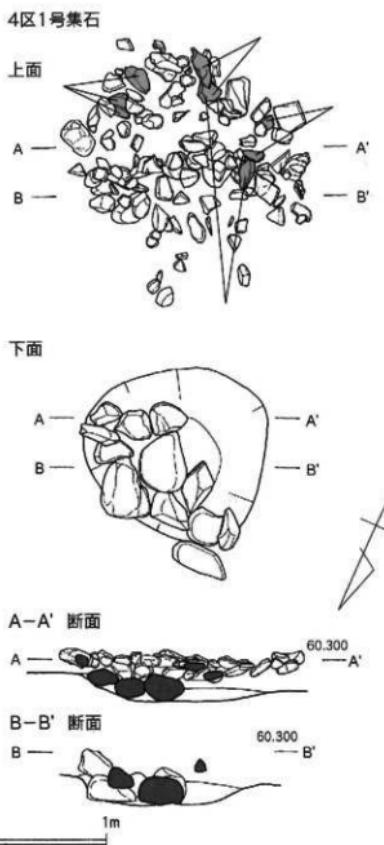
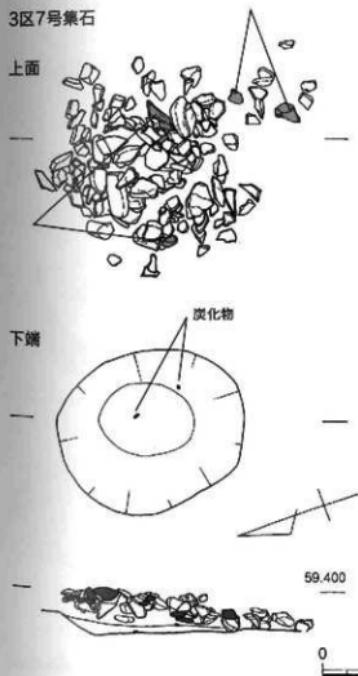
4区2号集石（第11図）：4区のほぼ中央に位置する。南側には試掘トレンチが南北に走る。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。

拳大前後～人頭大の礫で構成される。浅い掘り込みをもつ。

集石内での礫の接合は8組が確認できた。また礫の被熱は、すべてにあることが確認できた。なお1は、集石の西端で出土した獨文上器片である。剣部片と思われるが、調整は内外面ともに条痕の後ナデである。条痕の方向は外面が横、内面が斜めである。

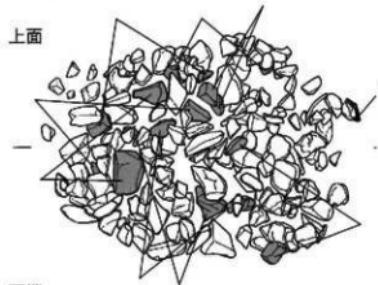
4区3号集石（第11図）：4区の中央、やや南寄りに位置する。すぐ北側には4号集石・5号集石が所在する。

包含層に伴なう礫を除去中に確認した。一部を礫層の上位に営む集石である。上層の中世後期～近世初期と考えられる柱穴の掘り下げ時に、その下端付近から被熱した礫が確認された。よって集石の可能性

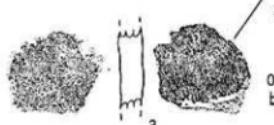
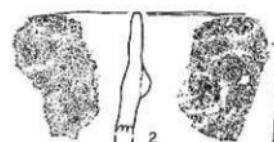
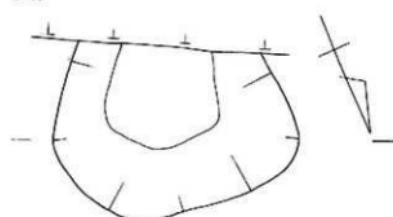


第10図 3区7号集石（左）および4区1号集石（右）

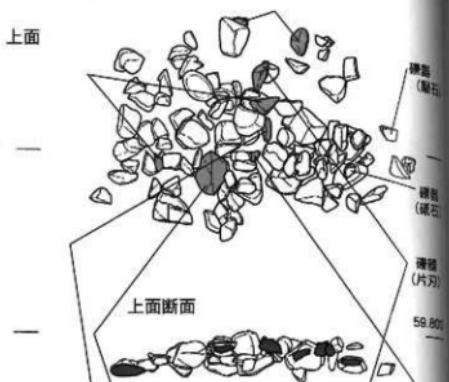
4区2号集石



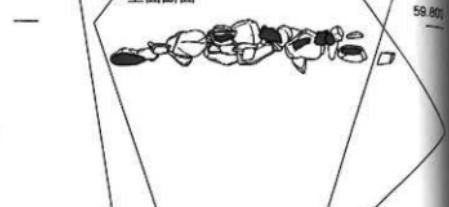
下端

※4区2号集石 (1)
4区3号集石 (2,3)

4区3号集石

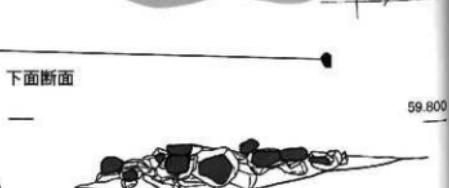


上面断面



59.900

下面

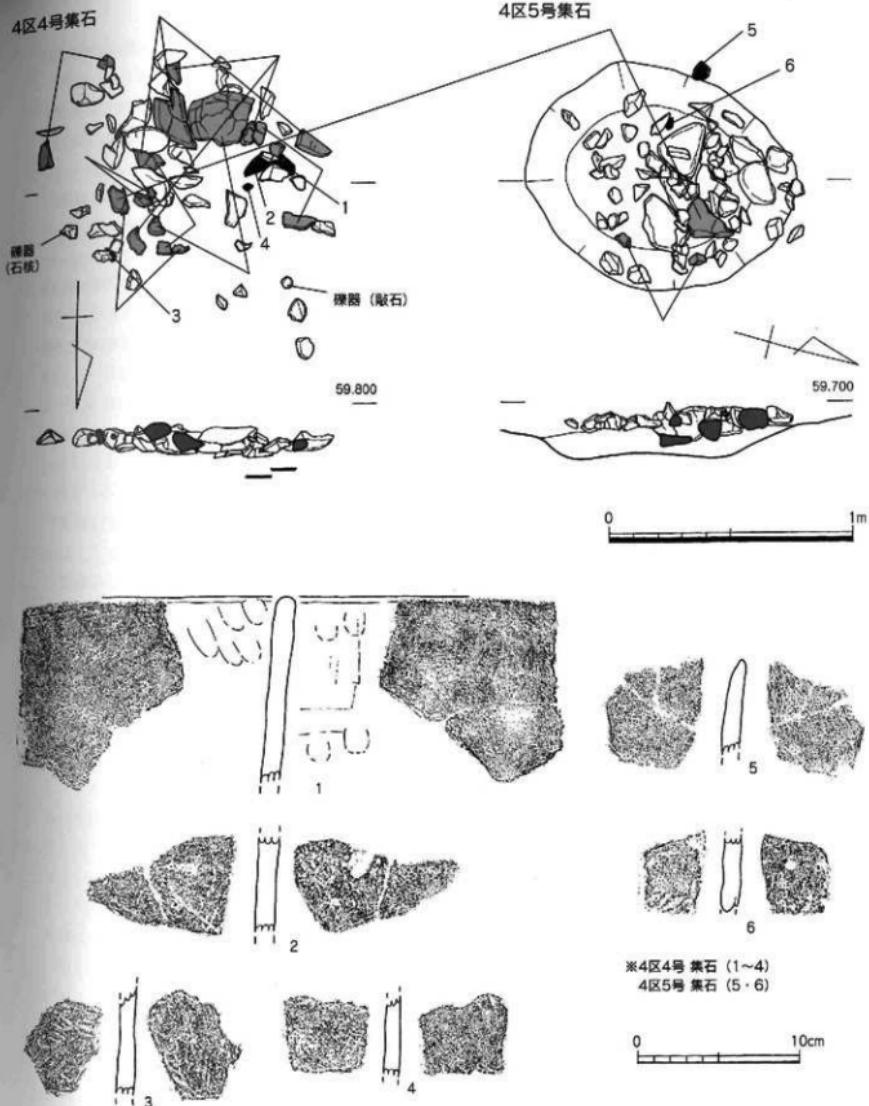


59.800

10cm

1m

第11図 4区2号集石 (左)、3号集石 (右) および出土土器



第12図 4区4号集石(左)、5号集石(右)および出土土器

をその時点で想定していた。

上部は、拳大よりやや小さめ～人頭大の砾で構成されていた。下部は、拳大よりやや大きめの砾を主体として構成されており、また砾の上面をやや平坦にするように配されていた。ただししかし、その配置に丁寧さは感じられなかった。

その下位には掘り込みがあった。一部を礫層の上位に集石を営むという性格上、礫層の礫と、集石の礫を見分ける作業が必要であった。現場作業時の観察では、集石の上位の礫と下位の礫では、下位の礫の方が被熱の度合いがより強く、被熱による亀裂や欠損を伴なう礫が多かった。それに比べ、礫層の礫は、被熱しておらず、また礫も角張ったものが多く、その大きさも拳大前後と小さい。人為的な配置とも考えられない、以上のことから2者を分離することができた。

集石内での礫の接合は8組が確認できた。接合する礫は、上部なら上部、下部なら下部という範囲での接合にとどまらず、上部と下部間においても接合をみた。また礫の被熱は、ほぼすべてにみられた。さらに、集石を構成する礫の中に、両刃礫器・片刃礫器・敲石・砥石が確認された。

なお、集石内もしくは集石付近より繩文土器が出土している。図示する2点は、两者とも集石よりやや離れた位置より出土したものである。2は集石の東側で出土したもので、外面口縁部直下に円形の崩れをもつ。口縁端部は丸い。器形は心もち外方を向く。調整は内外面ともナデである。3は集石の南側で出土したもので、胴部片である。内外面とともにナデ調整である。

4区4号集石（第12図）：4区の中央、やや南寄りに位置する。すぐ西側には5号集石が、南西には3号集石が所在する。包含層に伴なう礫を除去中に確認した。

拳大～人頭大よりやや大きめの礫で構成されるが、ほかの集石に比べやや雑然としている。掘り込みもない。集石内での礫の接合が8組、他の集石との接合（4区5号集石）が1組確認できた。また礫の被熱は、ほぼすべてでみられる。さらに、集石を構成する礫の中から、石核と敲石（第30図1）が確認された。

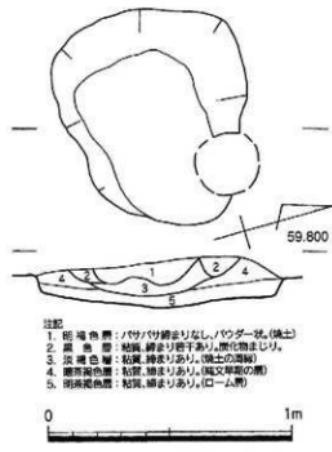
なお、集石内（3・4）、集石下層（1・2）より繩文土器が出土している。1・2・4が無文、3が条痕文である。1は口縁片ではば直立する。端部は隅丸の方形を呈す。調整は、外面が横方向の工具ナデの後ナデ、内面がナデである。内外面ともに口縁付近に指頭圧が立つ。2～4は胴部片である。2・4の調整は内外面とともにナデ調整である。3のそれは、内外面とも条痕の後ナデである。条痕は外面が斜め方向、内面が横の後斜め方向である。なお、外面の条痕はほとんどナデ消されており、一見するとナデ調整のみの無文土器に見える。同様の破片（口縁片）が、残念ながら図示していないが、2区南西側土柱より出土している。

4区5号集石（第12図）：4区の中央、やや南寄りに位置する。すぐ東側には4号集石が、南側には3号集石が所在する。包含層に伴なう礫を除去後に確認した。

拳大前後～人頭大よりやや大きめの礫で構成されるが、4区4号集石同様、ほかの集石に比べやや雑然としている。しかし一方で、人頭大～それよりやや大きめの礫は、丁寧さは感じないものの、上面をやや平坦にするように配されている。よって上部の礫の部分は残存しておらず、下部のみが残存する集石と判断した。下位には掘り込みがある。

集石内での礫の接合が1組、他の集石との接合（4区4号集石）が1組確認できた。また礫の被熱は、ほぼすべてで確認できた。

なお、集石内より繩文土器（5・6）が出土している。5は、内外面の調整は摩耗のため不明であるものの、無文土器と考えられるものである。口縁端部は丸い。また口縁端部付近に黒斑がみられる。6は胴部片である。下端部に



第13図 2区焼土

粘土の接合痕が確認できる。外面ともにナデ調整である。

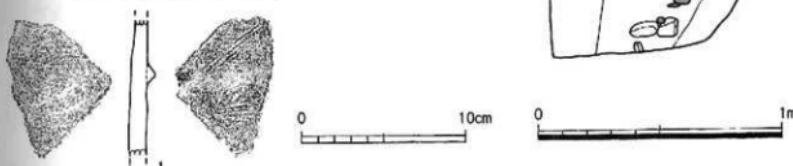
2区焼土（第13図）：2区の西端の中央部に位置する。遺構検出時に確認したもので、その帰属時期に関しては慎重を要した。埋土にアカホヤが含まれない点、周辺に薄くではあるが縄文早期の包含層が残存する点から当期に伴うものと判断した。焼土内では、1~2cm程度の炭化物が若干みられた。よって念のため、埋土を持ち帰り、一部を洗浄したが、種子等は検出できなかった。

2区1~3号土坑（第14図）：2区のほぼ中央部に東西に3基並んで位置する。西から1号・2号・3号土坑である。どの土坑も長軸が0.5m~1.0m内におさまる規模である。埋土はすべて縄文早期の、2層に似たもので、色調はそれよりやや淡い暗茶褐色であった。よって当該時期に伴うものと判断した。

2号土坑からは縄文土器が、3号土坑からは縄文土器（第14図1）と頁岩製の2次加工剥片が出土している。1の出土した縄文土器は、外面に瘤をもつ。瘤は第11図2のような厚ぼったい円形の瘤ではなく、それよりも小ぶりで、円錐状を呈す整美なものである。上端部は口縁部下付近と思われるが、調整等をみるとかぎりその兆候は確認できない。調整は、外面が条痕後ナデ、内面がナデである。なお条痕の方向は横のち斜めである。

4区1号土坑（第15図）：4区北東のコーナー付近に位置する。土坑内より、礫のほか、縄文土器が出土した。縄文土器は検出中より、概ね同一の個体である可能性が予測できた。よって、念のため残存する埋土を半切し、土層が分層できるか確認したが、分層できないものと判断した。なお、埋土は2区1~3号土坑同様、縄文早期のIV₂層に似たもので、色調はそれよりやや淡い暗茶褐色であった。

出土した土器の個体数識別の結果、2点を除くほかの破片が同一と考えられる条痕後土器の破片であった。残り2点のうち1点が、4に示した条痕後土器、もう1点が前二者と別個体の図示に耐えないものであった。



第14図 2区1~3号土坑、および3号土坑出土土器

1～3は、同一個体と考えて間違いない条痕文土器である。1が口縁部～胴部上位、2が口縁部～胴部下位、3が底部である。口縁部はほぼ直立し、胴部～底部にむかってゆるやかにすぼまる。口縁端部の断面は隅丸方形を呈す箇所と、丸い箇所とがある。底部は丸底である。外面口縁部直下には1のように焼成前穿孔が確認できる。完存せず、半欠するものであるが、その径は1cm前後と考えられる。また内面胴部上位には1のように径1cm程の竹管状のスタンプが確認できる。これもやはり穿孔を志向したものと考えられ、穿孔する場所の目印として利用したものの、結局は何らかの理由で穿孔を行わなかつたものと推察する。調整は、内外面とも条痕のちナデである。条痕は、口唇部付近では横方向、底部内面では螺旋状に施すほかは、斜め方向である。そのほか、外面には墨斑、内面下位には煤の付着が確認できる。

4は、1～3とは同一個体ではない縄文土器の口縁片である。1～3に比べ器壁が薄く、また焼成具合が良く、一日別個体と察しがつくものである。調整は内外面ともに条痕（ナナメ）後ナデである。また内面に煤が付着する。

5は、中央部に穿孔が確認できる石である。しかし、この穿孔が人為的なものなのか、自然なもののかは賛否両論である。筆者は、断面にあるように両面から穿孔したように見える点、圓面むかって左側の圓にあるように穿孔時生じたと考えられる縫がある点、横断面でみると穿孔が垂直ではなく、やや斜めであることから自然の穿孔ではないと考える。なお、石材は砂岩である。

包含層ほかの出土遺物（第16～30図、第1～6表）

包含層から、土器・小型の剥片石器・礫器が出土した。礫器に関しては包含層中に含まれる礫を、前述の様に、主に上位に散在する礫をトータルステーション、下位の礫層とも呼ぶべき箇所を 3×3 のグリッドにより取り上げた（第3図）。その後、洗浄をおこない、礫器であるか確認をおこなって得られた結果である。100点以上の礫が人為的な剥離をされていることがわかった。そのほか後世の柱穴や表探資料としても土器・小型の剥片石器・礫器が出土しており、それに關しても本稿で図示している。

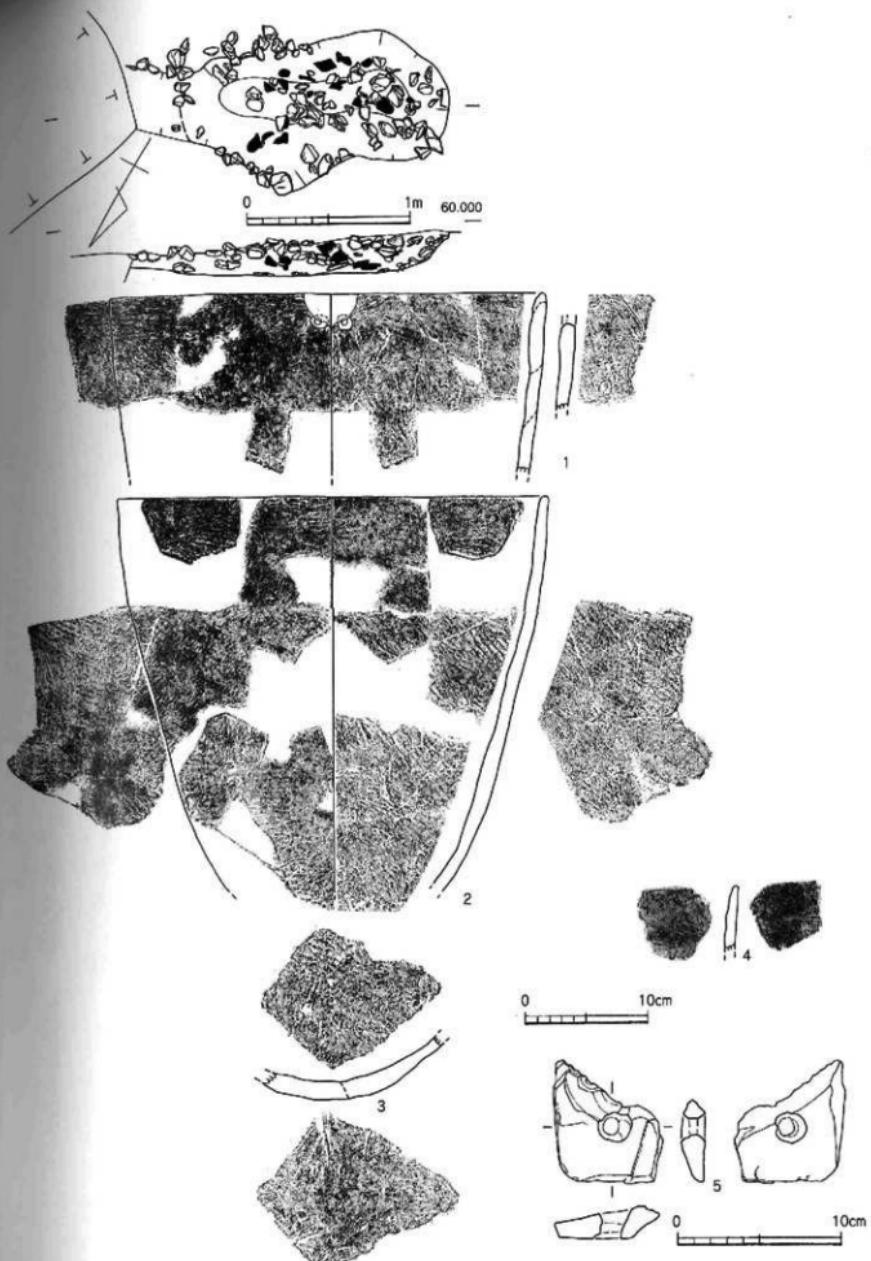
なお、これらのうち、トータルステーションで取り上げをおこなった遺物の分布状況は第16図のとおりである。何度も繰り返すようであるがまさにこれらの下位の礫層とも呼ぶべき層は、 3×3 のグリッドごとに取り上げた（第3図・第55図参照）。

第16-1図（上）は、土器や礫の接合関係である。残念ながらこれら包含層に含まれる礫と集石とは接合しなかつた。土器・礫とも隣接するものが主に接合している。その一方で、土器②・礫③⑩のようにやや距離の離れたものもある。

第16-1図（下）は、縄文土器の垂直分布図である。縄文土器は、大きく条痕文・無文・押型文・撲糸文に分類できる。底部はこれら4者のいずれに伴なうものかは接合では確認できなかつたので調整不明にしている。分布状況をみると、レベルから2つに分類できる。両者とともに、本遺跡中で大多数を占める条痕文土器・無文土器を伴なっている。しかし、土層で確認できるIV₁とIV₂層との境では明確な差はでなかつた。

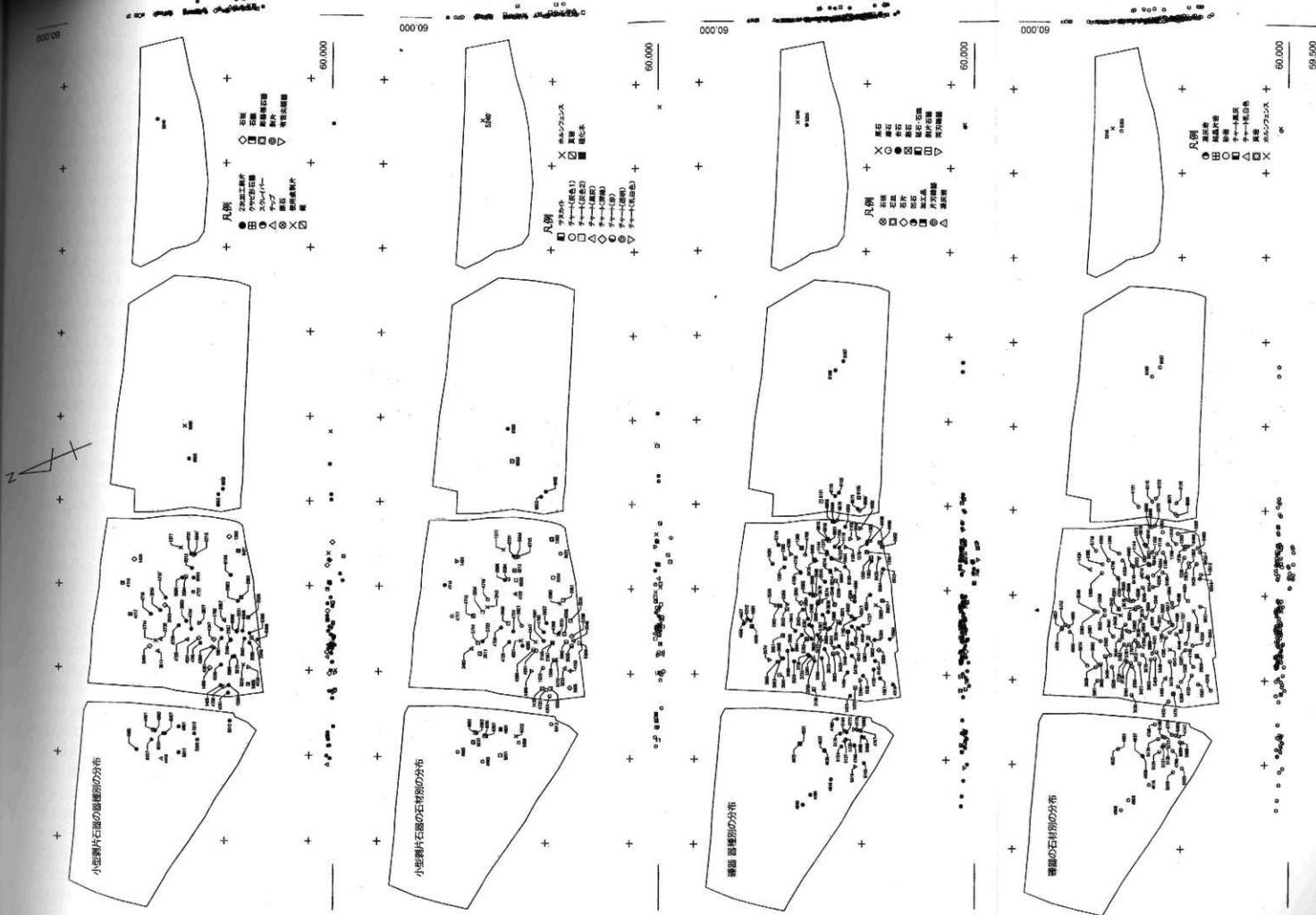
第16-2図は、小型剥片石器、および礫器の巣種別・石材別の垂直分布である。なお、最も出土したチャートは、色調・質等から7種類に分類した。小型剥片石器では、細分したチャートが、同じ細分同士で近接して分布するものもあることから、接合作業にもっと時間を割けば結合する可能性がある。土器同様これらの分布でも、レベルから2つに分類できる。しかし両者との境は縄文土器同様IV₂層中であり、土層で確認できるIV₁とIV₂層との境では明確な差はでなかつた。

縄文土器は、大きく条痕文・無文・押型文・撲糸文に分類できる。なお、底部はこれら4者のいずれに伴なうものかは接合では確認できなかつた。また少量ではあるが土器加工品も出土している。以下この分類にしたがつて略述する。



第15図 4区1号土坑 遺構図および出土遺物





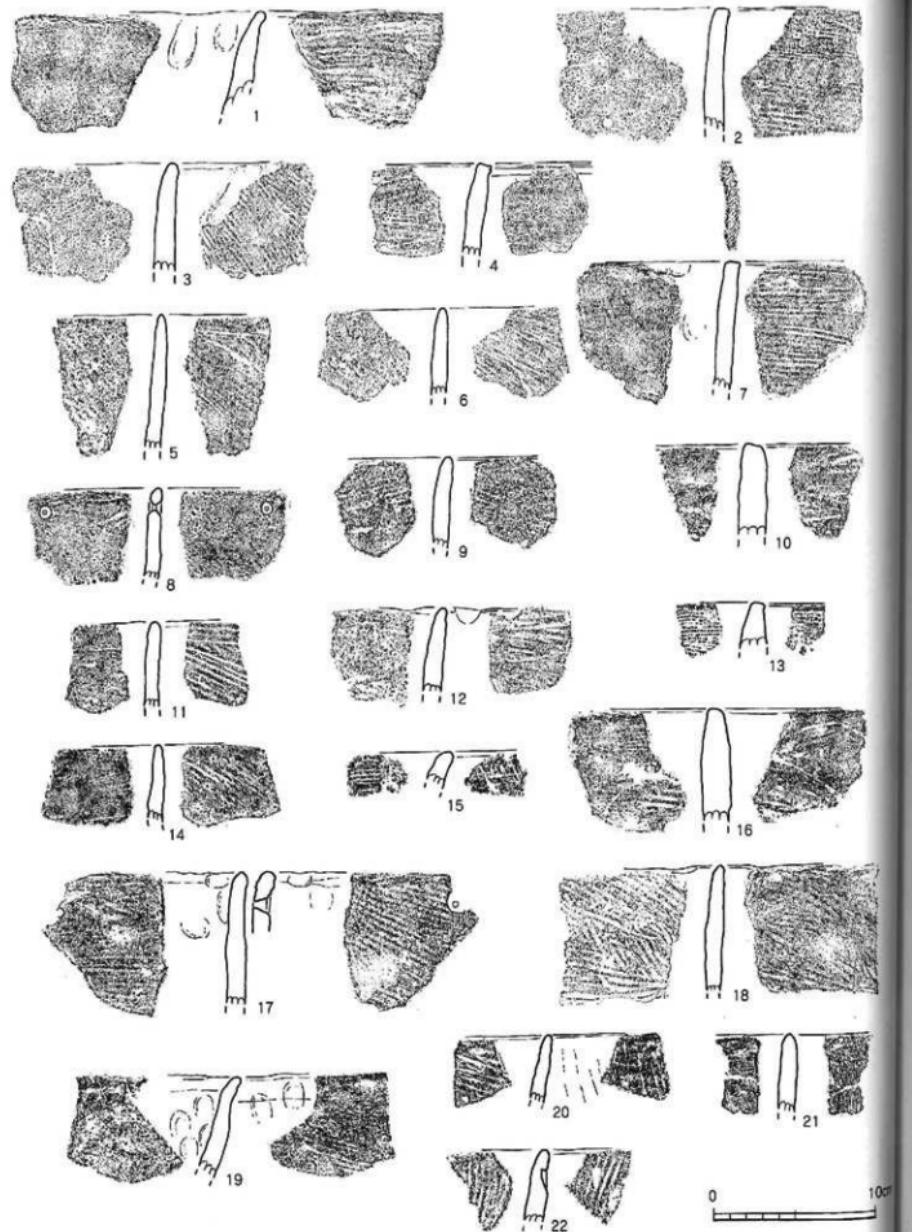
第16-2図 石器の垂直分布図

縄文土器（第17～22図）

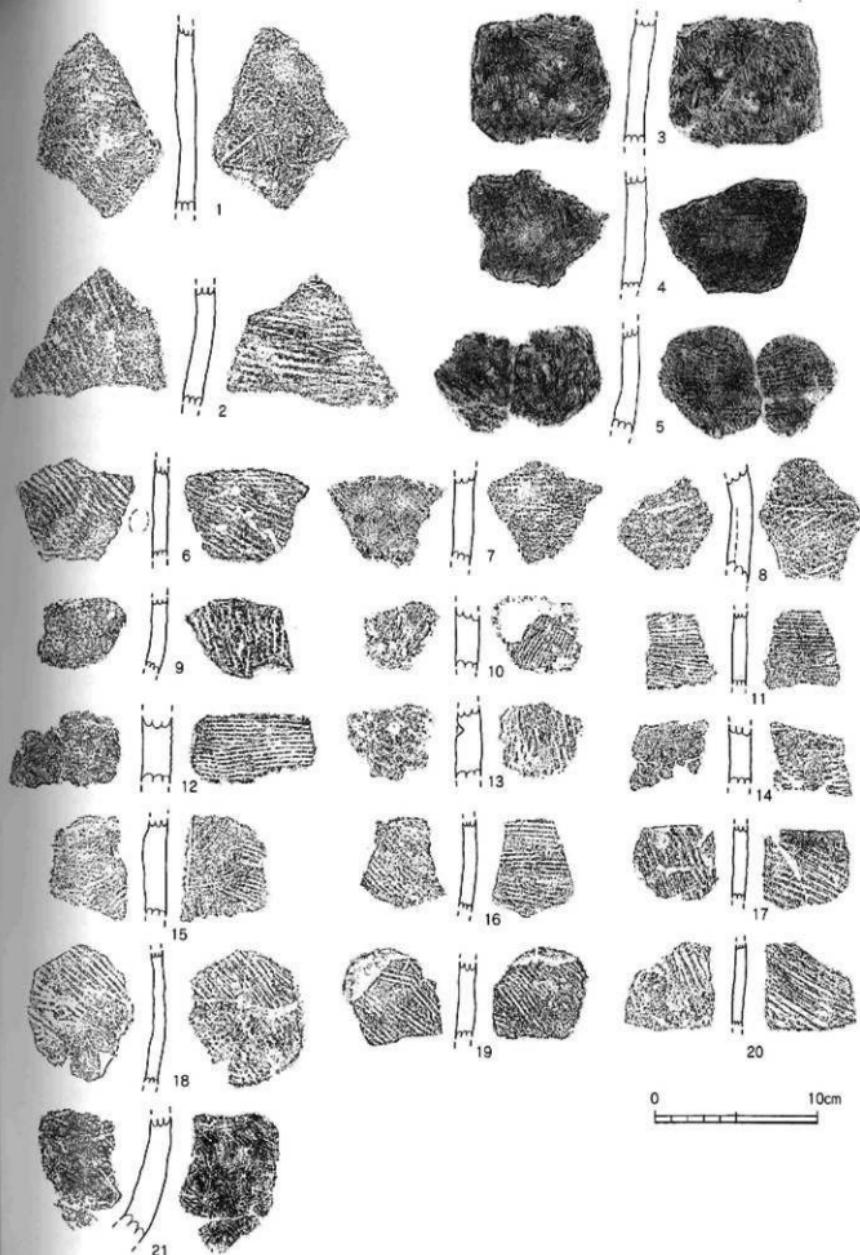
①条痕文土器（第17・18図）

器形は、①直立するもの・②ほぼ直立であるものの、やや外傾するもの・③外傾するもの・④外反するものの4つに分類できる。口縁端部からは、A：丸いもの・B：方形のもの・C：やや方形のもの・D：方形で口唇部外側がやや突出するもの・E：端部がやや方形で、やや外反するものに分類できる。器壁の厚さからはa：0.5cmをややこえるもの・b：1cm前後・c：1.5cm前後・d：2cm前後分類できる。口縁部片より説明する。第17図が口縁部である。

1は器形が外傾し、口縁端部はやや方形で、やや外反する。調整は、外面が横方向の条痕、内面がナデである。2は器形がやや外傾し、口縁端部は方形である。外面が横方向の条痕、内面がナデである。3は器形がやや外傾し、口縁端部は丸い。外面が斜め方向の条痕、内面がナデである。条痕の雰囲気は2に似る。器壁の厚さも、1.2cm・1.3cmと近い。4は器形がやや外傾し、口縁端部が方形で口唇部外側がやや突出する。調整は、外面がナデ、内面が口縁部付近が横方向の条痕、それより下位が斜め方向の条痕後、ナデである。5・6・11・14は、器形が直立し、口縁端部は丸い。色調・胎土ともに類似するものである。しかし、条痕に違いがみられる。5・11は、外面の調整において、斜め方向の条痕を主体としつつ、口唇部は斜め後、横方向の条痕を施す。しかし6・14は横方向の条痕を施さず、口唇部はナナメ条痕後、ヨコナデを施す。なお、条痕の雰囲気は5・6・14が無いものに似る。11は前3者に比べ、やや幅広い印象をもつがシャープであることには変わりない。7は器形がやや外傾し、口縁端部は方形である。口縁端部に刻目がみられる。原体条痕使用か。調整は、外面が横方向の条痕、内面がナデである。条痕の雰囲気は11に似る。8は器形が直立し、口縁端部は丸い。口縁端部直下に穿孔がみられる。全体的に摩耗が著しいため、焼成前か焼成後かは判別しづらい。焼成後か？調整も同様の理由から条痕があること以外不明。9は器形がやや外傾し、口縁端部は丸い。調整は、外面が細い斜めの条痕後ナデ、内面が横方向の条痕後ナデである。10・16は器形が直立し、口縁端部はやや方形である。器壁が1.8cm・1.9cmと本遺跡の条痕文の口縁としては最も厚い。調整は双方とも、外面において、横方向や、從来の左上がりの条痕のほか、口唇部において左下上がりの条痕を施す。その後ナデである。12は器形がやや外傾し、口縁端部は丸い。調整は、外面が10・16同様、從来の左上がりの条痕、口唇部において左下上がりの条痕を施すほか、口唇部において横方向の条痕を施す。条痕の雰囲気も10・16に似る。そののち、今まで当園で説明してきた条痕後ナデ調整のどの土器よりも、比較的丁寧なナデをおこなっている。一部では完全に条痕が消えている。内面はナデである。器壁は、1.1cmと10・16の概ね1/2である。13は器形がやや外傾し、口縁端部はやや方形である。内外面とも細くシャープな条痕を横方向に施す。15は器形が外傾し、口縁端部は丸い。調整は、小片のため慎重を要すが、外面は横方向の条痕の後、ケズリ状の縱方向の条痕である。そのナデを施している。内面は横方向の条痕である。17は器形が直立し、端部で心持ち外傾する。端部は丸い。またナデ調整のためやや歪曲している。調整は外面が斜めの条痕、内面が横方向の条痕の後ナデである。口縁端部直下には外面から行われた焼成後穿孔が確認できる。18は器形が直立する。端部は丸く、ナデ調整がやや丁寧さを欠き、歪曲している。調整は内外面とも条痕である。条間の幅は5mm程と本遺跡中の条痕で最も幅が広い範囲に入るものの、整美な条痕であることは注目に値する。内面では条痕同志の切合いか明確に確認でき、下から上へ横方向から斜め方向に条痕の向きが変化することが確認できる。焼成は本遺跡中最も良好な部類にはいり、第19図17と同様に堅敏である。19は、器形は外傾し、口縁部はさらに外反するものである。端部は丸く、ナデ調整がやや丁寧さを欠き、歪曲している。調整は、外面が斜め方向の条痕後ナデ、内面がナデである。指頭圧が目立つ。20は器形が外傾し、口縁端部は丸い。調整は、外面が工具アフターナデ調整である。ナデ調整前は、器壁の具合からその他の調整もあると思われるが、ナデ調整が丁寧であるため不明である。内面は条痕である。21は器形がやや外傾し、口縁端部は丸い。調整は外面が縱方向に擦痕のような細い条痕か確認できる。内面はナデである。22は器形が外傾し、口縁端部は丸い。内外面とも縱方向に近い斜めの条痕が確認できる。また外面口縁端部直下には刺突が確認できる。



第17図 縄文時代早期の土器（条痕文および刺突文・口縁部）



第18図 縄文時代早期の土器（条痕文・脇部）

これらの内、器壁に関しては、本文中にとくに記載がない限り、1cm前後～1.5cm程である。

出土場所は、1～15までが、IV₂層、16～18が、IV₁層、19～22が包含層出土である。

胸部は第18図である。1は調整において、内外面とも条痕が交差するように施している。詳細はその後のナデ調整が丁寧なため条痕が一部でしか残存せず不明である。2も同様に外面において交差する条痕が確認できる。条痕の雰囲気は第17図10・16に似る。しかし、その後のナデ調整は局部的で条痕を大いに残す。13も同様な条痕の雰囲気である。条痕も交差している。第17図10と器壁の厚さが似かよっており、同一個体といかないまでも同一器種の可能性もある。内面に焼成後穿孔途中らしきものがある。また煤も付着する。3～5は、第20図6・7同様に内面が白っぽいものである。3の調整は、外面が縦・横の条痕が確認できる。その後ほとんど条痕がわからない様にナデを施すため、縦・横の条痕の切り合いの先後関係は判別がつかない。内面も条痕の後、同様の丁寧なナデを施す。4・5の外面の調整は、3に比べナデ調整が丁寧ではなく、条痕が残る。しかし、内面は3同様丁寧なナデで、器壁の微妙な凹凸で条痕を確認できる。6・17～19は、内外面とも条痕間が2mm強幅で凹凸のしっかりした条痕である。19の内面を除き、その後ナデ調整を施す。器壁は1.7・1.8が若干薄い。14も外側は同様の条痕であるが、内面はナデ調整である。7・10・11は、外面の条痕がハケ状のものである。内面は、7・10がナデ調整である。11が荒いハケ状の条痕である。8・9は外面が交差する条痕を施した後、比較的丁寧なナデを施す。12は外面に比較的凹凸が明瞭で、条痕幅2mm弱の条痕を施す。6・17～19に比べ凹凸が不明瞭である。器壁は1.9cmと第18図中最も厚い。15は外面が継やか斜め（左上がり・左下がり）の条痕が交差するものである。文様を意識しての行為とも考えてしまうが、破片のため詳細は不明である。16は、2mm弱の条痕幅で凹凸があまりないものの、整美な条痕を外面にもつものである。条痕の雰囲気は第17図2・3に似る。ただし、器壁は0.7cmとそれらに比べ薄い。内面には煤が付着する。20は条痕幅3mm程の荒い条痕を内外面に施すものである。内面には煤が付着する。器壁は0.55cmと最も薄い。21は脇部下部で底部に近いと思われる。内外面とも条痕の後ナデである。条痕はケズリ状のものである。器壁は1.8cmである。そのほか図示していないが、包含層中より外面の条痕をほとんどナデ消して、一見無文に見えるもの（注記：2区南西側土柱041006）が出土している。

これらの器壁はとくに記載していない限り、1cm前後～1.5cm程である。

出土場所は、5を除く1～11までがIV₂層、12・13・15～17がIV₁層、5は土器片2点が接合しており、一方がIV₁層、他方がIV₂層と両方にまたがる。14・18～20が包含層出土、21が遺構検出である。

②無文土器（第19・20図）

口縁部より説明する。第19図・第20図1が口縁部である。

器形は、①直立するもの・②ほぼ直立であるものの、やや外傾するもの・③外傾するもの・④外反するもの・⑤内傾すると思われるものの5つに分類できる。口縁端部からは、A：丸いもの・B：方形のもの・C：やや方形のもの・D：口唇部外側がやや突出するもの・E：端部が丸く、やや外反するものに分類できる。器壁の厚さからはa：0.5cmをややこえるもの・b：1cm前後・c：1.5cm前後・d：2cmをこえるものに分類できる。

第19図1は、器形が直立し、口縁端部が丸いものである。器壁は1.05cmである。口縁端部外面に指頭圧や爪痕が連続2段状にみられ文様のような状況を呈している。外面には煤、内面には黒斑状のものがみられる。2・5は、器形がやや外傾し、口縁端部がやや方形のものである。器壁は1.5cm弱である。色調が似る点、外面に工具ナデが確認できる点など、第12図1を含め同一個体の可能性もある。指頭圧が目立つ。3は、器形が直立し、口縁端部が丸くやや外反する。器壁が2cmをこえ最も厚い。脇部がやや張る。4は、口縁端部が方形で、器形は小片のため不明である。器壁は0.95cmである。6・11・14は、器形がやや外傾し、口縁端部がやや方形のものである。器壁は1cm前後である。なお、14は器壁が0.75mmとaに近

い数値である。7・12は、器形が直立し、口縁端部が丸いものである。器壁は1.5cmである。両者とも調整に工具ナデが確認できる。また、1・19を含め、外面口縁端部もしくは口縁端部や下が張る傾向にある。器形が直立し、口縁端部が丸いタイプの特徴と言えそうである。7には外面向に瘤が付着し、12には外面口縁部付近に瘤、内面には黒斑がみられる。8・10・第20回1は、器形がやや外傾し、口縁端部が方形になるものである。器壁は1cm前後である。8には口縁端部に刻目がみられる。原体条痕使用か。第20回1は外面口縁部下に瘤が残存する。復元径1.5cm程度で、あまり突出しないと思われる。器壁は1.25cmとcでも良いくらいである。第19回13は、器形がやや外傾し、口縁端部が丸いものである。器壁は0.9cmである。口縁端部に瘤の剥離痕がある。瘤は端部をまたぐ様に貼り付けられているが、その突出の中心は外面と考えられる。15は、器形が直立し、口縁端部がやや方形のものである。器壁は0.9cmである。16は、器形が内傾し、口縁端部が丸いものである。器壁は1.1cmである。内傾すると考えられるものはこれ1点のみで、小片のため傾きに関しては今後変更になる可能性もある。17は、器形が外反し、口縁端部が丸いものである。器壁は0.65cmである。第38回1とともに器壁が最も薄い部類に入る。焼成は本遺跡中の繩文土器中で最も良好で堅緻である。18・22・23・24は、器形が外反し、口縁端部が丸いものである。器壁は1cm前後である。19は、器形が直立し、口縁端部が丸い。器壁は1.2cmである。内面に瘤が付着する。20は、器形が直立し、口唇部外側がやや突出するものである。器壁は1.1cmである。21は、器形が、胴部が内湾し、口縁部が外反するものである。口縁端部は丸い。器壁は1.4cmである。25は、器形が外傾し、口縁端部がやや方形のものである。器壁は0.85cmである。

そのほか示していないが、器形が直立し、口縁端部が外反するものもある。調整が、外面が工具ナデ？後ナデ、内面がナデである。器壁は1cmほど、色調は茶褐色である。

なお、これらの調整であるがとくに記載がない限り、ナデ調整である。

出土場所は、第19回1～18・22がIV₂層、19・20がIV₁層、21・22・24・25がIV層、23・第20回1が後世の柱穴である。

胴部は、第20回2～13である。

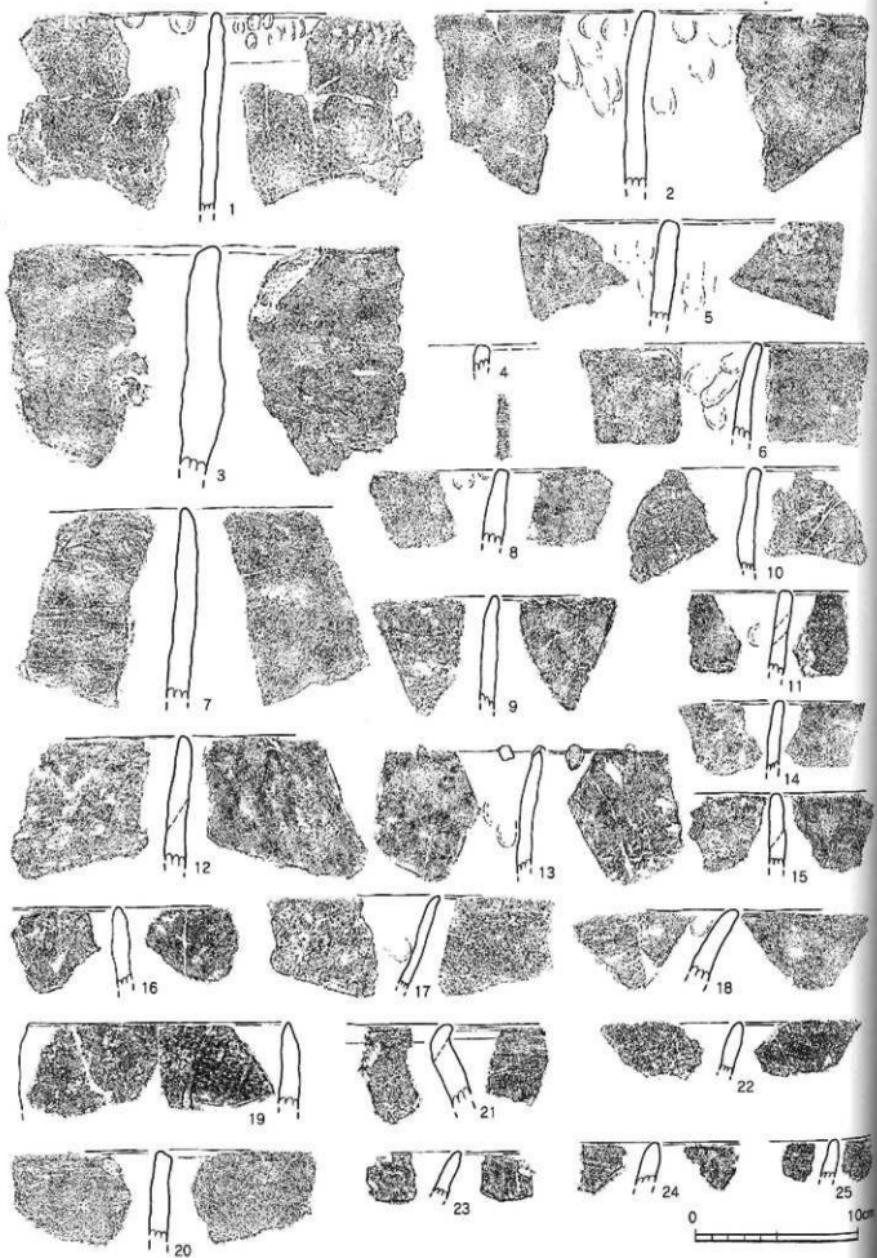
2は、外面に瘤の剥離痕と思われるものがある。剥離痕を見る限り、径は2cmをややこえる位と考えられる。そうとするならば本遺跡中最も瘤の規模が大きくなるものと考えられる。部位は、口縁部の下位にこの手の瘤がみられることから、口縁部下位であると考える。3は焼成前穿孔がみられるもので、口縁部下位の部位と思われる。4は口縁部下位から胴部上位付近である。中ほどでややくびれている。内面に指頭圧が目立つ。5は内外面とも工具ナデである。とくに外面の工具ナデはミガキ状を呈しており、やや光沢がある。また内面も一見、工具ナデの後、ミガキのように見えるが、工具ナデが一部でミガキ状になっているものと判断した。よって、外面と内面の調整工具は同一であると考える。6・7は内面がやや白っぽいものである。本遺跡内では条痕にも内面が白っぽいものがあり、同一固体かは不明である。6にはややミガキ状になるナデもしくは工具ナデが確認できる。8は一応図のように実測したが、上下逆の可能性もある。以上の胴部の調整に関しては、とくに記載がない限り、ナデ調整である。器壁は1cm前後から1.5cm前後である。

10～13は胴部下位である。12では外面に工具ナデが確認できるほかは、ナデ調整である。12では接合痕も確認できる。器壁は11・12が2cmと最も厚いほかは、1～1.5cmである。

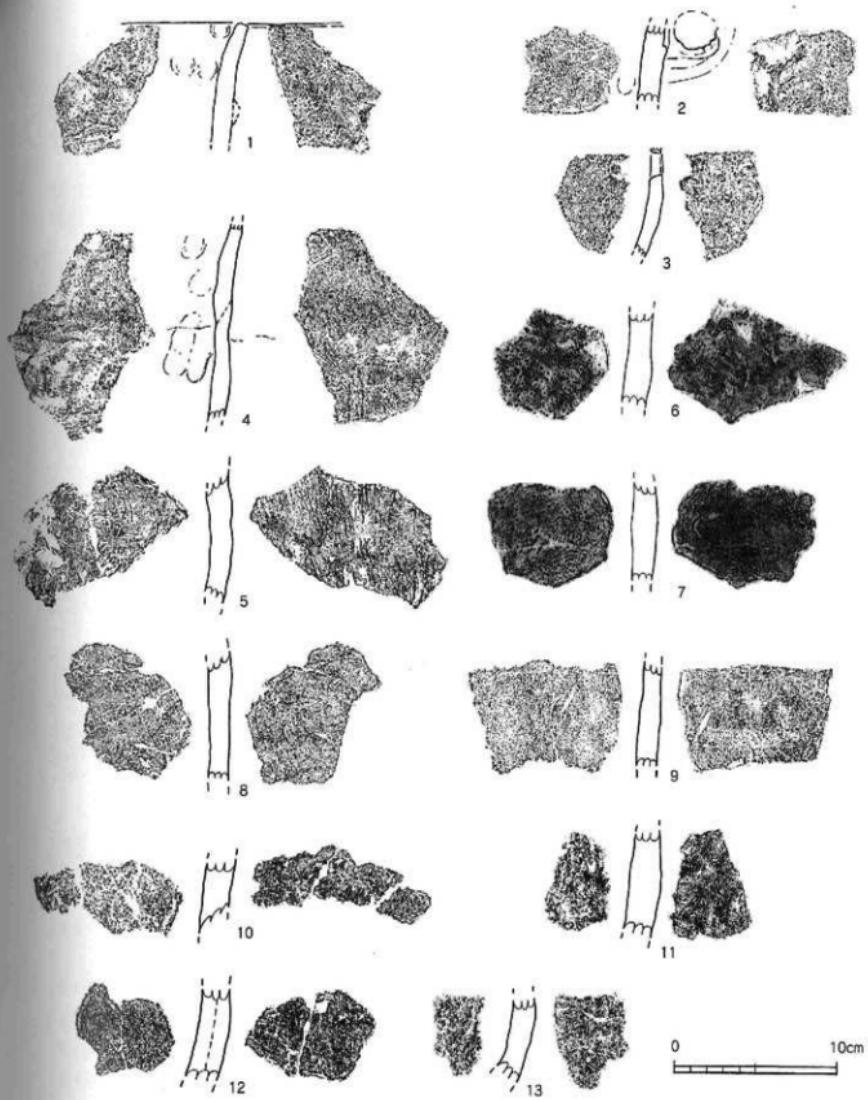
出土場所は、4・7～12がIV₂層、5がIV₁層、3が後世の柱穴、2・6が後世の土層内より出土した。

③ 摺糸文土器（第21回1～6）

1・3～5は4区出土であり同一個体の可能性もある。器壁が1.5cm前後と摺糸文の中では器壁が厚いという特徴がある。1は口縁部である。器形は外傾し、口縁端部は丸い。3は胴部上位と考えられる。4・5も胴部の破片である。これらは外面に摺糸を施す。やや摩耗するものもあり、節が確認できるものは4・5である。内面の調整は、全てにナデ調整がみられるが、4・5はその前段階に工具ナデを施す。6は同様

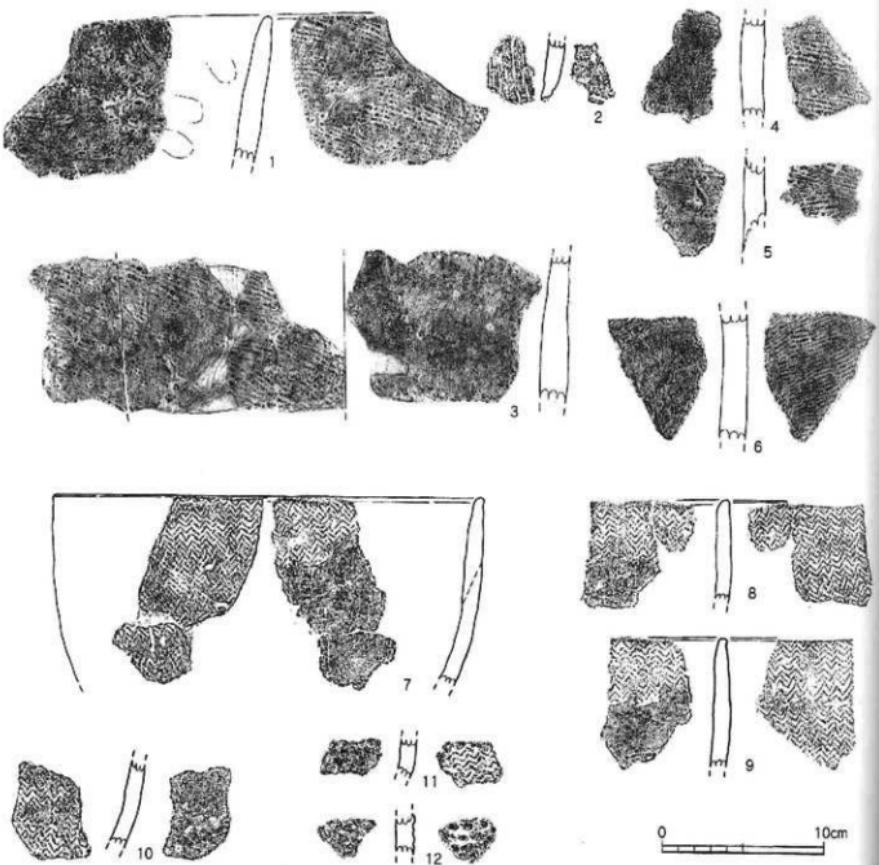


第19図 縄文時代早期の土器（無文・口縁部）



第20図 繩文時代早期の土器（無文・口縁部および胴部）

に器壁が厚いが、同一個体の可能性は全くなく、焼成・色調も全く前述のものと違う。撚糸の幅も1mm強と前者の1/2程度である。2も撚糸の幅が細い。最初は条痕と間違ったほど撚糸間の幅が狭く、節のスタンプが繊細である。端部が一部欠損するものの、口縁部の破片と考えられる。この破片は外側のみならず、内面口縁端部付近にも撚糸らしきものが確認できる。



第21図 繩文時代早期の土器（撻糸文および押型文）

④押型文土器（第21図7～12）

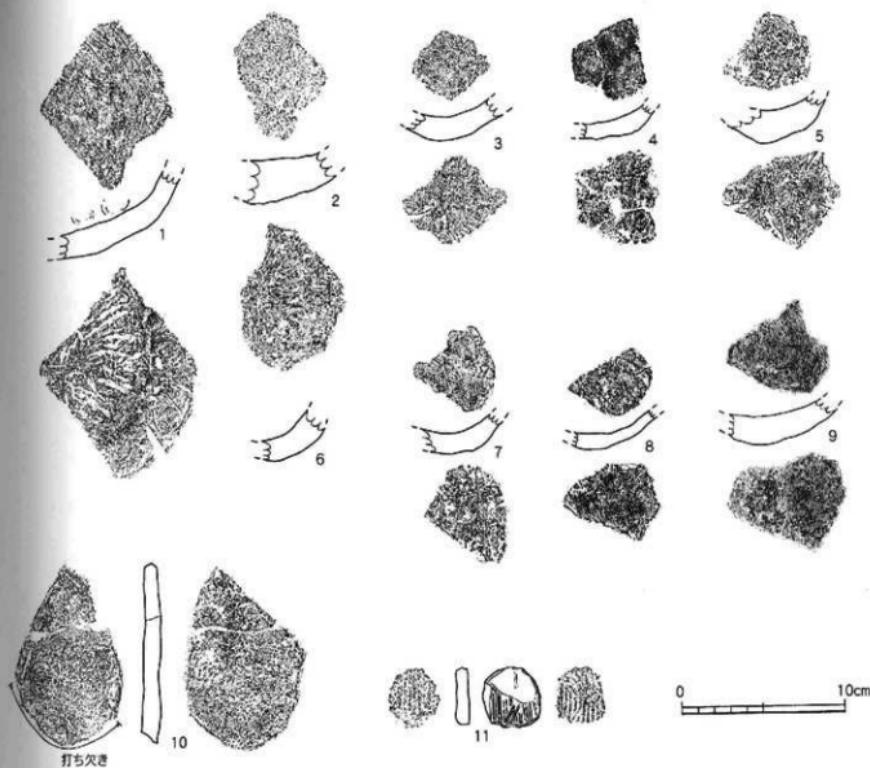
7～11は山形文、12は楕円文である。

山形文の内、7～10は、同一個体の可能性が大きい。焼成・色調・器壁厚さはいうに及ばず、内外面の山形の形が似る。7～9は口縁である。7は別々の地点で取り上げた2点が接合した。口縁から胴部上位が残存する。外面のほか口縁部内面付近にも山形文が確認できる。また外面にヨコナデにより山形文を消す箇所が確認できる。文様を意識か？なお、8・9でも口縁部内面付近に山形文を施すことが確認できる。また外面にヨコナデにより山形文を消す箇所があることは10でも確認できる。11はこれらの山形文に比べ、文様が雑である。12は、外面に楕円文が確認できる。

小片のため、詳細は不明である。

⑤底部（第22図1～9）

概ね丸底であるが、ややバラエティに富む。1の外表面は放射状にケズリというべきものを施す。2は摩耗が



第22図 縄文時代早期の土器（底部および土器加工品）

激しいが、僅かに外面に放射状の調整（工具ナデ）が確認できる。若干乳房を志向気味である。3・5・9はやや乳房上に外面が突出する。また9の外面には白っぽい付着物が確認できる。4・7・8もやや歪であるが丸底である。器壁は1cm前後～2cm半ばとバラエティに富む。

⑥土器加工品（第22図10・11）

10はメンコ製作中のものであろうか。下端部に打ち欠きの痕跡が確認できる。なお、無文土器を使用している。11はメンコである。打ち欠きにより円形を作り出している。条痕文土器使用で、外面は条痕のちナテである。

（吉田）

縄文時代の石器

縄文時代早期の包含層から多数の石器類が出土した。包含層は、上下の二層（IV₁層・IV₂層、第4図参照のこと）に分けることができるものである。

出土した石器類は、①チャートを主体とする小型の剥片石器類、②硬質の砂岩を主体とする大型の剥片石器類、③①②の母材となる石核類、④砂岩を主体とする礫器類、⑤磨石・敲石、⑥石皿等の礫石器に大別することができる。以下、その順序で記述する。

①小型の剥片石器類（第23図）

石鏃（1～6）の出土数は7点と多くない。石材はすべてチャート製である。1は細石鏃に分類されるもので長さ1.3cm、分厚く、裏面に主要剥離面を残すが調整は精緻である。2も長さ1.6cmと小さいが、先端部は欠損後再加工を行っている。IV₂層出土。3は深い抉りがあるが両脚とも端部が欠損している。4は平基の少し加工が粗いものである。5は縄文早期に典型的な鋸形縦の比較的大型のものである。6は粗い加工の木製品とみられるがスクレイパーの可能性もある。

有舌尖頭器（7～9）が3点出土している。県内に数少ない。石材はすべてチャート製である。7は完形の整美なもので、舌部の突出は鋭く、有舌系の石鏃ともいべきか、有舌尖頭器の退化したものと見えることができる。IV₁層出土。8は先端部を欠くもので、7よりも大きく、舌部もより顕著である。9も先端部を欠くが典型的な有舌尖頭器である。基部の舌部の加工は入念であり、分厚く仕上げている。IV₂層出土。

スクレイパー類（10～14、17～18）は、石材はすべてチャートである。10は平面削形の両面加工のスクレイパーであり、全周に入念な加工を施すが、一部に打面を残す。また、背面の一部に自然面を残している。

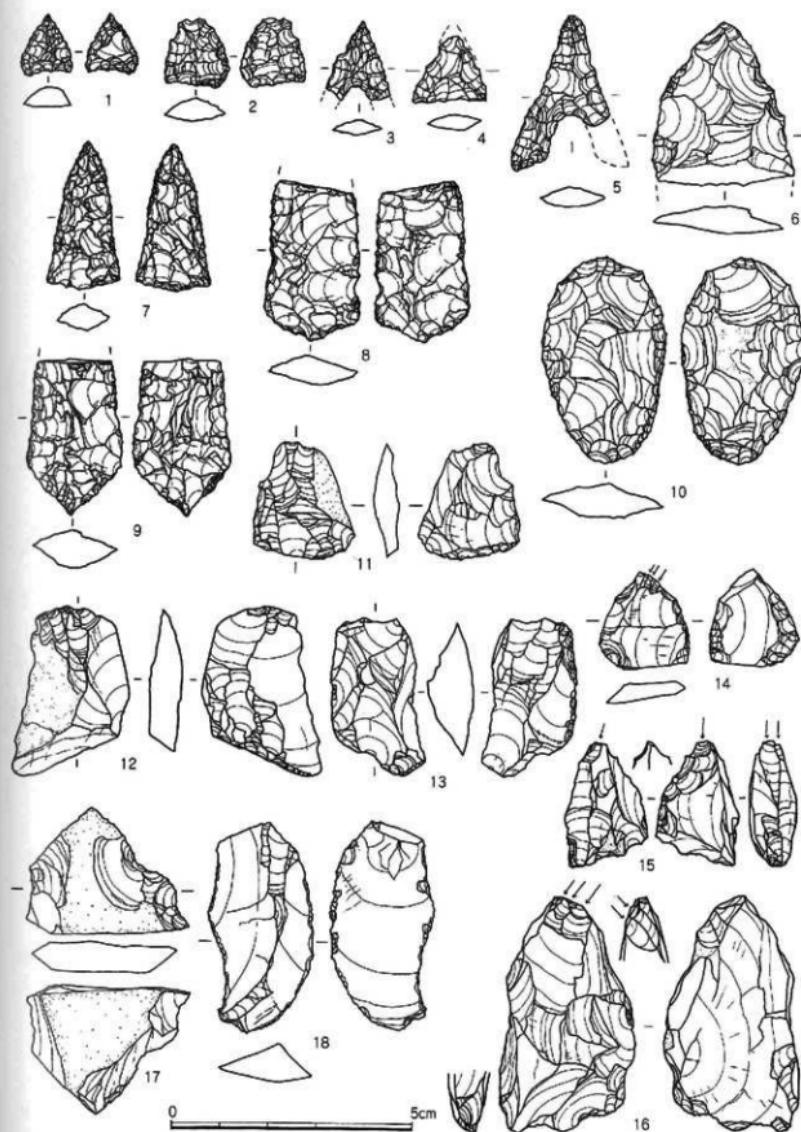
	チャート (赤)	チャート (黒)	チャート (赤色1) (赤色2)	チャート (白)	チャート (青)	チャート (白)	ホルン フェルス	貝殻	鍛造	サバ ナイフ	鉢化木	鍛造	鍛造	青銅石 (赤)	青銅石 (黒)	計(合計) (個数)
片刃鏃器														80	80	50139
両刃鏃器									1				33	33	34	91
剥片石器													22435	22435	22526	
敲石													1	24	25	
磨石													36	4465	4465	4522
凹石														11	11	12
圓石									74					3457	3457	3531
礁石														2	2	2
硯石														895	895	
櫛石														924	924	
石皿														3801	3801	
硯石・石皿														2	2	
台石														5500	5500	
石鏡	1	1	1	1	1	1								6560	6560	
有舌尖頭器	12	89	31	06										1	1	4
スクレイパー			53	61	25											138
形態様石器			1	1	1											3
クサビ形石器			45	8	42											139
鉢			1	1	2											5
2次加工剥片	1	1	1	4		8	1	1	5	1						27
使用痕剥片	15	17	14	302		173	33	96	120	9						23
石核	2	1	2	3	5	1	3	1	3	2						4
剥片	145	99	535	154	265	05	111	85						9	9	1987
チップ																2155
加工品																
計(合計)	9	3	17	23	44	7	57	8	12	12	2	1	1	167	1	2000
(割合)%	38.5	15	85.9	207.59	704	61.87	241.1	61.89	693.5	48.8	13.7	1.5	1.5	114698	2000	0.0911985734

チャート(灰色1:透明でない。鱗なし。)

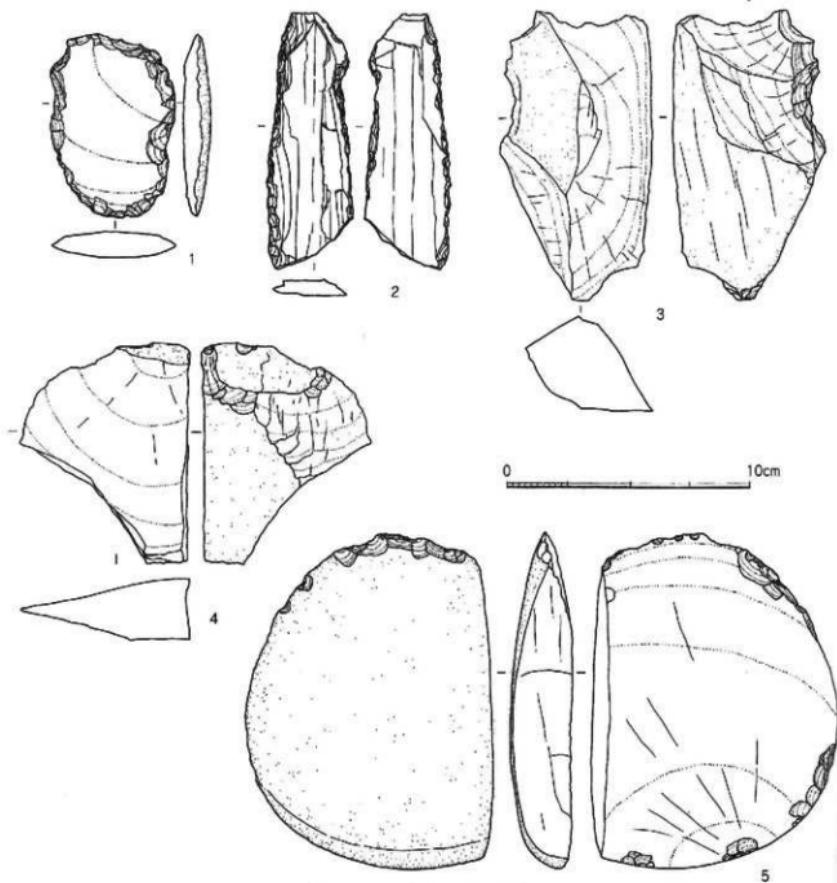
チャート(灰色2:やや透明のものが多い。鱗がある。)

ホルンフェルス・貝殻・錆泥片岩の原石は分布図で表示したが、この組成表では省いている。

第1表 神ノ原遺跡の石器組成



第23図 剥片石器実測図



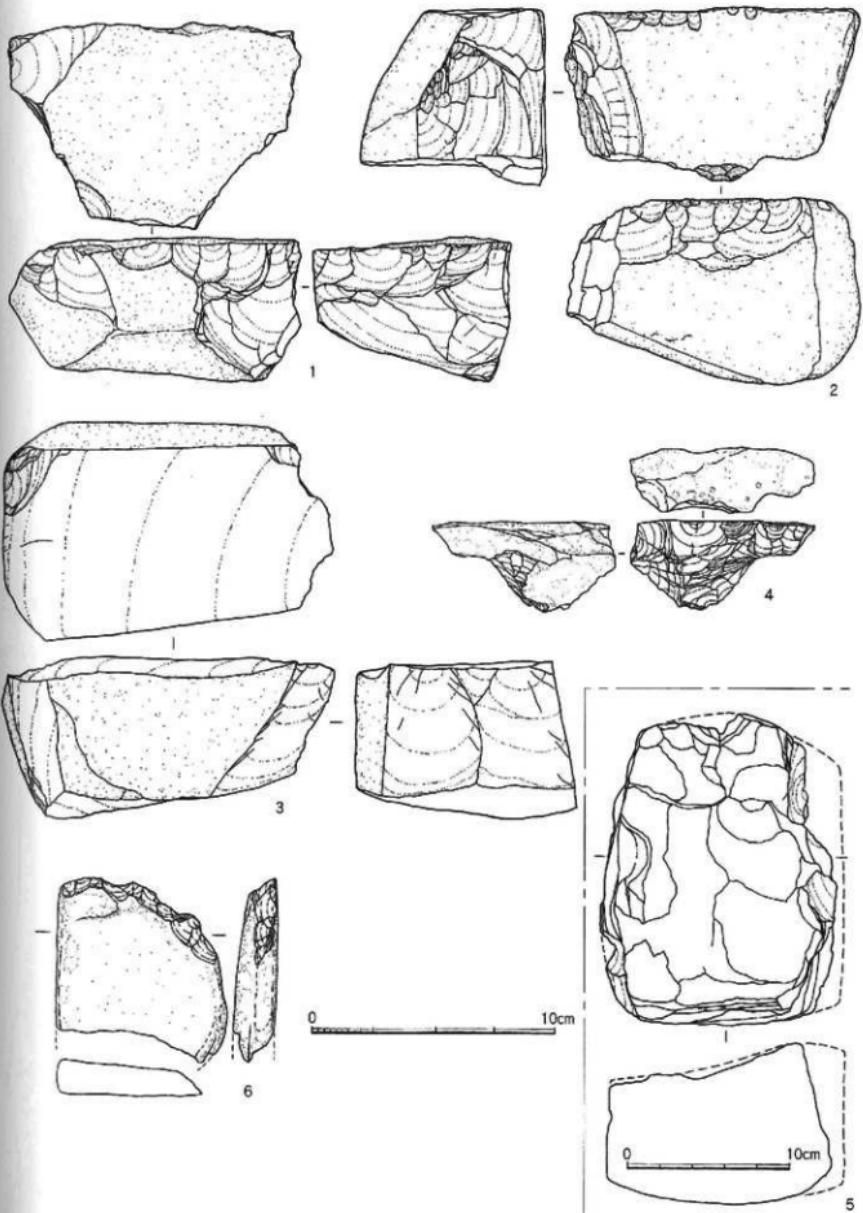
第24図 大型剥片石器実測図

11~13は両端の断面を鋭角に加工したクサビ形石器である。表裏のどちらかの端部から長い剥離を行っているのが特徴である。素はいずれも巾広の縦長剥片とみられる。14は小型の幅広剥片を素材とする両面加工の削器、略三角形の一角には片面に細かい連続剥離がみられる。17は板状の素材の二辺に加工を施したものであるが、辺はノッチが2ヶ所みられる。18は縦長剥片をそのまま削器としており両側辺に細かい使用痕が観察される。先端部にわずかの加工を有している。

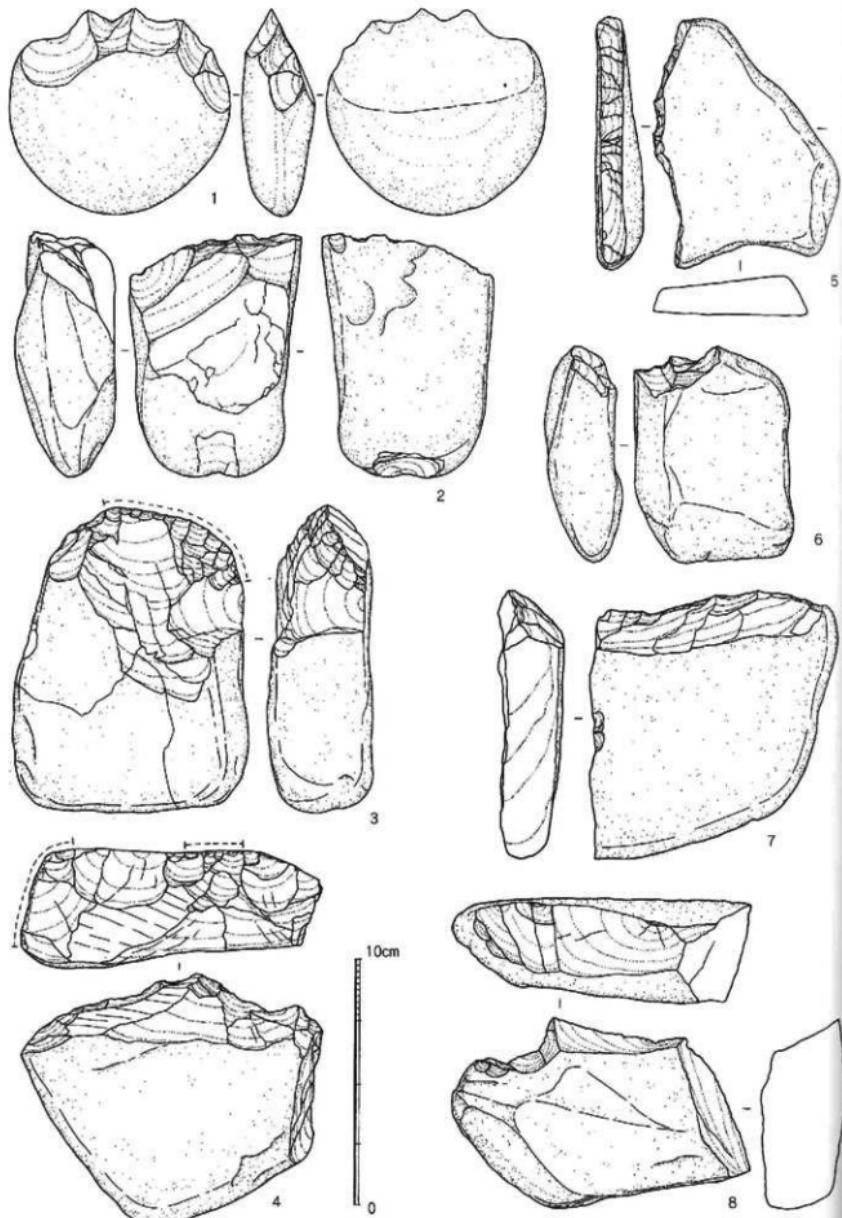
形器様石器(15・16)は、一部にフルーティング加工をもつ彫器に近い石器である。いずれもチャートの幅広剥片を素材としている。15は小型の両端にフルーティング加工をもつ。16はやや大型の横長の剥片を素材とし、両端部に斜め方向の長い剥離加工を施している。

②大型の剥片石器類(第24図)

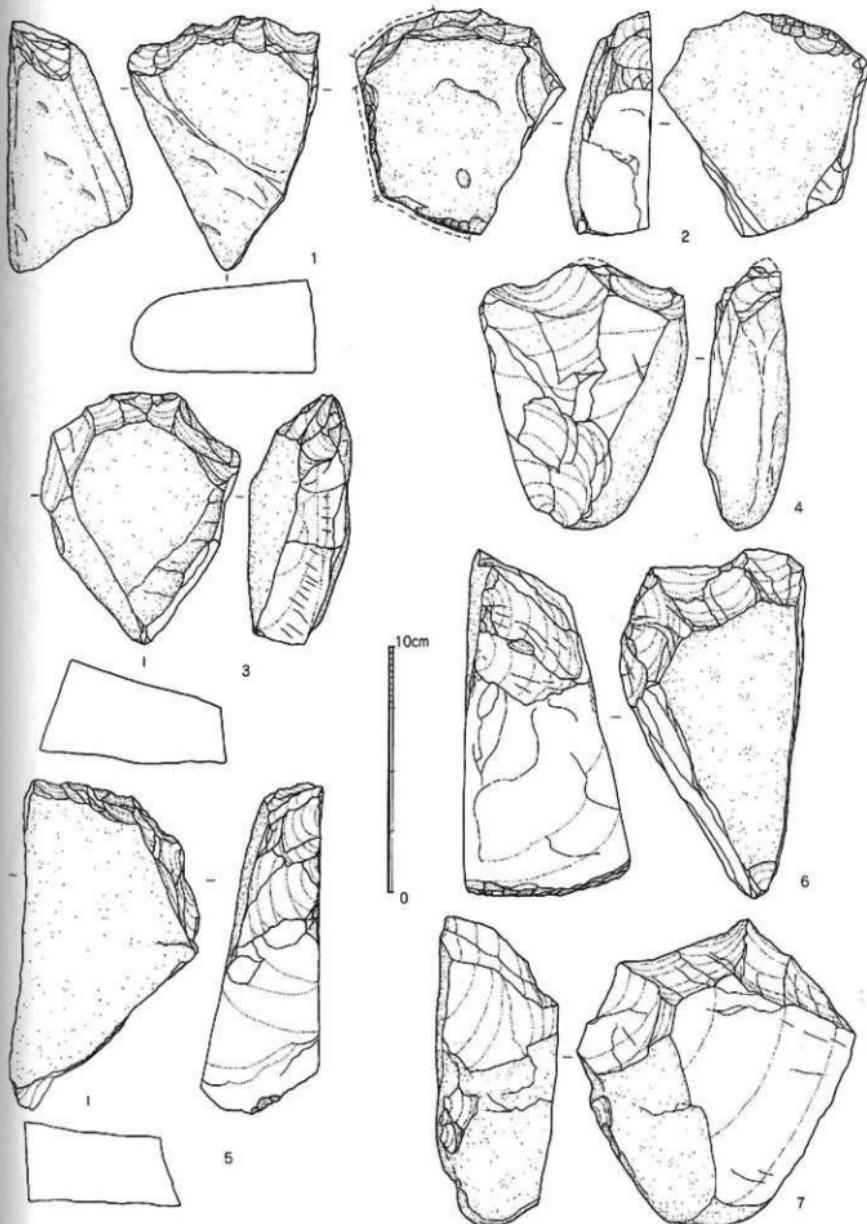
主として硬質の砂岩を石材とする剥片石器類である。1は背面に自然面を残す幅広剥片の全周に片面加工を施した削器である。2は石英質の結晶片岩の薄い剥片の両側の両面に細かい加工をした削器である。3は横長の剥片、打面部は自然面。4は同様に自然面を打面とする幅広剥片。背面にわずかの加工痕をもつ。5は、大きな円錐の最初の剥離によって得られた大型剥片を素材とする削器。末端部の主に片面に加工を施し



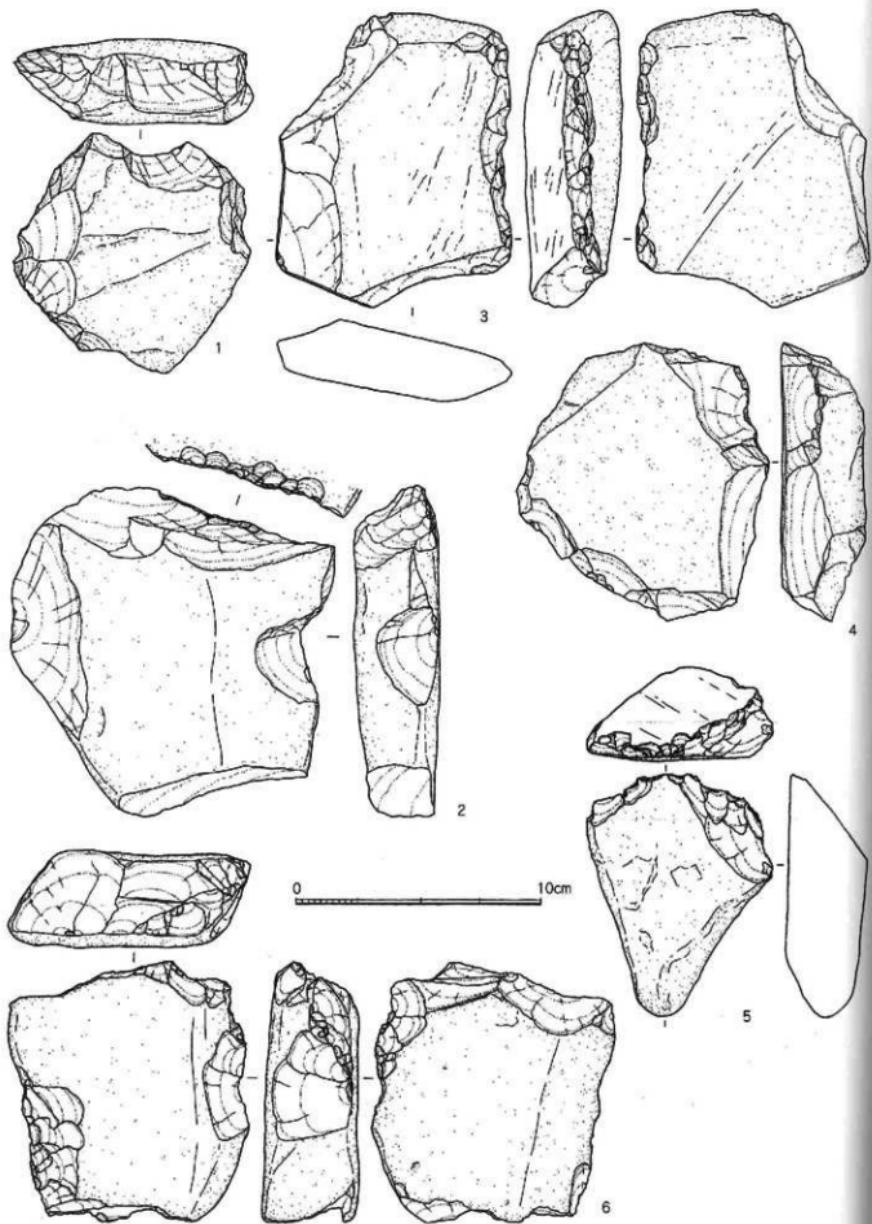
第25図 石核・砾器・凝灰岩加工品実測図



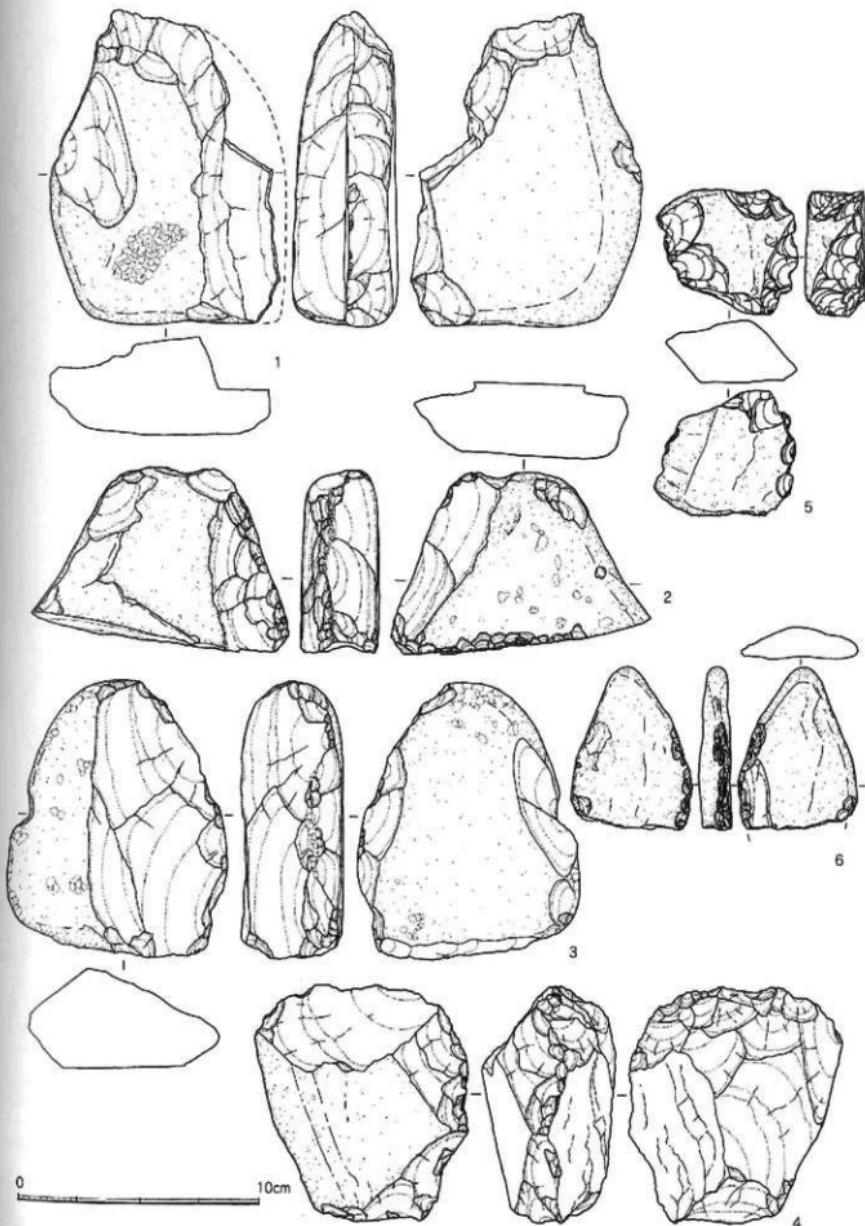
第26図 片刃砾器実測図



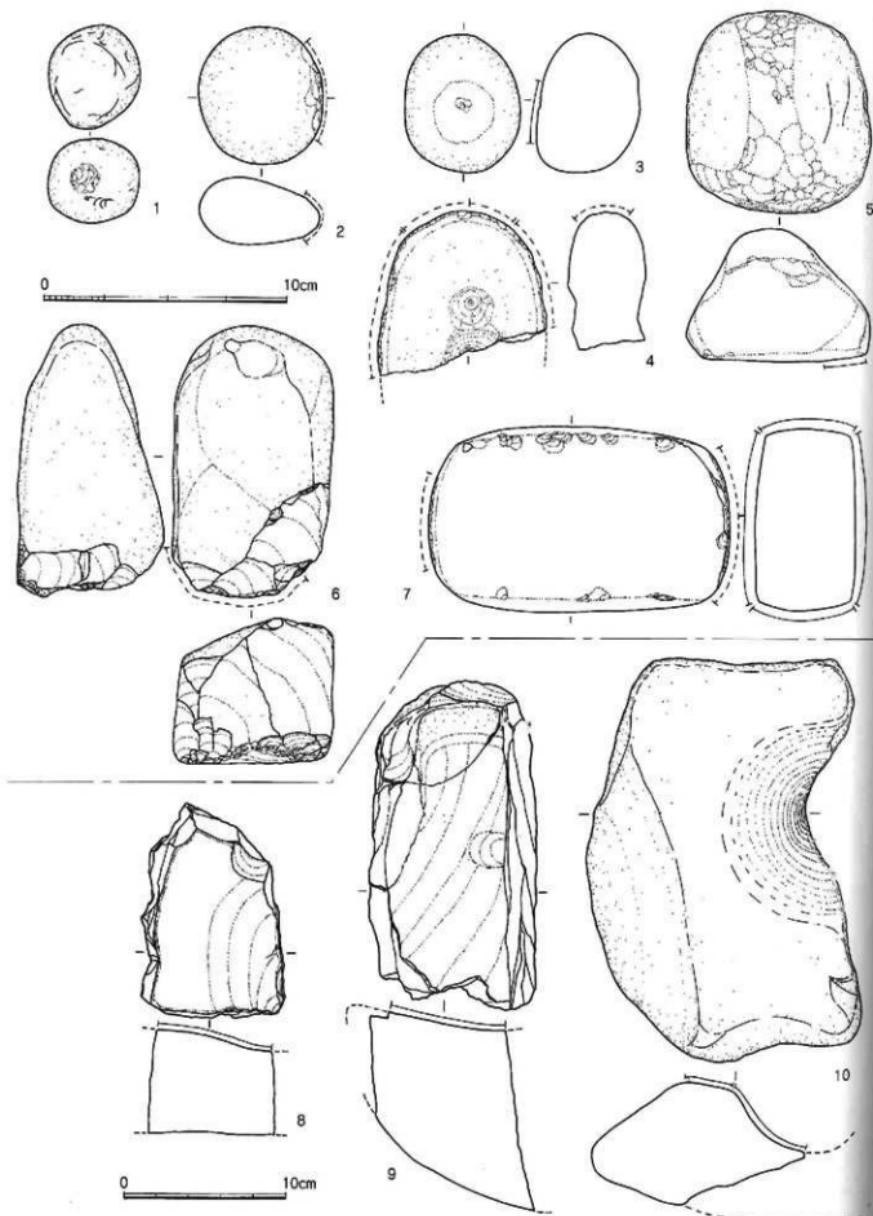
第27図 片刃器実測図



第28図 片刃器・両刃器実測図



第29図 両刃石器実測図



第30図 磨石・敲石・石皿・砥石実測図

て刃部としている。石材は硬質緻密な砂岩である。1・4はIV_a層、2・3・5はIV_b層出土。

③石核類（第25図1～4）

1～3は大型剥片の母材となった砂岩の石核である。いずれも大型の分厚い角礫を素材とするもので、1・2は平坦な自然面をそのまま打面としている。3は上面を大きな剥離によって平坦な打面とし、その一端から連続して剥片剥離を行っている。4はチャートの石核である。角礫の自然面を打面とし、三方向からの剥片剥離がみられる。主な打面となった平坦面にはいくつかの打痕が観察されるものである。小型の剥片石器の母材となったものである。

④礫器（第25図6・第26～29図）

砂岩の円礫・角礫・分割礫を素材とする片刃礫器・両刃礫器である。本遺跡の石器群の中で主要な器種であり、その形態もいくつか分類が可能である。これらはすべて硬質の砂岩の河川礫を利用している。

片刃礫器は、（第25図6・第26図・第27図・第28図1・4）である。第25図6・第26図1～8は円礫もしくは扁平礫の一端を打ち欠いた、いわゆるチョッパー類である。第26図1はその典型的なもので、刃部を鋸歯状にした鋭利なものである。第25図6と第26図5は扁平礫を利用したもので、重量も小さく、削器に近い機能とみられる。第26図2・3は略方形の分厚い礫の一端に鈍い刃を付けている。第26図4は山形の刃部を形成し、一端部は調整打によってカットしている。第26図7・8は扁平礫の一端を削って形を整えた後に刃部を形成している。第26図1・2・6はIV_a層出土、8はIV_b層出土。第27図1～3・5・6は分厚い亜角礫を2・3分割し、略三角形となった素材の短辺に片刃加工したもので、掌状形を呈している。刃部は概して外削しており、底面は平坦な自然となっている。2・6は刃部外の縁辺に刃溝し状の加工を施している。4・7はほぼ原礫のまま利用しているが、基部がすばまる点では共通している。7の刃部の加工は打点を残さない大きな剥離を形成しており、これは特殊な“面打ち”的な技法によるものかと思われる。1・2・5・6はIV_a層出土。第28図1・4は刃部が多辺に及ぶ片刃礫器で、1つの石器で複数の機能を有するとみられる。1は山形の鋭角部・ノッチ部・鈍い刃部をもつ。IV_b層出土。

両刃礫器は、（第28図2・3・5・6、第29図）で、ほぼ原礫をそのまま素材としている。

第28図2・6は略方形の扁平礫に複数の刃部を付けたものであり、いずれも一部にノッチをもつ。6はとくに一角を鉗交状の加工としている。5は逆三角形のやや小型、刃部は細かい両面加工となっている。3は略方形の一辺を両面加工としている。他辺の大きな剥離は整形のためとみられる。5・6はIV_a層出土。第29図1・3は円礫の長辺部を両面加工したもの。2も本来そうであったとみられるが欠損したもので、その新しい後に細かい刃溝し状の加工を施している。なお、1の片面には著しい敲打痕がみられる。4は大小の剥離による分厚い両刃礫器、加工は三辺に及ぶ。5・6は小型の両刃礫器。5は頁岩質の角礫を長辺を両刃、短辺を片刃としたものである。スクレイパーに近い形態である。6は扁平礫の一部に両面加工としたもの。1はIV_a層、2～4はIV_b層出土。

⑤磨石・敲石・槌石（第30図1～7）

1は、チャートの円礫の一端に敲打痕がみられる槌石（ハンマーストーン）である。球状のきわめて硬いもので、小型の剥片石器に用いられたものとみられる。第IV_a層出土。2・3は砂岩の円礫の一部に敲打痕をもつ敲石。5は断面三角形の敲打面をもつ磨石。底面の広い部分を磨面としている。4は敲打面をもつ凹石。一面に2つ、他面に1つのスリ鉢状の凹みをもつ。凹みは回転による磨滅である。6は礫器（両刃）状の刃部の刃に敲打痕をもつ槌石である。礫器製作用のハンマーストーンと考えられる。7は圓丸の直方体状となった磨石である。両面と両側面は磨耗度が著しい。両端面は敲打面となっている。全面よく使用された完形品である。近辺の遺跡では佐伯市門前遺跡で出土している。

⑥石皿頭（第30図8～10）

8は破損した石皿である。被熱によって周囲の大半が失われており、中心部に近い部分が残されている。磨面は片面であり、継ぎ凹面となっている。10は大型の扁平礫の中心部に深い凹面をもつ石皿。半分に欠けており、過度の回転による作業が行われたとみられる。石臼とも表現できるものである。9は、分厚い円礫を素材とする長短の断面がともに内溝しており、石皿とするより、砥石の可能性が高い。以上全て砂岩製である。

（消水）

第2表 土器銀環表(その1)

第三回 諸侯の謀議

第4表 土器觀察表（その3）

遺伝子の(黒)はN₁層、(暗茶)はN₂層に対応

第5表 土器銀漿表 (その4)

卷之三

第6表 石器調査表

回収場所	場所	出土層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石 材	種 類	回収番号	場 所	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備 考
第2381 石頭	4区含金層(4.99.)	1.4 1.0 0.45	0.5~0.7	ト	ト	ト	ト	第2685	外方腰掛	3区含金層(3.73.6)	11 7.7	1.9	171	砂岩	3.6	1.9	薄
第2382 石頭	3区含金層(5.605.)	1.5 1.0 0.5	0.5~0.7	ト	ト	ト	ト	第2686	外方腰掛	3区含金層(4.93.9)	8.8 6.3	2.9	217	砂岩	3.6	2.3	薄
第2383 石頭	3区含金層	1.3 1.4 0.35	0.7~0.9	ト	ト	ト	ト	第2687	外方腰掛	2区含金層(6.07.1)	10.9 10	2.4	427	砂岩	4.0	3.0	薄
第2384 石頭	3区含金層(4.7.6)	1.6 1.8 0.4	0.6~0.7	ト	ト	ト	ト	第2688	外方腰掛	3区含金層(3.66.8)	12 7.8	4.2	475	砂岩	3.6	7.8	薄
第2385 石頭	4区含金層(4.7.6)	3.3 2.2 0.5	1.9~2.1	ト	ト	ト	ト	第2714	外方腰掛	4区含金層(薄)	10.5 8	5.1	307	砂岩	4.0	1.5	薄
第2386 石頭	表層	3.4 3.1 0.7	0.8~1.0	ト	ト	ト	ト	第2712	外方腰掛	4区含金層(薄)	9.2 8.5	3.2	338	砂岩	3.6	8.5	薄
第2387 石頭	海生帶地層	2.1 1.65 0.6	0.6~0.8	ト	ト	ト	ト	第2713	外方腰掛	3区含金層(薄)	10.3 7.9	4.1	325	砂岩	3.6	7.9	薄
第2388 海生帶地層	3区含金層(4.1.5.9)	3.6 2.1 0.65	0.5~0.7	ト	ト	ト	ト	第2714	外方腰掛	3区含金層(1.4.9.1)	10.9 8.7	3.3	373	砂岩	3.6	8.7	薄
第2389 海生帶地層	3区含金層(3.9.2.7)	3.3 2.15 0.8	0.6~0.8	ト	ト	ト	ト	第2715	外方腰掛	4区含金層(薄)	13.5 9.1	4.7	516	砂岩	3.6	9.1	薄
第2390 2.2リバーベ	3区含金層(5.5.6)	4.5 2.7 0.8	0.9~1.0	ト	ト	ト	ト	第2716	外方腰掛	3区含金層(薄)	13.9 8.1	6.6	790	砂岩	3.6	8.1	薄
第2391 クリビヒ石頭	3区含金層(2.5.2.6)	2.5 2.3 0.8	0.4~0.7	ト	ト	ト	ト	第2717	外方腰掛	3区含金層(薄)	12.2 11.5	4.7	714	砂岩	3.6	11.5	薄
第2392 3.6.5.7.8.表層	3区含金層(4.7.7)	3.6 3.5 0.9	0.8~1.0	ト	ト	ト	ト	第2718	外方腰掛	4区含金層(薄)	9.7 9.3	3.8	386	砂岩	3.6	9.3	薄
第2393 3.7.8.9.表層	3区含金層(4.7.2)	3.4 2.0 0.9	0.6~0.8	ト	ト	ト	ト	第2719	外方腰掛	3区含金層(6.9.6)	13.4 13.8	3.4	784	砂岩	3.6	13.8	薄
第2394 2.2リバーベ	4区含金層	2.2 2 0.6	0.7~0.9	ト	ト	ト	ト	第2719	外方腰掛	2区含金層(薄)	12.2 9.6	4	504	砂岩	3.6	9.6	薄
第2395 1.5.6.7.8.表層	3区含金層(4.2.1)	2.6 1.9 1	0.5~0.7	ト	ト	ト	ト	第2720	外方腰掛	3区含金層(薄)	11.6 10.6	3.6	431	砂岩	3.6	10.6	薄
第2396 16.能作傍石地	3区含金層(2.9.5.1)	5.1 3.1 1.35	2.3~2.5	ト	ト	ト	ト	第2685	外方腰掛	3区含金層(薄)	9.9 7.7	3.7	246	砂岩	3.6	7.7	薄
第2397 12.クリビヒ石頭	3区含金層(4.7.2.2)	2.8 3.5 0.6	0.8~0.9	ト	ト	ト	ト	第2686	外方腰掛	3区含金層(薄)	10.5 9.6	3.5	592	砂岩	3.6	9.6	薄
第2398 13.クリビヒ石頭	3区含金層	2.2 2 0.6	0.7~0.9	ト	ト	ト	ト	第2687	外方腰掛	3区含金層(1.0.1.6)	13.1 9.4	4.2	625	砂岩	3.6	9.4	薄
第2399 1.4.5.6.7.8.表層	2区含金層(薄)	7.6 5 1.1	0.5~0.7	ト	ト	ト	ト	第2688	外方腰掛	4区含金層(薄)	9.5 9	3.2	313	砂岩	3.6	9	薄
第2400 2.神代石器	3区含金層(1.1.7.2)	10.5 3.5 0.6	0.6~0.8	ト	ト	ト	ト	第2689	外方腰掛	4区含金層(薄)	11.2 9.1	3.9	510	砂岩	3.6	9.1	薄
第2401 3.5.6.7.8.表層	4区含金層(4.9.2.2)	11.9 5.6 4	2.6~2.8	ト	ト	ト	ト	第2690	外方腰掛	3区含金層(薄)	9.5 6.8	4.9	498	砂岩	3.6	6.8	薄
第2402 4.7.8.9.表層	3区含金層(3.5.5.2)	8.8 7 2.6	1.47	ト	ト	ト	ト	第2691	外方腰掛	3区含金層(薄)	5.9 5.1	2.5	91	砂岩	3.6	5.1	薄
第2403 5.8.9.10.表層	4区含金層	6.5 5.8 0.8	0.3~0.5	ト	ト	ト	ト	第2692	外方腰掛	2区含金層(薄)	6.5 4.9	2.6	49	砂岩	3.6	4.9	薄
第2404 1.4.5.6.7.8.表層	2区含金層(薄)	7.6 5 1.1	0.5~0.7	ト	ト	ト	ト	第2693	外方腰掛	3区含金層(3.3.8.3)	5.3 4.9	2.7	115	砂岩	3.6	4.9	薄
第2405 2.神代石器	3区含金層(1.1.7.2)	10.5 3.5 0.6	0.6~0.8	ト	ト	ト	ト	第2694	外方腰掛	3区含金層(薄)	12.4 7.6	4.9	734	砂岩	3.6	7.6	薄
第2406 3.5.6.7.8.表層	4区含金層(4.9.2.2)	11.9 5.6 4	2.6~2.8	ト	ト	ト	ト	第2695	外方腰掛	3区含金層(薄)	6.9 6.8	3.8	208	砂岩	3.6	6.8	薄
第2407 4.7.8.9.表層	3区含金層(3.4.0)	13.7 9 2.5	0.46	ト	ト	ト	ト	第2696	外方腰掛	3区含金層(薄)	6.9 6.8	3.8	208	砂岩	3.6	6.8	薄
第2408 5.石頭	4区含金層(14.7.6.8)	12.2 8.2 6	0.770	ト	ト	ト	ト	第2697	外方腰掛	3区含金層(薄)	8.1 7.5	5.3	459	砂岩	3.6	7.5	薄
第2409 2.石頭	3区含金層(3.6.6.5)	11.7 7.5 6.9	0.840	ト	ト	ト	ト	第2698	外方腰掛	3区含金層(4.6.9.0)	11 7	6	612	砂岩	3.6	7.6	薄
第2410 3.石頭	3区含金層(1.1.5.5)	13.7 8.9 6.3	1.210	ト	ト	ト	ト	第2699	外方腰掛	3区含金層(薄)	12.4 7.6	4.9	734	砂岩	3.6	7.6	薄
第2411 4.石頭	3区含金層(3.4.9.0)	7.8 3.9 2.7	0.50	ト	ト	ト	ト	第2700	外方腰掛	3区含金層(薄)	6.9 6.8	3.8	208	砂岩	3.6	6.8	薄
第2412 5.石頭	4区含金層(14.9.3.7)	19 14.8 9.8	0.200	ト	ト	ト	ト	第2701	外方腰掛	3区含金層(1.3.6.9)	8.1 7.5	5.3	459	砂岩	3.6	7.5	薄
第2413 6.石頭	2区含金層(6.1.8.7)	7.1 7.3 1.15	0.50	ト	ト	ト	ト	第2702	外方腰掛	3区含金層(4.4.7.0)	12.4 7.6	4.9	734	砂岩	3.6	7.6	薄
第2414 7.石頭	3区含金層(3.0.7.3)	9.2 8 3.1	0.264	ト	ト	ト	ト	第2703	外方腰掛	3区含金層(薄)	12.8 6.8	4.9	600	砂岩	3.6	6.8	薄
第2415 8.石頭	3区含金層(1.1.1.9)	10 6.9 4.1	0.425	ト	ト	ト	ト	第2704	外方腰掛	3区含金層(薄)	21.1 16.4	9.1	3540	砂岩	3.6	16.4	薄
第2416 9.石頭	4区含金層(3.5.7.6)	12.5 9.6 4.3	0.764	ト	ト	ト	ト	第2705	外方腰掛	3区含金層(薄)	24.3 17.2	10	4420	砂岩	3.6	17.2	薄

2. 繩文時代前期～晚期の遺構と遺物（第31・32図）

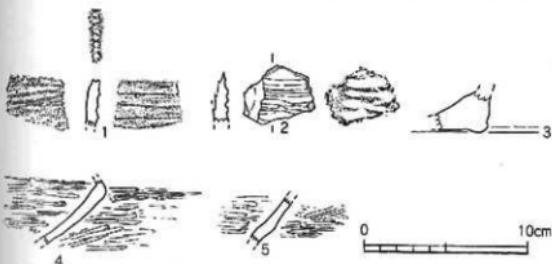
第31図1は、前期の縄式土器片である。小片であるが、B式か。口縁端部に貝殻痕による刺突、外側にヨコナデによる横位の数条の隆起が確認できる。内面は貝殻による条痕である。4区3号土坑より出土した（第32図）。2は外側に強いナデによる横位の凹凸がみられる。3は平底である。当初は弥生土器と考えたが、後述する弥生土器の胎土よりも繩文土器の胎土に似ること。5・6で後晚期の土器も出土していることも加味して、繩文後期の土器と判断した。5・6は、後晚期の浅鉢の破片である。調整は内外面がヨコヘラミガキである。

3. 弥生時代の遺物（第33図）

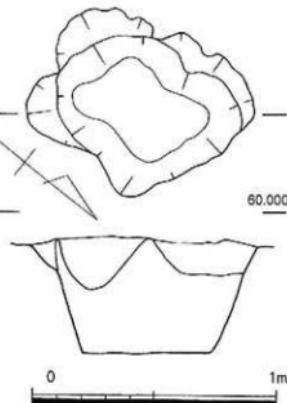
遺構検出時や柱穴内より若干の弥生土器が出土した。これらの柱穴の帰属はほとんどが中世以降であり、弥生の包含層はすでに削平をうけているものと判断した。よってこれらは遺構には伴なわない。

1は、4区4号柱穴から出土した口縁片である。口縁は方形で、外面口縁部直下に突起をめぐらす。前期末の費の破片であろうか。調整はヨコナデおよびナデである。口縁端部に黒斑がみられる。2は、3区7号柱穴から出土した甕の口縁片である。口縁は外反し、口唇部内面側はやや上方に突出する。調整はヨコナデおよびナデである。外面に煤の付着がみられる。3は、鉢の口縁へ胴部であろうか。類例を知らない。ゆるやかに外側にひろがる胴部に、外反する肩状の口縁がつく。調整は、内外面とも、口縁部がヨコナデ、胴部がミガキである。4は、4区から出土した甕の口縁へ胴部である。口縁部は外反し、口縁端部は丸い。口径よりも胴部径の方が大きくなると思われる。調整は、外面が口縁部ヨコナデ、胴部タテナデである。内面は口縁部がヨコナデ、胴部がケズリのちナデである。また、外面には黒色顔料が塗布されているようである。5は、壺の胴部下位である。4と同様の場所で出土した。よって調査中は4と同一固体と考えたが、以下に述べる調整の違いから別固体と判断した。調整は外面がナデ・ミガキで、ミガキは単位の幅が1cm弱の幅広いものもある。内面もミガキで上位がタテ方向、下位がヨコ方向である。また、外面に黒斑らしきものがみられる。6は、4区B号柱穴から出土した壺の底部で、平底である。同柱穴からは、青磁（第42図13）が出土している。調整は、外面が胴部はおろか底面にまでタタキを行った後、同様の箇所にミガキを施す。内面は剥落のため不明である。7は、1区3号柱穴から出土した高环の脚部である。調整は、外面がタテヘラミガキで、環との接合部付近はヨコナデである。内面は、しぶり痕が確認できる。また、外面には赤色顔料を塗布している。

これらの土器の色調は主に黄褐色系統である。胎土は繩文土器同様、石英・白色粒子・赤色粒子を含むほか、7は角閃石を含む。そのほか注



第31図 縄文土器（前期以降）



第32図 4区2号土坑

目すべきことは、これらの胎土には5mm前後の粒を多く含むことである。よって、一見すると当遺跡の弥生土器は縄文土器より胎土が粗悪な印象をうける。これは何も当遺跡のみではなく、旧直川村内で表採された弥生土器に關しても言えることである。

時期に關しては、1が前期末の可能性があるほかは、後期の後半の所産と考える。

4. 中世前期の遺物（第42図7・10・12）

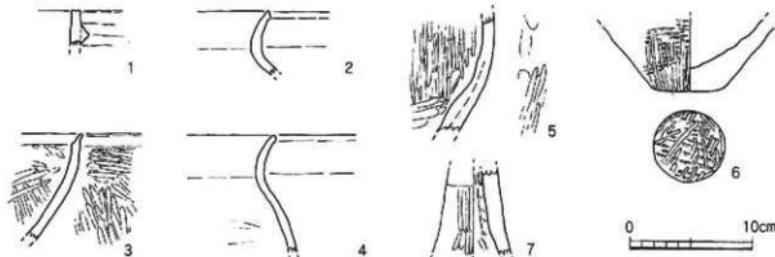
若干、中世前期の遺物も出土している。これらはすべて遺構に伴うものではない。7・10・12の3点とも中國龍泉窯系の青磁である。7は碗である。口縁部～体部にかけての破片である。口縁部は端反りである。残存器高は5.2cmである。胎土は灰色で、0.5mm前後の白色粒子を含む。釉調はうぐいす色である。4区出土である。10も碗である。体部の破片で、外面に鶴連弁がみられる。残存器高は4.2cmである。胎土は精良であるが、薄い黄色である。焼成不良であろうか。還元しきれていない。釉調は暗いうぐいす色である。1区南東端の道路遺構下位の整地土より出土した。12は底部片である。皿の破片であろうか。残存器高は1.2cmである。胎土は灰色で、0.5mm前後の白色粒子を含む。精良である。釉調はうぐいす色である。釉は墨付にも施されている。4区東端部の後世の整地土より出土した。

5. 中世後期以降の遺構と遺物

3区1号墓（第34図）：3区南西端で検出した。北方2.2mほどで2号墓が頭位を変え、隣接する。平面形が梢円形で、南北に主軸を向ける土壙墓である。長軸0.75m、短軸0.6m強、残存する深さ0.1m程の墓壙である。墓壙のほぼ中心で白磁碗が出土した。北側からは頭骨片が、白磁の下位からは下肢骨の一部が出土した。埋葬状態の詳細な検討は第5章の田中良之・石川健岡氏の論考を参照されたい。

出土した白磁碗は、李氏朝鮮系白磁と思われるものである。口径15.6cm・底径5.8cm・署高7.4cmである。釉調はやや青白い。全面に施釉した後、墨付の釉を搔き取っている。また墨付には7ヶ所の胎土目痕が確認できる。外両口縁部直下には軌着痕が確認できる。雰囲気をうける点もある。高台外面には回転ヘラケズリ時に生じた削り残しの窪みがみられるし、見込みにみられるひび割れは、外面にまで達するもので、本来の用をなさないものである。生産時期は16世紀後半～末と考えられる。

3区2号墓（第35図）：3区南西側で検出した。南方2.2mほどで1号墓が頭位を変え、隣接する。他の遺構（主に柱穴）との切り合いで輪郭が不明瞭な箇所が存在するものの、平面形が梢円形で、東西に主軸を向け



第33図 弥生土器実測図

る土壙墓であると考えられる。長軸0.7m、短軸0.6m、残存する深さ0.12m程の墓壙である。墓壙内の北側から歯が出土した。それ以外のものは出土していない。

造墓時期は3区1号墓に隣接することから、時期に関しても近接するものと考える。

3区9号墓（第36図）：2区と3区を区切る畔に造構の約半分が隠れる形で3区において当初約半分を検出した。南方1.8mには3区10号墓が隣接する。墓壙内北側から歯、南側からは「寛永通宝」2点が出土した。よって大きな期待を寄せ、畔にかかるもう半分を検出出したが、出土遺物は上述のものだけであった。青銅色の土も2点の寛永通宝が出土した箇所でしか確認できなかった。最終的な平面形は梢円形で、南北に主軸を向ける土壙墓であった。長軸1.25m、短軸0.9m弱、残存する深さ0.45m程の墓壙である。床面では地山であるロームに含まれる拳より大きめの石が3cm程露出しており、その付近や上位からは歯が出土している。よって意図的か、偶発的かは判断できないが、この石が枕的な役割を担っていたものとも考えられる。

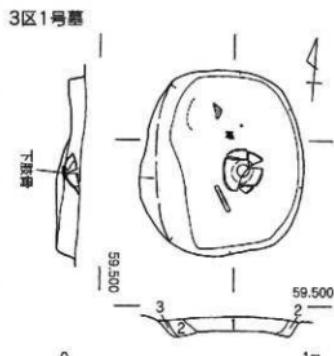
出土した寛永通宝2点に関して説明する。1・2とも字体の特徴から、いわゆる古寛永（1636～1659年铸造）である。1は検出時に一部欠損した。劣化が著しい。色調は青銅色である。裏面左側に铸造時に生じたと考えられる「一」の字状の凸が確認できる。2は残存状態良好である。色調は淡い黒色である。

3区10号墓（第37図上）：2区と3区を区切る畔付近に位置する。北方1.8mには3区9号墓が隣接する。当初は3区東壁面の土層において確認した。2区と3区を区切る畔に造構の2/3が隠れ、3区において一部が除く程度であったため、断ち割りを行い、造構か否か土層（第4図A）で確認を行った。するときわめて土壙墓の可能性が高いと判断できたため、畔の部分を拡張し、造構検出に努めた。残存状況からは平面形が梢円に想定できるものであった。さらにその造構内を掘り進めると中央北寄りで灰色の土の塊を検出した。さらにその灰色の土塊をとり除くと、その下から歯が出土した。よって、灰色の土塊は頭骨が土化する寸前と解釈できたため、墓と認定した。

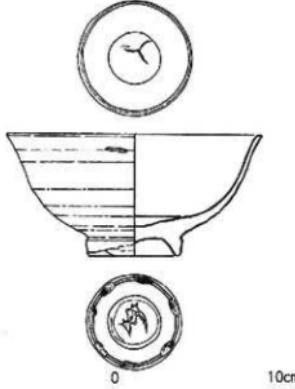
平面形は前述のように梢円形で、主軸は南北に向いていたと考えられる。長軸1.1m強、短軸0.55m+α、残存する深さ0.4m程の墓壙である。出土遺物は頭骨の痕跡以外出土していない。

造墓時期は3区9号墓に隣接することから、時期に関しても近接するものと考える。

なお、造構平面検出時に検出面で自然石がたった状態で確認でき、墓の墓標の可能性も考えたが、以下の点から墓石とは確定しなかった。土屑で確認すると墓壙埋土とその石との間に灰色土が確認でき、極めてこの石が現代に置かれたものと判断できた。ちょうど墓が検出された場所は2



1. 黒 色 層：中や暗色を帯びて2層に分かれ、1層は褐色などよりカスカスとしたアーチカルな層で、2層は黒褐色のアーチカルな層で、全体としてやや重ねた感じになり。（通風土）
2. 黑 色 層：やや茶色を帯びる、1層よりやや明るい、0.2～2cmのアーチカルな層で、全体としてやや重ねた感じになり。（通風土）
3. 黒 色 層：2mm以上のカスカスした層をはらに含む。（アーチカル層）



第34図 3区1号墓および出土遺物（上）

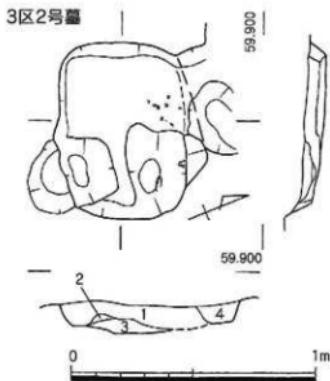
区と3区の田園を区切る畔になっており、この畔の形成によって置かれた石と判断した。

3区5号土坑（第37図下）：3区の中央や北寄りに位置する。径1.1m弱のほぼ円形を呈す土坑である。南側を後世の柱穴によって切られている。土坑内からは、炭や0.1m以下の大白色骨片状の塊が出土した。よって調査中は墓の可能性も考えた。また人頭大以下の鍬が5点出土した。鍬の中には被熱したものもみられた。そのほか陶器も出土した。

白色の骨片状のものは、取り上げ後、九州大学田中研究室に鑑定をお願いしたところ、骨ではないことが判明した。

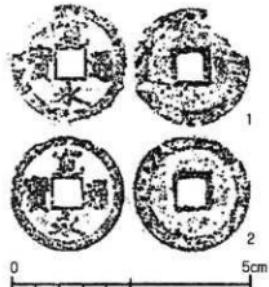
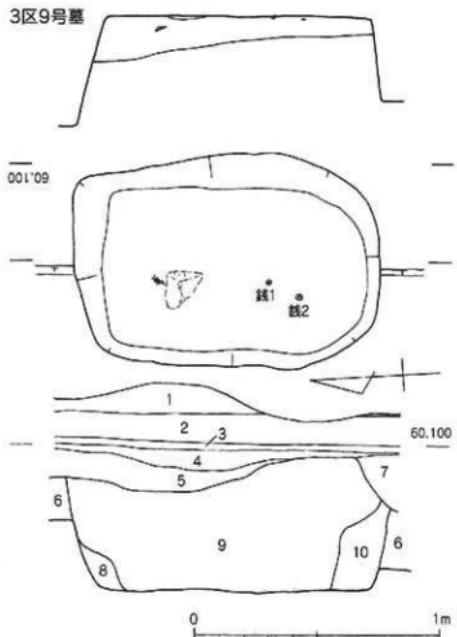
被熱した鍬に関しては、縄文早期の層から出土した鍬と接合した。よって被熱した鍬自身の被熱した時期は縄文時代早期であると考えられる。

1は、中国産白磁の瓶の破片と思われるが、詳細は不明である。施釉は、外面において、費付を除くほか箇所にみられる。



1. 黄色層：やや茶色を帯びる。アカホヤの粒子を含む。バツバツ、継ぎありなし。(道場土)
2. 黄茶褐色層：アカホヤブロックを含む。バツバツ、継ぎありなし。
3. 黄茶褐色層：5cm以上のアカホヤブロックを含む。バツバツ、継ぎありなし。(道場土)
4. 黒色層：バツバツ、継ぎありなし。(柱穴埋土、別施塗)

第35図 3区2号墓



1. 黄茶褐色層+地層：色：(底土)
2. 黄茶褐色層：粘質、細粒あり。(田の底土)
3. 黄茶褐色層：粘質、細粒あり。(田の底土)
4. 黄茶褐色層：3層のトドやセ通路が多い部分がしみる層。やや粘質、継ぎありあり。
5. 細黄色層：やや茶色。5cmのものの中には1cm以下のアカホヤブロック、4cm以下のアカホヤブロックが混じる。
6. 黑色層：基本的には只黒土。人頭大～春大の骨を含む。やや粘質、継ぎあっていて。(近古土壤)
7. 黑色層：やや茶色を帯びる。5cmの大の地山土。細粒、細砂質、細粒、細砂質、細粒あり。(近古土壤)
8. 黄褐色層：3cmの大の黄褐色の地山ブロックが混じる。粘質、細粒あり。(3区9号土壁土)
9. 黑色層：3cm以上のアカホヤ、2cm以下の地山ブロックが多く混じる。粘質、細粒、細砂質あり。(3区9号土壁土)
10. 黄褐色層：基本的には15層と同じ、やや細かい黄褐色の地山が主体的。(3区9号土壁土)

第36図 3区9号墓および出土鏡

3区4号土坑（第38図上）：3区の北側中央に位置する。深0.9m強の丸い円形を呈す土坑である。西側では柱穴に切られ、東側では柱穴を切っている。遺構の下場は、床面付近で浅い溝状に窪む。よって現状では浅い凹みが床溝状に巡る。西端で陶器2点が出土した。

1は信楽系陶器の小碗もしくは小环で、18世紀後半～19世紀前半の所産である。胎土は白色で精良である。色調はやや黄味帯びた白色である。2は唐津系陶器の碗で、17世紀前半の所産である。胎土は灰色で精良である。色調は暗緑色である。

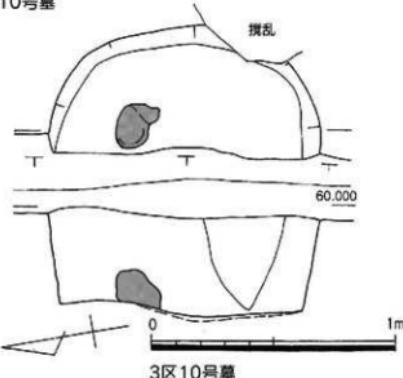
3区8号土坑（第38図下）：2区と3区を区切る畔付近に位置する。南方1.2mには3区9号墓が隣接する。長軸1.8m、短軸1m強の不定形の土坑である。床面付近で地山の層が、ローム層からローム層（人頭大の礫を含む）に変化するため、床面には礫が露出する。東壁面では繩文土器が出土した。当然この土器は遺構に伴なうものではない。

1は、無文土器で本遺跡縄文早期の上器中最も器壁が薄い。器形は外傾する。口縁端部は丸く、口唇部内側がやや突出する。調整は内外面ナデである。

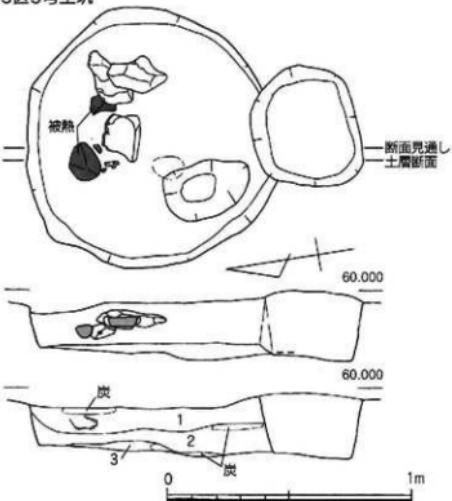
1区性格不明遺構（第39図）：1区の東端に位置する。北側は調査区の北壁に接し、上場は調査区外のため検出できなかった。南北10.5m+α、東西10m強のやや方形を呈す。東側の上場付近では石敷が確認できた。性格は不明な遺構である。遺構の埋土はほぼ分層できるような状態ではなく、掘削した後、時を置かずまた埋め戻したようである。

出土遺物は、縄文上器、景德鎮や漳州窯の碗、土器の壺・皿、備前窯の破片がそれぞれ1点もしくは2点出土している。以上のことから遺構の時期としては16世紀が妥当であると考える。なお、本遺構に伴なうと考えられる遺物（第42図2・5・19・20）の詳細は後述する。

3区10号墓



3区5号土坑



1. 稲葉 楠色 壺: 12cm以下の地山ブロック、3.5cm以下のアカホヤブロック、および1cm以下の炭を含む。(サバ)である。跡はついていた。調査した場合は土壌層の内部に存在する。(?)

2. 稲葉 楠色 壺: 2.5cm以下の地山ブロック、2.5cm以下のアカホヤブロック、および0.5cm以下を含む。(サバ)である。

3. 黒 黄 楠色 壺: アカホヤ・地山・焼けたなる。やや粘質、油まりあり。

壺の深さは 1壺 > 3壺 > 2壺

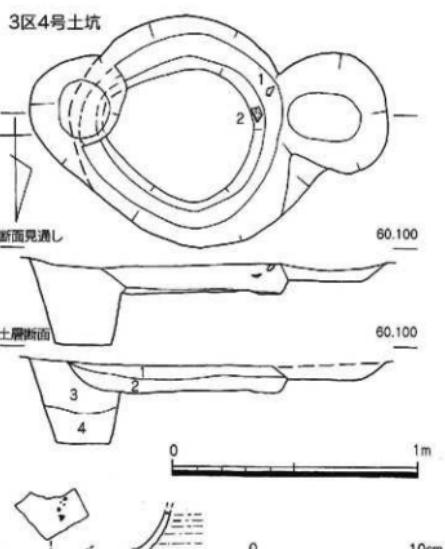


第37図 3区10号墓（上）と3区5号土坑および出土遺物（下）

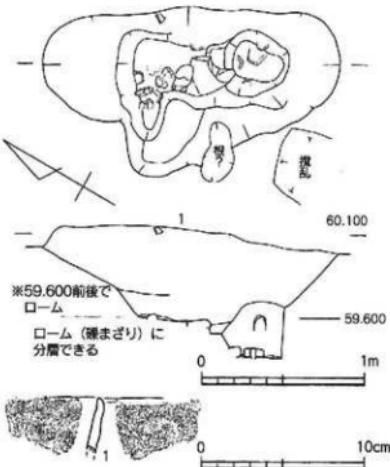
3区11号掘立柱建物（第40図）：3区北東端付近に位置する。柱穴の東側は、調査区外もしくは2・3区間の畔下に、また視点をかえれば調査区の端部に位置することから、土層確認のためのサブトレンチを最初に掘削したため、柱穴を一部掘削することになり、残存する柱穴1／2程を土層（第4図）で確認している。現状3間×2間の規模である。長軸の並びは柱穴が2.1m程の間に4つ並ぶ。短軸は4.2m間に2つである。よってその間が東柱であったと考えられる。これらの柱穴の径は0.3mの後半～0.5m程度である。南東端の柱穴の埋土から肥前陶器の溝縁皿（第43図8）および土鐘（第44図）が出土している。

3区12号掘立柱建物（第40図）：3区のほぼ中央に位置する。北側では馬堀界遺構が、北東端では3区13号掘立柱建物が隣接する。南端の柱穴はやや位置がずれる。3間×2間の規模である。長軸の並びは柱穴が2.3m程の間に4つ並ぶ。短軸は4.55m前後間に2つある。よってその間が東柱であったと考えられる。これらの柱穴の径は0.4m前後である。

3区13号掘立柱建物（第40図）：3区の中央や北東よりに位置する。南西端では、馬堀界遺構、3区12号掘立柱建物が隣接する。中央部には試掘トレンチが東西に走り、東側の長軸沿いの柱穴1つはそのトレンチにかかっている。3間×2間の規模である。長軸の並びは柱穴が2mもしくは2m弱の間に4つ並ぶ。短軸は4m程の間に2つである。よってその間が東柱であったと考えられる。これらの柱穴の径は0.33m～0.45mである。また柱穴の中には、柱廻もしくはそれに関連すると思われる土層があったので一部を図示した（第40図土層A～D）。これらのほか東側の長軸北から2番目、西側の長軸南端の柱穴でそれぞれ柱廻の一部を確認している。なお、柱廻の規模は土層B・Cをみると



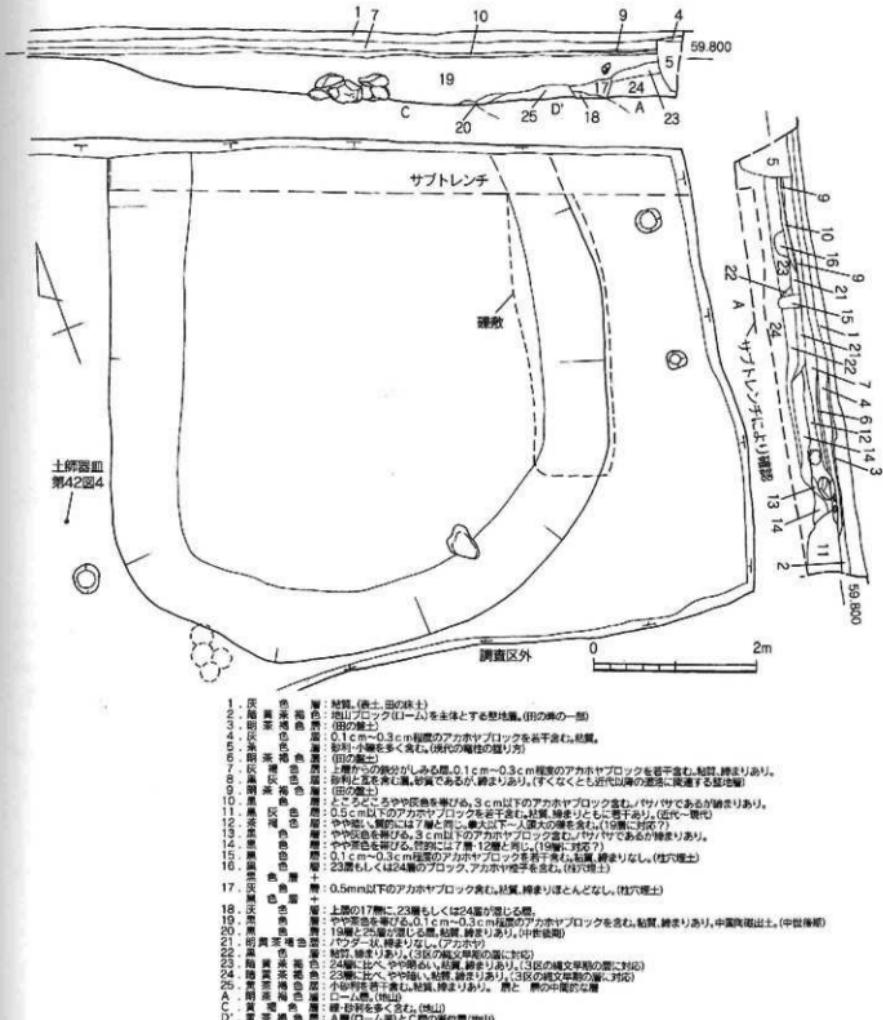
1. 灰 黒 深 白 層：1mm程度のアカホヤブロックを若干含む粘土。
2. 灰 黒 深 白 層：1mmより細い1mm～5mm程度のアカホヤブロックを多く含む粘土。
3. 黑 暗 色 層：1mm～3mm程度のアカホヤブロックを若干含む。
4. 黑 暗 色 層：アカホヤブロックを多く含む黒く固まっている。



第38図 3区4号土坑および出土遺物（上）と
3区8号土坑および出土遺物（下）

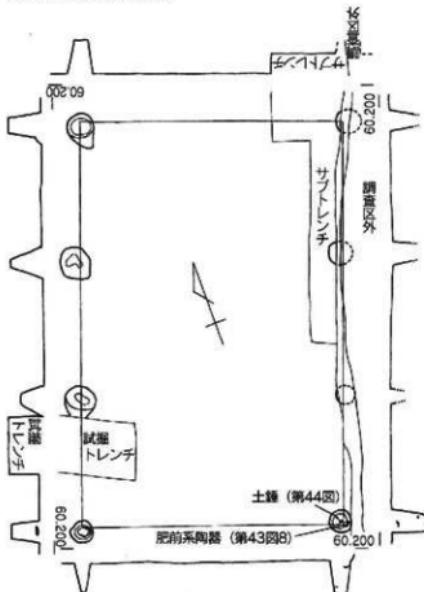
柱痕の径は柱穴の径の1/3もしくは1/3強で、径0.15m程を想定できる。

1区4号掘立柱建物（第41図）：1区の中央、北壁に隣接する。現状2間×1間の規模である。建物の北側は調査区外のため、建物の詳細は不明である。現状長軸の並びは柱穴間が2.5m程の間隔である。現状横軸も柱穴間は2.5m程の間隔である。3区と違い、東柱を現状は持たない。これらの柱穴の径は0.3m～0.5mである。

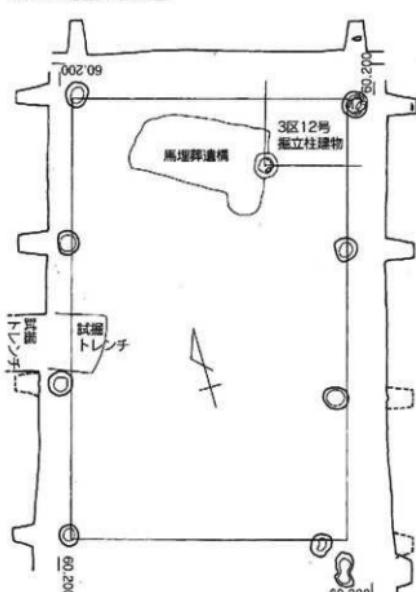


第39図 1区性格不明遺構

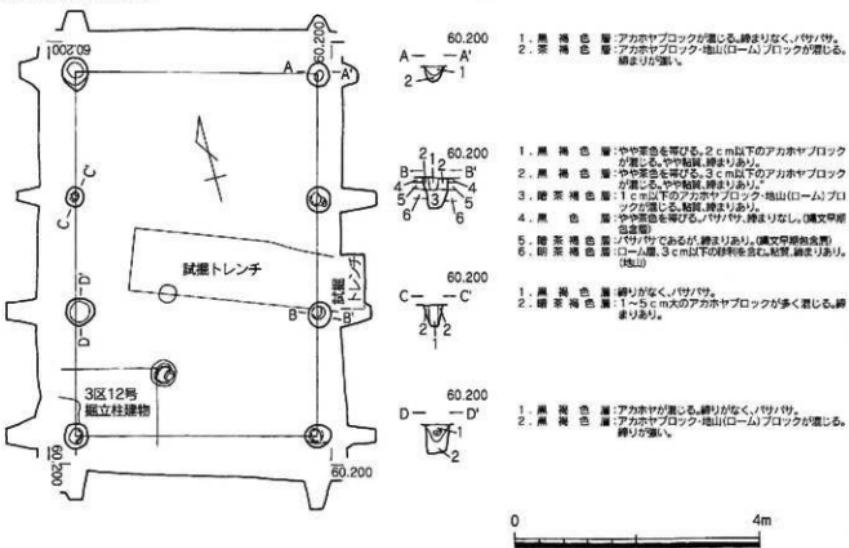
3区11号掘立柱建物



3区12号掘立柱建物

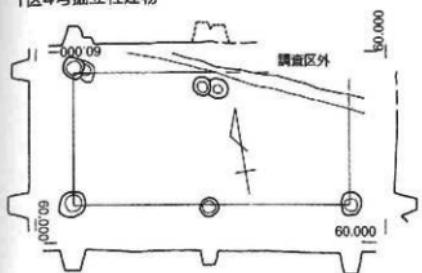


3区13号掘立柱建物

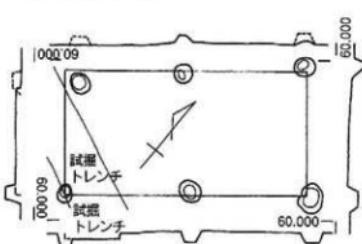


第40図 3区掘立柱建物

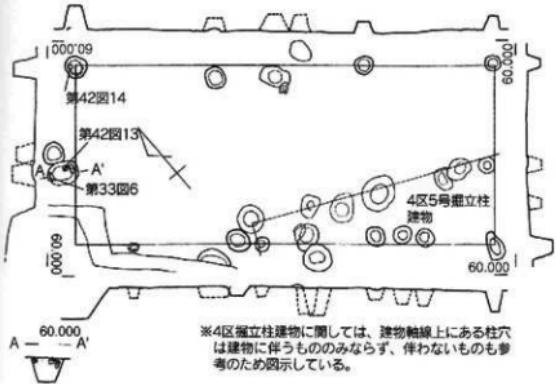
1区4号掘立柱建物



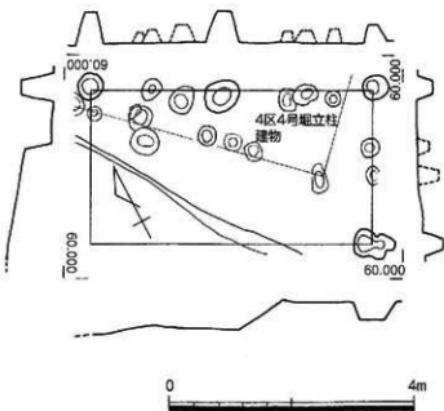
1区5号掘立柱建物



4区4号掘立柱建物



4区5号掘立柱建物



第41図 1区および4区掘立柱建物

1区5号掘立柱建物（第41図）：1区の中央、南西側に位置する。南側では試掘トレーンチが東西にはしる。2間×1間の規模である。長軸の並びは柱穴間が2.0m程の間隔である。横軸も柱穴間は2.0m強の間隔である。1区4号掘立柱建物同様、3区と違い、東柱を現状は持たない。これらの柱穴の径は0.3m～0.5mである。

4区4号掘立柱建物（第41図）：4区の南東側に位置する。南東側では4区5号掘立柱建物が隣接する。南方は大きく削平を受けており、建物の南側長軸の西端柱穴は削平のためか見当たらない。現状では3間×1間（もしくは2間）の規模である。長軸の並びは柱穴間が2.0～2.3m程の間隔である。横軸の柱穴間は3.0m強の間隔である。なお、その間にも柱穴がみられるため、それらが伴なうものとすれば、柱間は1.5mとなり、2間である。これらの柱穴の径は0.3m～0.5mである。西側の2ヶ所の柱穴埋土からは青磁の皿がそれぞれ出土しており（遺物実測図は第42図13・14）、この建物の時期を確定するものの可能性がある。

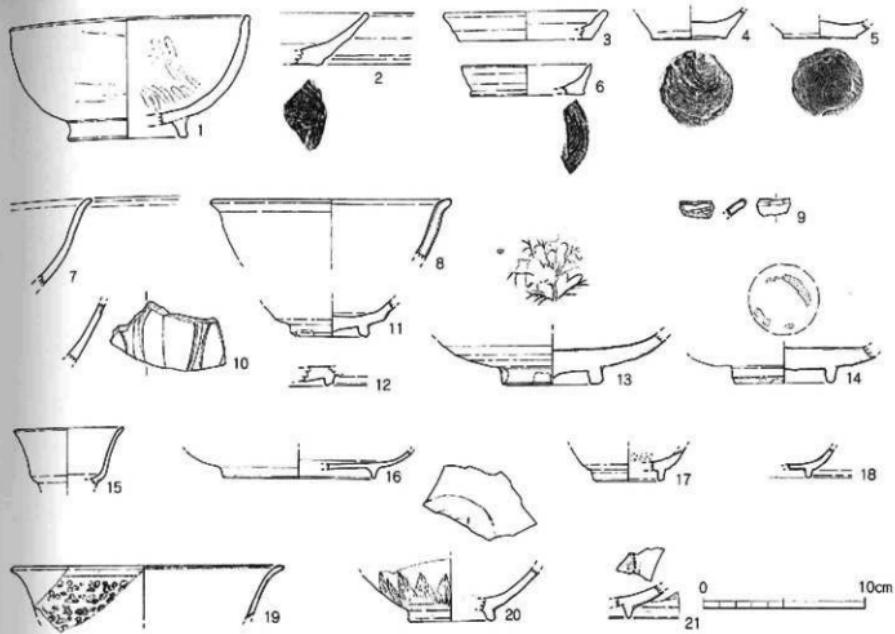
ただし、何度も言うように無数の柱穴を検出したこと、中世の掘立柱建物はある程度軸が曲がっていても建物を建ててる傾向があること。そのほか青磁が出土した柱穴が隣接してであること。以上のことから本建物に関しては無理に建物として認定した感も否めない。また一方で、建物と認定したもののが軸線上には無数の柱穴がかかっており、建物であった場合、上記以外の柱穴も伴なう可能性を否定できない。よって、当4区4号掘立柱建物、および次の4区5号掘立柱建物に関しては軸線上にかかる柱穴も図示している。

4区5号掘立柱建物（第41図）：4区南東端に位置する。北側では4区4号掘立柱建物が隣接する。南方は大きく削平を受けており、建物の南側長軸の2柱穴は削平のためか見当たらない。現状では2間×1間の規模である。柱穴間が2.2～2.4m程の間隔である。4区4号掘立柱建物同様、軸線にかかる柱穴も図示している。

中世後期以降の出土遺物：墓および掘立柱建物の時期と考えられる中世後期から近世前期のものを中心に図示した。

①土師質土器（第42図1～6）

1は壺形で、1／6程残存する。復元口径14.6cm・復元底径7.2cm・器高7.3cmである。胎土は精良で、白色粒子、赤色粒子、石英、角閃石を含む。色調は黄橙色である。焼成は良好である。やや摩耗するため調整が判別しづらい。外面は回転ヨコナデ？、内面はミガキで、方向は辛うじて判別できる。1区南東端部付近で道路造構下位の整地土より出土した。2は壺で、口縁部～底部にかけて1／10程残存する。小片のため、口径・底径は不明である。器高3.1cmである。胎土には赤色粒子を多く含み、また微粒の金雲母を含む。色調は淡い黄橙色である。焼成は良好である。調整は内外面回転ヨコナデ、底部は糸切りである。1区性格不明造構より出土した。3は皿である。口縁部～底部にかけて1／7程残存する。復元口径は9.8cm・復元底径は7.8cmである。器高1.7cmである。胎土は精良で、赤色粒子、白色粒子、また微粒の金雲母を含む。色調は淡い黄橙色である。焼成は良好である。調整は内外面回転ヨコナデ、底部は糸切りである。1区東側で造構検出時に出土した。4は皿である。口縁部付近が欠損するのみである。口径は7cm弱と思われる。底径は5cmである。器高は2cm程と思われる。胎土には赤色粒子、白色粒子、石英を含む。色調は橙色である。焼成は良好である。調整は内外面回転ヨコナデ、底部は糸切りである。1区性格不明造構の西側上場付近で出土した。5は皿である。底部付近が残存する。底径は4.5cmである。残存器高は1.1cmである。胎土には赤色粒子、白色粒子のほか、微粒の金雲母を含む。色調はやや暗い黄橙色である。焼成は良好である。調整は内外面回転ヨコナデ、底部は糸切りである。1区性格不明造構より出土した。6は壺である。口縁部～底部が1／4崩壊する。復元口径7.8cm・復元底径6.8cm・器高1.9cmである。胎土は精良で、赤色粒子、白色粒子を



第42図 土師質土器および輸入陶磁器実測図

含む。色調は淡い黄褐色である。焼成は良好である。調整は内外面回転ヨコナデ、底部は糸切りである。また外面に煤らしきものが付着する。4区5号柱穴より出土した。

これらの生産年代はいずれも16世紀と思われる。

②輸入陶磁器（第4-2図8・9・11~21）

8・9・11・13・14は青磁である。8は碗である。口縁部～底部が1/9程残存する。口縁部は端反りである。復元口径14.4cm・残存器高3.7cmである。胎土はやや灰色がかかった白色である。釉調はうぐいす色である。また内外面とも釉薬が厚くかかっている。3区南側倒の床土より出土した。生産年代は15世紀である。9は後花皿の口縁片である。小片のため口径は不明である。残存器高は1cmである。胎土は灰色で、精良である。釉調はうぐいす色である。内には模様がみられる。1区より出土した。生産年代は15世紀である。11は碗である。体部下部～底部が残存する。外面では体部下部と底部との境に横が確認できる。底径4.7cm・残存器高2.3cmである。焼成が不良で、おそらく低温で還元しきれていないと思われる。よって胎土は黄褐色のまま、白色粒子・石英・赤色粒子が確認できる。釉調は灰色がかかったオリーブ色である。1区での表様である。生産年代は16世紀である。13は龍泉窯系の皿である。体部下部～底部が残存する。体部外面には窓削りがみられる。また見込みには彫り込みによる文様がみられる。浅学のため彫りこみの形態は分からない。底径6.0cm・残存器高3.1cmである。釉調はやや暗いうぐいす色で、外面の高台にも一部で釉が施されている。4区B号柱穴（出土状況第41図）より出土した。生産年代は15世紀である。なお、同柱穴からは弥生土器も出土している（第33図6）。14は龍泉窯系の皿である。体部下部～底部が残存する。見込みには別のものが釉着した痕跡が確認できる。底径6.0cm・残存器高2.2cmである。釉調はうぐいす色で、見込みおよび疊付～高台内側以外に釉が施されている。4区A号柱穴（出土状況第41図）より出土した。生産年代は14～15世紀である。

15~18は白磁である。15は小坏である。口縁部~体部下部が1/15残存する。復元口径6.8cm・残存器高3.7cmである。胎土は白色である。釉調はやや暗い白色で、残存するすべてに施されている。1区東端部の田の床土より出土した。生産年代は16世紀である。16は皿である。体部下部~底部が1/6程残存する。復元底径9.1cm・残存器高1.75cmである。胎土はきめ細かく精良で白色である。釉調はきれいな白色である。4区東端部の後世の整地層より出土した。17は小坏である。体部下部~底部が1/6程残存する。復元底径4.2cm・残存器高2.1cmである。胎土は白色で、黒い粒を含む。釉調はややクリームがかった白色である。2・3区より表探した。生産年代は16世紀である。18は皿である。体部下部~底部片である。残存器高1.8cmである。胎土は白色で、黒い粒を含む。釉調はやや暗い白色である。1区1号土坑より出土した。生産年代は16世紀である。

19~21は中国産の染付である。19・21は景德鎮、20は漳州窯である。19は青花碗である。口縁部~体部にかけてが残存する。復元口径16.6cm・残存器高3.3cmである。胎土は精良で、白色である。釉調はやや青みを帯びた白色である。1区性格不明遺構より出土した。生産年代は16世紀前半である。20は碗である。体部下部~底部にかけてが残存する。復元底径5.2cm・残存器高4.0cmである。胎土はやや精良で、黒い粒を含む。白色である。釉調はやや青みを帯びた白色である。釉は墨付より内側はかきとられている。1区性格不明遺構より出土した。生産年代は16世紀である。21は青花碗である。体部下部~底部にかけての破片である。残存器高2.0cmである。胎土は精良で、白色である。釉調はやや青みを帯びた白色である。墨付にのみ釉剥ぎがみられる。1区道路遺構の整地土より出土した。生産年代は16世紀前半である。

③近世陶磁（第43図）

1は肥前系陶器の掘鉢の口縁部片である。残存器高3.6cmである。胎土は精良で、濃灰色である。色調は口縁部付近が淡い黒褐色、その他の赤褐色である。口縁端部外面に若干釉が付着する。4区南西側整地層より出土した。2は関西系陶器の土瓶片である。残存器高2.2cmである。胎土は灰色である。釉調は灰色がかかったオリーブ色である。1区の南壁面より出土した。3は陶器の胴部片である。傾き・器種は不明である。胎土は精良で、やや暗い赤褐色である。色調は淡い赤褐色である。調整は内外面とも叩きのちなである。なお、叩きは外面が横位の並行叩き、内面が格子目状叩きである。2区の田の床土より出土した。4は陶器の擂鉢片であろう。摩耗が著しい。内面に摺目と考えられるものが確認できる。残存器高3.4cmである。胎土に白色粒子・赤色粒子が含まれる。色調は橙色である。2区の遺構検出時に出土した。5は陶器である。7を参考にすると摺目が底面まで施されているのに対し、本遺物は底面にまで摺目が施されていない。よってこね鉢片であろう。残存器高4.1cmである。胎土は灰色もしくは淡い灰色である。白い粒を含む。色調は、外面が暗い橙色・赤褐色で、内面が褐色である。調整は内外面ともなである。1区東端部の田の床土より出土した。6は陶器の掘鉢片である。胴部下部と思われる。残存器高4.4cmである。胎土に白色粒子・赤色粒子が含まれる。色調は灰色である。表探遺物である。7は陶器の擂鉢の底部片である。残存器高4.3cmである。胎土は精良で、白色粒子を含む。色調は、外面が暗い橙色で、内面が灰色である。調整は外面が削りのちなで、底面が時計回りに削りである。3区南西端部西壁面より出土した。8は肥前系（唐津系）陶器の溝線皿である。3/5程残存する。復元口径は13.1cm・復元底径は3.4cm・器高は4.6cmである。口縁部は溝線で、高台は兜巾高台である。見込には砂目、また別の遺物との軸着を剥がした時の欠損が確認できる。胎土は灰色で、白色粒子を含む。釉調は灰色がかかったオリーブで、内面にはほぼ全面、外面には口縁部付近に施釉されている。生産年代は1600~1630年である。3区11号掘立柱建物南東端の柱穴の埋土より出土した。9は肥前系陶器の碗である。体部下部~底部にかけてが1/3程残存する。復元底径は4.3cm・残存器高は2.8cmである。見込および高台付近には胎土目が確認できる。また見込には薙灰の付着もみられる。胎土は精良で、灰色である。釉調はうぐいす色で、内面にはほぼ全面に施釉され、外面は高台は施釉されておらず、体部に施されている。10は肥前系の陶胎染付碗である。体部下部~底部にかけてが残存する。底径は5.2cm・残存器高は2.8cmである。

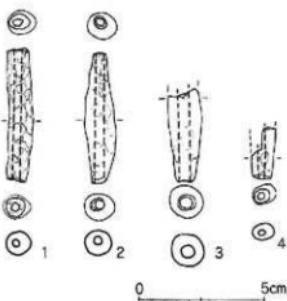


第43図 近世陶磁器実測図

ある。胎土は精良で、黒い粒を含む。色調は暗い褐色で一部で酸化還元して灰色である。釉調は青みがかった白色で、ほぼ全面に施釉されており、豊付にのみ釉剥ぎが確認できる。2・3区表採である。11は肥前系陶器の小杯である。2／3程残存する。復元口径は5.6cm・底径は2.7cm・留高は3.8cmである。口縁部が端反りである。また見込みに砂目が確認できる。胎土は淡い灰色である。釉調は灰色で豊付より内側以外に施釉されている。3区南側の田の床土より出土した。12は関西系陶器の皿もしくは盤である。体部下部～底部が1／4弱残存する。復元底径は7.0cm・残存器高は2.1cmである。内面には、蛇の目釉剥ぎがみられ、量ね焼きを行い別製品が釉着したものを取り外した時の欠損がみられる。胎土は精良で、白色粒子を含む。色調はやや黒い灰色である。釉調は濃緑である。内面は前述のことく、帯円状に施釉されていない箇所がある。外面は高台が施釉されていない。それ以外の残存箇所は施釉されている。生産年代は18世紀後半以降である。4区試製トレンチより出土した。13は肥前系磁器の灯芯押で、完存する。完存する例は2例目である。全高は4.8

c m・全幅は2.9 c mである。唐人をモチーフしたもので、全体的な軸調はやや青味がかった白色で、顔の部分に鉄軸を施し茶色である。欠損している下部以外全面に施釉している。お尻にあたる部分には芯を通したと思われる1 c m前後の焼成前の穿がみられる。内面は、詳細が不明であるが空洞である。耳の隙間から中をみると、頭部までつづくと思われる。胎土は白色である。生産年代は1630～1650年である。2区南西部より出土した。

これらのほか17世紀代の白磁紅皿、17世紀末～18世紀前半の内野山窯系綠釉皿、18世紀前半の大明年製くずれ銘の染付、18世紀後半の見込み蛇の口釉剥ぎ碗、1820～1860年の肥前磁器染付端反碗、型紙摺りの染付などが出土している。肥前磁器染付端反碗、型紙摺りの染付などが出土している。このように江戸時代を通じて遺物が散見される。



第44図 土鍾実測図

④土鍾（第44図）

4点出土した。全て管状土鍾である。形態的には、小口も胴部もほぼ同じ径の棒状のもの（1）と、小口より胴部の径が大きく最大径であるものの（2・3）に大別できる。なお、（4）は欠損のため不明である。

1は完存する。全長さ5.45 c m・幅0.95 c m・重量5.8 gである。胎土には石英を含む。色調は橙色～灰色である。焼成は良好である。一部で黒斑が確認できる。孔は断面円形で、棒状工具で穿たれたと考えられる。小口側の断面はやや方形状を呈す。孔を穿つ時に孔を広げようとしたために生じたものであろう。また同所には僅かに欠けも確認できる。紐使用による可能性もある。調整は手捏ねのちナデである。指頭圧痕が多数確認できる。3区11号掘立柱建物南東端の柱穴の埋土より出土した。2は完存する。全長さ5.3 c m・幅1.25 c m・重量5.5 gである。胎土には赤色粒子・金雲母を含む。色調は灰赤色～暗い橙色である。焼成は良好である。小口の一方には紐使用による欠けも確認できる。調整は手捏ね後タテナデである。指頭圧痕が確認できる。3区北東端の包含層より出土した。3は2/3ほど残存する。残存長3.8 c m・幅1.35 c m・重量5.7 gである。胎土には石英・金雲母を含む。色調は灰赤色～橙色である。焼成は良好である。調整は、摩耗のため分かれりづらいため、手捏ねである。3区11号掘立柱建物南東端の柱穴の埋土より出土した。4は1/3ほど残存であろうか。残存長2.1 c m・幅1.0 c m・重量1.2 gである。胎土には赤色粒子・金雲母を含む。色調は暗い褐色である。焼成はやや良好である。小口には、切断し小口を作成した折の、めくり返りが未調整のまま残っている。調整は、丁寧なタテナデである。3区より出土した。

3区馬埋葬遺構（第45図）：3区のほぼ中央に位置する。当初は隅丸方形の土壙墓と東側と南側でそれぞれ柱穴1基ずつが切り合っているものと判断した。それを裏付けるかのように、中心部で土層の乱れが、土層断面でも、平面でも確認できた。また骨らしきものが出土したことでもこの見解を後押しした。しかし掘り進めていくうちに、骨は馬の骨であることが木村幾多郎氏（大分市歴史資料館）の鑑定で明らかになった。よって中心部でみられた土層の乱れは、土壙墓の蓋が腐敗したため上位の土が土圧により下位に移動して生じたものではなく、馬の体部が腐敗することによってガスが抜け、上位の土が土圧により下位に移動して生じたものであることが判明した。当然、墓壙の形に関する見解も修正を必要とした。隅丸方形に南東端が半円に突出する形であることが判明した。他の遺構との切り合いは東側で柱穴とあるのみであった。

墓壙内には骨の一部が残存していた。頭骨・前肢・後肢である。体幹部の骨はほとんど残存していないかった。骨の残存状況が良好で、頭骨も鼻や目の周辺も少々残存していた。墓壙の西端に位置する。前肢は遠位を欠いている。肢を折りたたむように埋葬していた。後肢は半円に突出している墓壙にまで伸びていた。これらの骨

はバインダー処理を施し取り上げをおこなったが、歯以外、原型を留めることはなかった。残存状況から推定できる体高は120cmほどである。

以上の状況から、埋葬時を想定すると、最初に胴丸方形の墓壙を掘削し、頭→前肢（このとき先端部を折りたたむ）・後肢の順番で埋置し、最後に後肢の先端部がおさまりきれなくて、半円状にさらに入棺剤し、先端部を埋葬したものと思われる。

時期は、中世後期～近世初期の柱穴を切っていることから近世初期以降の遺構と思われる。

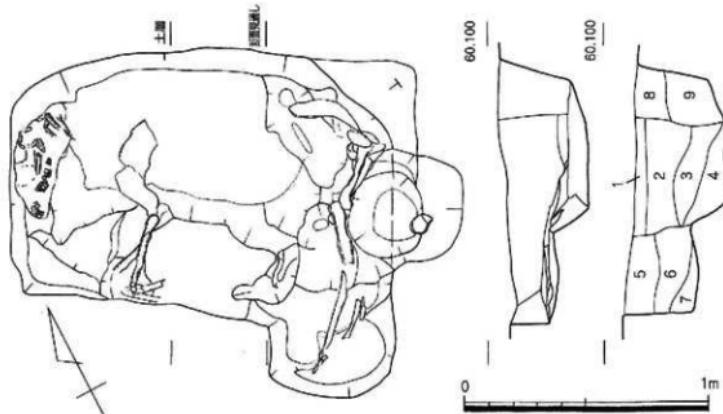
1・2区道路痕跡（第46図）：1区の南側、2区の北側でそれぞれ検出した。

まず1区の方に聞いて説明する。表土および山の盤土を除去したところ、北側および中央では地山や包含層が検出できたが、南側では、同一レベルでは両者とも検出できなかつた。しかし最大幅4mで玉砂利や平瓦片を敷いている痕跡を確認した。明治28年頃の地籍図を確認したところ、道路に対応する箇所であった。

2区に関しては、表土および山の盤土を除去したところ、北側で段を埋めて整地した痕跡が一部で確認できた。同様に明治28年頃の地籍図を確認したところ、道路に対応する箇所であった。

これらの道路痕跡のすぐ北側では旧10号線が並行するように並んでいる（写真図版1-4）。

3区6号土坑および出土遺物と3区道路状遺構（第47図）：3区北西端に位置する。西側の3区6号土坑は、長軸2m程・短軸1.2m+ α のやや梢円形を呈す土坑である。この土坑の西側では板の痕跡もみられた。遺構内からは夥しい数の蝶とともに、陶器類（第47図1～5）、板の痕跡、炭、鉄塊が出土した。なお、これらの蝶は砂岩がほとんどであるが、凝灰岩も出土した。1は瀬戸・美濃の染付碗である。口縁部～体部が1/4程

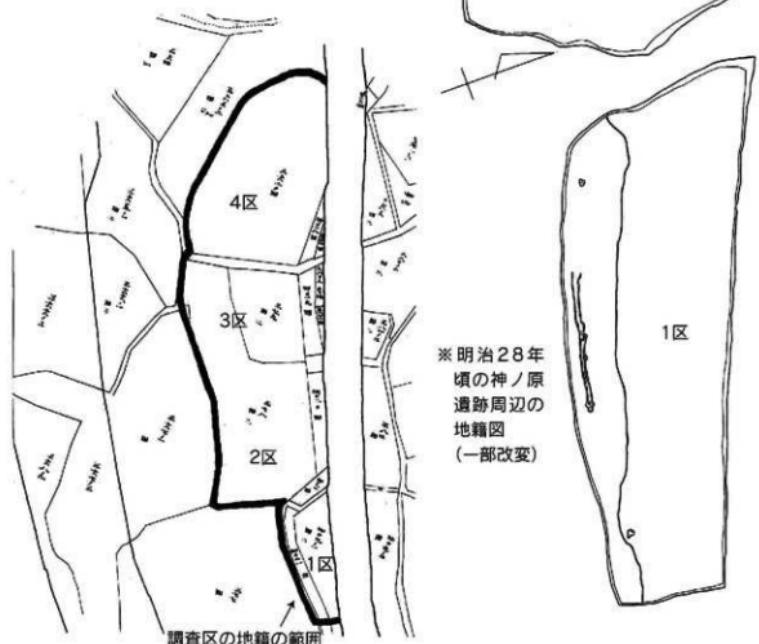


1. 椿茶褐色層：やや風化がある。2cm大のアカホヤブロックを多く、1cm大の地山ブロックを含む。
2. 椿茶褐色層：やや風化がある。3cm大・3mm大のアカホヤブロック、5mm大の地山ブロックを含む。1/4にはあらが、やや粗面で、鋸歯りなし。
3. 椿茶褐色層：やや風化がある。3cm大のアカホヤブロック、5mm大の地山ブロックを含む。1/4にはあらが、やや粗面で、鋸歯りなし。
4. 黒色層：10cm以下の大カホヤブロックを多く含む。鋸歯りなし。
5. 椿茶褐色層：やや風化がある。1.5cm大のアカホヤブロックをまばらに、2cm大の地山ブロックを多く含む。
6. 茶褐色層：やや風化がある。1.0cm大のアカホヤブロックを表面に含む。1/4にはあらが、やや粗面で、鋸歯りなし。
7. 黒色層：やや風化がある。1.5cm大のアカホヤブロックをまばらに含む。1/4にはあらが、粗面で、鋸歯りあり。
8. 椿茶褐色層：やや風化がある。3.5cm以下の大アカホヤブロック、5cm大の地山ブロックを含む。1/4にはあらが、粗面で、鋸歯りあり。
9. 椿茶褐色層：やや風化がある。5cm以下の大アカホヤブロック、2.5cm以下の大地山ブロックを多く含む。1/4にはあらが、やや粗面で、鋸歯りあり。

第45図 3区馬埋葬遺構

残存する。復元口径は10.9 cmである。胎土は白色でやや荒い。釉調はややクリーム色の白色である。模様は青色である。生産時期は19世紀前半である。2は肥前の染付碗で、いわゆる「くらわんか茶碗」である。口縁部～体部が1／6程残存する。復元口径は9.4 cmである。胎土はやや灰色の白色である。釉調は透明である。模様は青色、もしくは群青色である。生産時期は18世紀後半である。3は肥前の染付小壺である。口縁部～体部が1／4程残存する。復元口径は7.5 cmである。胎土は白色で精良である。釉調は透明である。模様は群青色である。生産時期は18世紀後半以降である。4は肥前系陶器の盤である。口縁部～体部が1／6程残存する。外面下位にケズリを明瞭に残す。復元口径は20.3 cmである。胎土はやや黄味帯びた灰色で、やや精良である。ムラがあり5 mm大の粒が1つ確認できる。釉調は深緑である。口縁部から体部下位付近にまで施釉がみられる。内面に刷毛による模様がみられる。生産時期は18世紀後半以降である。5は肥前系陶器の瓶である。底部のみ残存する。復元底径は6.2 cmである。胎土は灰色で精良である。釉調はうぐいす色である。残存部全

2区



第46図 1・2区道路痕跡

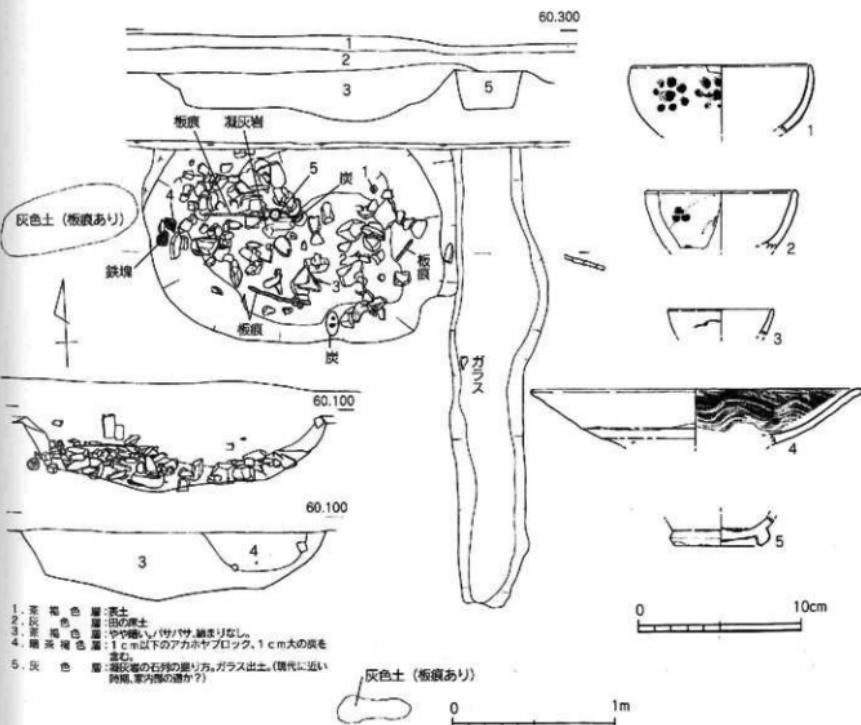
体に施錆がみられ、豊付の部分だけ掘きとっている。内面の見込には灰軋らしきものも確認できる。

東側の3区道路状遺構は南北に3m弱+ α のびるもので、最大幅0.5m程である。北側は調査区外までのびるため状況は不明である。東側・南側でそれぞれ板の痕跡がみられる。0.25m程の掘り込みに人頭大の凝灰岩を散き詰めていた。凝灰岩をとり除く段階でガラス片(瓶の破片?)が出土した。

これらの時期に関しては、後者はガラス片が出土していることから極めて現代に近い時期であることが想定できる。一方前者では18・19世紀の遺物が出土しているがこれらがこの遺構の帰属時期ではない。土層(第47図上)で確認すると道路状遺構の上層で3区6号土坑の理上が確認できることからこちらの時期も極めて現代に近い時期であるといえる。

ここで今一度、第46図の地籍図を参照してみると、これらの遺構が検出された場所は宅地とい記載がある。後者の道路状遺構は人頭大の凝灰岩を並べていたことから宅地の敷地内を通る(例えば門から玄関に向かってのびる)道路であった可能性を想定できる。一方前者は廃棄物を埋めた土坑であろうか。これらの周辺でみられた板の痕跡もこの宅地を仕切るものであったと考えられる。

極めて現代に近い時期が想定できたが、実はこの痕跡に関して知る方は私が探した限りではおられなかった。下手をすると昭和の痕跡かもしれないものが忘れ去られているという状況を慮り、敢えて図示した。(吉川)



第47図 3区6号土穴および出土遺物と3区道路状遺構

第5章 自然科学的考察

神ノ原遺跡出土人骨について

石川健・田中良之

九州大学大学院比較社会文化研究院

1. はじめに

大分県南海部郡直川村（現佐伯市直川）神ノ原遺跡において直川村教育委員会による調査が行われ、中世土壙墓から人骨が出土した。同教育委員会より九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に人骨調査の依頼があり、現地にて実測・取り上げを行った。その後、人骨は九州大学へ搬送され、同講座において整理・分析作業を行った。以下にその結果を報告する。なお、人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院考古人類資料室に保管されている。

2. 出土状況

2-1 3区1号土壙出土人骨

墓壙長軸北側より頭頂部の痕跡が認められ、その東側に乳様突起部が認められる。乳様突起南側に上下顎の歯牙が咬合状態で出土し、北側に大臼歯、南側に切歯が位置する。頭蓋痕跡及び歯牙の南側より下肢骨が北西方向に長軸をとった状態で出土している。

頭蓋骨の痕跡と歯牙の位置から、顔面が南側を向いた北頭位、右側臥の状態で埋葬されていたものと考えられる。また、伸展した状態で埋葬するには墓壙が小さいことから、墓壙東壁に沿うように椎骨から寛骨が位置し、下肢を屈曲した状態で埋葬されていたものと考えられる。さらに下肢骨と出土土器の位置から腹部に土器を抱え込むような状態であったと推定できる。

2-2 3区2号土壙出土人骨

墓壙北西より、歯牙小片が多数出土した。出土歯牙は咬合状態ではない。埋葬姿勢は不明である。

2-3 3区9号土壙出土人骨

墓壙北側より歯牙が出土した。歯牙の残存状況は不良であるが、臼歯部において上下顎が咬合した状態であることから、ほぼ埋葬時の位置を保つものと考えられる。詳細な埋葬姿勢については不明であるが、北頭位で埋葬されていたものと考えられる。錢2枚が出土している。

2-4 3区10号土壙出土人骨

墓壙北側で頭蓋骨の痕跡が認められた。また一部歯列弓を保った状態で歯牙が出土していることから、埋葬時の位置をほぼ保っているものと考えられる。頭頂部を北に、顔面を南東に向かっての北頭位と推定される。軀幹骨・四肢骨が認められず、埋葬姿勢については不明である。

3. 人骨所見

3-1 3区1号土壙出土人骨

【保存状態】人骨の保存状態は良くない。頭蓋骨痕跡及び上下顎歯牙、下肢骨が残存する。頭蓋骨痕跡は頭頂部片である。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ^d	M ^s	M ^t	P ^d	P ^s	C	I ^d	I ^s	I ^t	/	C	P ^d	P ^s	M ^d	/	/
/	M _d	M _s	P _d	P _s	/	/	/	/	/	/	/	/	M ^d	/	*

(○)歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 △歯根のみ - 遊離歯 () 未萌出 c歯以下同様)

歯牙咬耗度は橋原¹¹cである(橋原1957)。これら歯種同定が可能であった歯牙以外にも左右不明の下顎第三大臼歯1、下頸切歯1他、細片化したものが残存する。

下肢骨が出土するが、保存状況が悪いことから部位・左右などについては不明である。

【性別・年齢】性別は判定可能な部位が遺存しないことから不明である。年齢は、歯牙咬耗がやや進行していることから成年と推定される。

3-2 3区2号土壌出土人骨

【保存状態】人骨の保存状態は悪い。歯牙小片が残存するのみである。歯種の判別は、保存状況が非常に悪いことから不能である。

【性別・年齢】性別・年齢は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

3-3 3区9号土壌出土人骨

【保存状態】人骨の保存状態は悪い。歯種同定の不能な歯牙小片が残存するのみである

【性別・年齢】性別・年齢は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。

3-4 3区10号土壌出土人骨

【保存状態】人骨の保存状態は悪い。部位不明な頭蓋小片および歯牙が残存する。残存歯牙の歯式は以下の通りである。これらの他にも小片のため歯種の同定が不能な歯牙片が認められる。

/	/	/	/	/	/	I ^d	I ^s	I ^t	/	C	P ^d	/	/	/	/
/	/	/	/	/	C	/	/	/	C	P ^d	/	/	/	/	.

【年齢・性別】年齢・性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

4.まとめ

以上本遺跡出土人骨についての報告を行ってきた。調査においては4体の人骨が出土した。これらの出土人骨はいずれも保存状況が良好ではなかったため、計測に耐えうるものはなく、形質的比較を行える個体は得られなかつた。

埋葬姿勢についても、人骨の残存状況が悪くほとんどの場合詳細を知ることができなかつた。但し、頭蓋骨あるいは歯牙が出土している場合をみると、1号・9号・10号土壌において頭位を北にとっている。また、1号土壌については、頭蓋と歯牙および下肢骨の位置関係から、右側臥で下肢を屈曲し、腹部と大腿骨の間に上器を抱え込んだ状態での埋葬と推定された。このような側臥屈曲葬は、近隣地域では久住遺跡などの中世墓において認められる埋葬姿勢と共通するものである(板倉他2005)。また、腹部付近における土器の副葬については吉母浜遺跡において認められる(下関市教育委員会1985)。

謝辞

本報告にあたり、ご便宜を賜った吉田和彦氏をはじめ直川村教育委員会の各位に厚く感謝申し上げたい。

文献

板倉有大・田中良之, 2005: 5.久住遺跡出土人骨について, 久住町教育委員会編, 久住遺跡(久住御茶屋跡).

下関市教育委員会, 1985: 吉母浜遺跡.

橋原博, 1957: 日本人歯牙咬耗に関する研究, 熊本医学会雑誌, 31, 補冊4.

大分県佐伯市（旧直川村）神ノ原遺跡出土のウマについて

加藤 久雄（愛知学泉大学家政学部）

1. 緒言

神ノ原遺跡から出土したウマ骨資料の鑑定・報告を大分県佐伯市（旧直川村）教育委員会から依頼された。以下では、主にウマ骨資料の観察・計測所見を述べる。

出土状況について：当該遺跡は、大分県佐伯市（旧直川村）上直見にあり、旧直川村教育委員会によって2004年6月7日～10月13日に発掘された。出土したウマの骨の帰属時期については、現場における遺構群の面的配置や出土した土器の所見により、近世初期以降であると考えられている。遺構から出土したウマは、東西方向に長い楕円形の穴に体の左側を上に向か、穴の形状に合わせわざかに体を曲げた姿勢で埋められたと判断される。後肢の一部はこの遺構とは別の穴状遺構から出土している。頭位は西側である。

残存状況について：出土したウマ骨は、比較的残りにくい脊椎骨や肋骨以外のほぼ全身の1体分が残存した。しかしながら、発掘現場でのバインダーによる保存処理にもかかわらず、土圧の影響により細かくひび割れ、火山灰性の酸性土壤の影響であるのか、破片断面が著しく溶解しているため、取り上げ段階で細かい破片となってしまった。

報告する資料について：取り上げ後に、旧直川村教育委員会にて著者が観察したウマ骨資料は、骨質が劣化により著しく脆弱で接合・復元が困難な小破片を主に構成されていたため、ほとんどの破片は観察や計測が著しく困難な状態であった。それゆえ、一部の接合が可能で観察や計測に耐えうる残存状況が良い歯牙を中心とした部位について報告したい。

2. 出土したウマの歯の基礎データ

計測は、主要部位についてはDriesch (1976) を参考におこなった。咬耗の状態は、奈良文化財研究所(2004)を参照し観察した。計測・観察結果を表1に示す。

3. 出土したウマの形態的特徴

- ・年齢と性別：歯の咬耗の状況から、10歳以上（10代後半の可能性が高い）の成獣個体と考えられる。性別については、その決め手となる犬歯と判断される破片や犬歯が収まっていた顎骨歯槽部と判断される破片が出土していない。したがって、それらの点から判断するとメスの可能性がやや高いと判断される。
- ・体高について：ウマの骨を検出出した際、発掘調査者によって後肢遠位部から肩甲骨最上部の高さから計測された体高は、約120cmであった。しかしながら、取り上げられた骨資料からは、体高推定が可能な破片が残存しないためこれ以上は述べない。
- ・歯：資料に含まれる歯は、残存状況が相対的に最も良好な部位であった。計測値は、表1示す。特徴として残存する歯の磨耗が著しいこと、その影響で歯根部までの高さが著しく短くなっていることがあげられる。また、歯冠の象牙質や歯根部の残存状態もあまりよくないため、これ以上は述べない。

4. まとめ

- ・出土したウマ骨の帰属時期については、近世以降と考えられる。
- ・SK-03遺構から出土したウマ骨は、ほぼ全身の1体分が残存していた。
- ・歯の咬耗の状況から、10代後半の年老いた成獣個体であろうと考えられる。性別については、メスの可能性がやや高いと判断される。

- ・発掘調査者によって後肢遠位部から肩甲骨最上部の高さから計測された体高は、約120cmであった。現在の在来ウマの小型に属するくらいのサイズであり、主な遺跡出土ウマの体高の平均値（約126mm）（西中川1991）よりもやや小さい。

5. 参考文献

奈良文化財研究所 2004 「環境考古学4 牛馬骨格図譜」埋蔵文化財ニュース 115号 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター (pp.16)

西中川駿 1991 「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書 (pp.197)

Driesch, A. 1976 "A guide to the measurement of animal bones from archaeological site", Peabody museum bulletin 1, Peabody museum of archaeology and ethnology, Harvard University, (pp.136)

6. 出土哺乳動物種名表

哺乳綱 Class Mammalia

奇蹄目 Order Perissodactyla

ウマ科 Family Equidae

ウマ *Equus caballus*

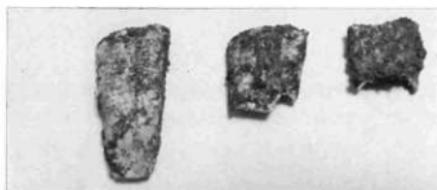
7. 謝辞

大分県佐伯市および旧直川村教育委員会および同（元）文化財専門員 吉田和彦氏には、貴重な動物遺存体資料の報告の機会を頂いた。厚く御礼申し上げたい。

第7表 神ノ原遺跡出土のウマの歯についての基礎データ

資料番号	写真番号	上	下	齒	種	頃	位	左	右	歯心幅(mm)	歯舌径(mm)	歯側面徑(mm)	歯根面徑(mm)
①	A	L	I	?	R			12.44	-	-	-	-	-
②	A	?	I	?	?			13.24	-	-	-	-	-
③	A	?	I	?	?			11.69	-	-	-	-	-
④-1	B	L	M	I	R			20.48	15.36	11.63	-	-	-
④-2	B	L	M	2	R			19.07	18.72	10.86	-	-	-
⑤	D	L	M	3	R			31.27	13.25	11.84	-	-	-
⑥	D	L	M	3	L			31.37	13.69	11.73	-	-	-
⑦	B	L	M	2	L			21.33	16.67	10.41	-	-	-
⑧	D	L	M	1	L			19.78	20.00	-	-	-	-
⑨	D	L	P	4	R			22.26	-	-	-	-	-
⑩	D	L	P	4	L			22.90	-	-	-	-	-
⑪	D	L	P	2	L			23.41	-	-	-	-	-
⑫	C	U	M	3	L			20.08	-	-	-	-	-
⑬	C	U	M	2	L			-	-	-	-	-	-
⑭	C	U	P	3	R			22.35	23.06	-	-	-	-
⑮	C	U	P	4	R			19.54	-	8.96	-	-	-
⑯	C	U	M	1	R			20.75	23.07	-	-	23.88	-
⑰	C	U	M	2	R			21.80	23.54	11.59	-	-	-
⑲	C	U	M	3	R			23.71	21.44	-	-	10.83	-

-:破損により計測不能。



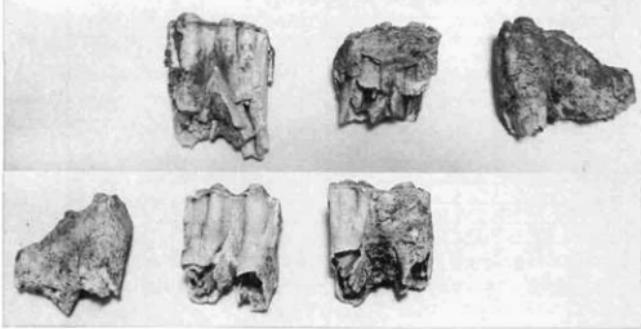
写真A 切歯（切縁を天に撮影）



写真B 下顎骨



写真C 上顎臼歯



写真D 下顎臼歯

第6章　まとめと考察

縄文時代早期

土器・礫などの分布について

第16-1図（上）の土器や礫の接合関係でみると、両者とも隣接するものが主に接合しているが、その一方で、距離が離れたものに関しては、地形的影響で動いただけではなさそうなものもある。礫⑩は3つの破片が接合するが、それらは被熱しておりまた、3者うち2者が3区5号集石と、1者が3区7号集石と隣接しており、人為的な移動の可能性がある。

土器および石器の垂直分布では、レベルから2つに分けることができた。両者ともに、本遺跡中で大多数を占める条痕文土器、無文土器を伴なっており、土器から差を見出すことは困難であった。小型剥片石器では、色調、質等から細分したチャートが、同じ細分同士で近接して分布するものもあることから、まだ接合する可能性がある、より細かい検討によって、何か見出せるだろう。

なお、土層で確認できるIV₁とIV₂層との境では遺物からは、明確な差はでなかった。

土器について

ここでもう一度、本遺跡における当該時期の土器の特徴を列挙する。口縁は直口もしくはやや外傾するものが主で、そのほか内傾するもの、外反するもののがみられる。底部は丸底、若干乳房状を呈すものである。調整は、条痕・無文・押型文・燃糸文である。これらの比率は、800点近くの土器（一部、接合しない同一個体もそれぞれ1点として数えている。）のうち、条痕文が3割近く、無文が半数近く、押型文が3点、燃糸文が3点ほどである。残りの2割弱は不明としたものであるが、印象としては無文が多いと考える。器壁は、0.5cm～2cm強である。口縁直下に瘤や穿孔がみられる、などである。

これらのアカホヤの下層から出土した土器は、数点の押型文を除き、概ね早期前半に位置づけられるものである。燃糸文も器壁が著しく厚いことから当早期の土器相の中でも新しい方に属するものと考える。これらの土器は二日市遺跡を例に挙げるならば、第5文化層～第7文化層という幅の中で考えられるものである。その他、大分県では、中原遺跡（宇佐市）・陽弓遺跡（国東町）・野田山遺跡（大分市）・二日市遺跡（九重町）などが関連するものとして列挙できよう。よって、いずれにせよ数時期の土器が混在していると考えられる。これはプロポーションにややバリエーションがあること、調整も、条痕においては条痕の相違・条痕の方向の相違・無文においてはナデ調整・ミガキ調整・工具ナデなどバラティに富むこと、器壁も薄手から厚手がみられることからも首肯できると考える。なお、本遺跡では有舌尖頭器が出土しているため、草創期の上器が出土しているか注意を要するところである。近隣では阿蘇原上遺跡（宮崎県高千穂町）において草創期の上器が確認されている（松林・甲斐・松木2003）、実見したものの本遺跡に関連を彷彿させるような上器は出土していない。

よって、本遺跡のアカホヤの下層の上器の位置づけは早期前半内に数時期あり、無文と条痕文が比率を変化させながらその主体を占め、ある時期若干の燃糸文が加わると理解しておく。当然、早期後半の押型文期に伴なう無文土器も存在するものと考える。これらの土器が、それぞれどの時期に対応するものであるかという位置づけは、本遺跡の場合、非常に困難なものと考える。本遺跡の土層堆積・および上層内の遺物の一括性は、洞穴遺跡など層序がしっかりしており、なおかつそこに含まれる土器の一括性が良好である可能性が高いものではなく、オープンサイトという層序がしっかりしていない可能性やその層に含まれる土器も数時期にわたる

可能性が高いというものであり、慎重を要することである。実際、上層であるⅣ₁層と下層であるⅣ₂層間の土器（例えば山形文）が数点接合している。分布図において集中する箇所のものを同時期に認定するなど、そのほかの方法で土器の組成を読み取ることも可能ではあるが、筆者の力量の外である。周辺の資料の増加が本件を解消してくれるものと信じる。

（吉田）

参考文献

松林豊樹・甲斐賀光・松本茂 2003 「阿蘇原上遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター

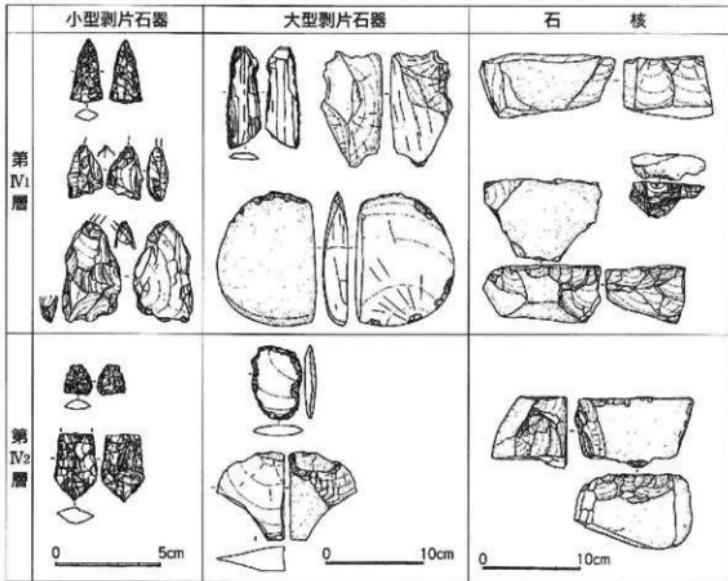
石器について

①石器全体について

本遺跡では、縄文時代早期の上下2層から多様な石器類が出土した。その石器組成は、先年（1998年）に発掘調査が行われた佐伯市長谷の「森の木遺跡」の石器組成と近似している。それはチャートを主体とする小型の剥片石器類、砂岩を素材とする大型の剥片石器類、砂岩礫を使った豊富な礫器類と共通するものである。

小型の剥片石器については、神ノ原遺跡では圧倒的にチャート主体であるが、森の木遺跡ではホルンフェルスが多く使用されている違いはある。また、森の木遺跡では、姫島産黒曜石が1点出土しているが、神ノ原遺跡でも姫島産黒曜石が撒乱層であるが1点出土している。さらに、神ノ原遺跡では佐賀閑半島方面で产出する結晶片岩製の剥片石器があり、チャートでは表れられない用途なのか注目される。

大型剥片石器と礫器類は全て流域に産する砂岩の転砾である。砂岩としては硬い、緻密な性質であり、森の木遺跡と同様に大型剥片石器の素材としても使用に耐えるものである。とくに神ノ原遺跡においては、礫器



第48図 神ノ原遺跡出土石器対比図（剥片石器・石核）

が多く出土した。なかでも片刃礫器が両刃よりも多く使用されている。これも森の木遺跡と共通する要素である。また、片刃礫器については、上層（IV₁層）と下層（IV₂層）では形態に相違がみられる。これは明らかに製作技法の変化と把えてよいものである。

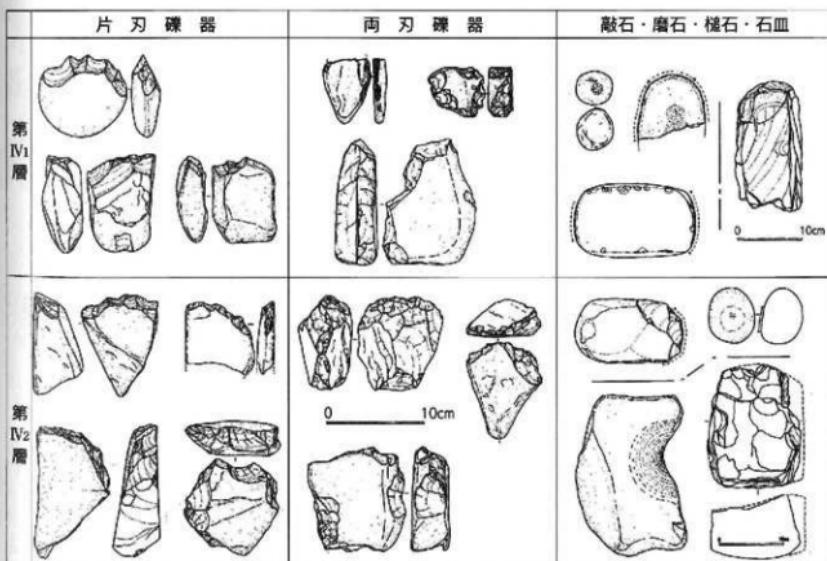
②礫器について

本遺跡においても早期の良好な礫器資料が得られた。下層（IV₂層）石器の礫器についていえば、片刃礫器の製作過程で分割による素材の確保という技法がみられた。それは、（1）できるだけ平坦な面をもつ大きな扁平礫を2～3に分割し、略三角形の素材をつくる。（2）礫の短辺に平坦面側から片面加工によって刃部をつくる。（3）周辺の稜を調整加工する。という順序である。この方法によれば、使用によって刃部が鈍くなった時の再生加工が容易である。なぜならば、平坦な底面からの片面からの加工によって常に鋭い刃部が保持されるからである。また下層（IV₂層）においては一個の片刃礫器でいろいろな角度の刃部をもつものがあり、複数の機能を有していたものとみられる。

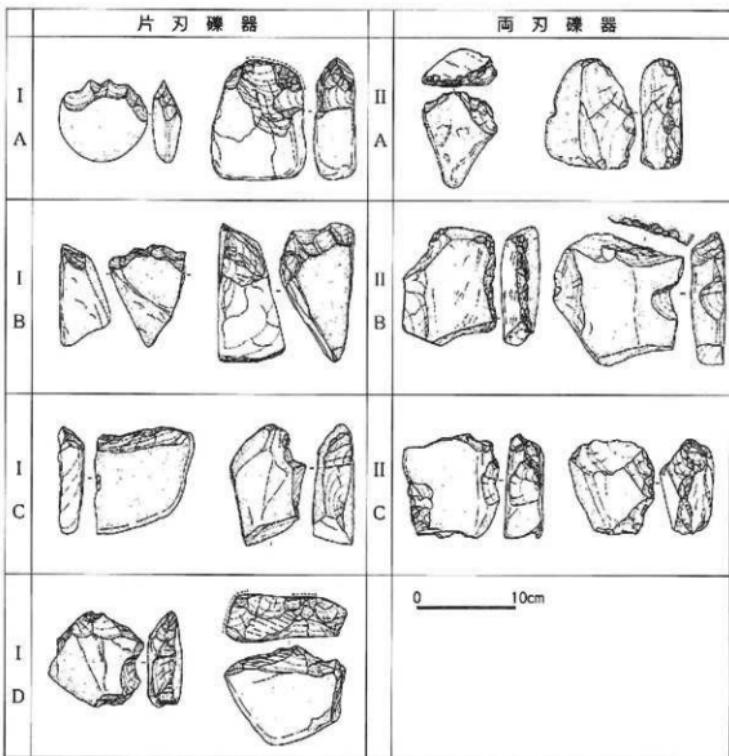
上層（IV₁層）の礫器には分割に技法はみられない。その替わり、適当な大きさの凹縁あるいは並角縁をそのまま素材として、その一端に加工したものである。その形態も単純なものではなく、刃部の形態、角度に変化がみられる。礫器についてもいくつかの機能を行っていたものであろう。あるいは、刃部の鋭いものは一つの石器で万能に近い用途をもっていたと考えられる。

本遺跡では磨製石斧が出土していない。大型磁石があることから、その存在は否定できないが、県下においては早期前葉の段階では出土例が少ないので指摘できる。本遺跡に比較的近い森の木遺跡においても磨製石斧は1点のみである。両遺跡ともに礫器とくに片刃礫器が多いことから、その両者の間に相間の関係があったのではないかとみられる。やはり、礫器の多くは、伐闇の用途に供されていたのではと推測されるものである。

(清水)



第49図 神ノ原遺跡出土石器対比図（礫石器）



第50図 神ノ原遺跡出土砾器の分類

参考文献

- 賀川光夫ほか編 1982 「政所馬渡」別府大学付属博物館
 清水宗昭ほか編 2004 「黒岩遺跡」大分県文化財調査報告書 第165輯、大分県教育委員会
 高橋信武編 1993 「宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書」大分県教育委員会
 高橋信武編 2000 「森の木遺跡」大分県文化財調査報告書 第109輯、大分県教育委員会
 楠 昌信編 1980 「大分県二日市洞穴」別府大学付属博物館

③有舌尖頭器について

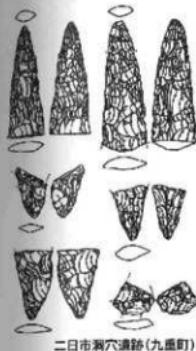
本遺跡からは有舌尖頭器と考えられるものが3点出土している。九州において1遺跡において3点出土することは稀であり、その位置づけには慎重を要する。全て早期の層からの出土であるが、有舌尖頭器の類属年代は早創期であることが一般的であり、その下限に関しては他地域では早期前半まで下げる傾向もあるが（大下2002）、九州に関してはまだまだ早期の層から出土しても草創期の流れ込みと判断することが現状である（近沢2005）。

本遺跡が、本項の「土器について」でも述べたように包含層に数時期の土器が混在する可能性や、IV₁層とIV₂層の間で遺物が接合するなど遺物の上下があることも上記の見解を助けるものと判断する。よって早期の層中よ

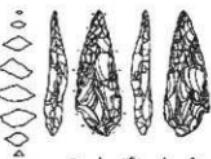
神ノ原遺跡



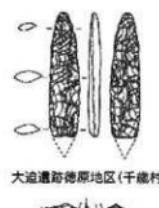
大分県



二日市洞穴遺跡(九重町)



日久保第1遺跡(山香町)



大迫遺跡(徳原地区千歳村)



出口遺跡(日田市天瀬)

宮崎県



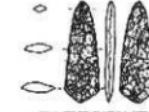
セベット遺跡(高千穂町)



北牛牧第5遺跡(高鍋町)

坂元遺跡(清武町)

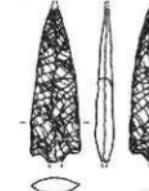
熊本県



鶴ヶ野第3遺跡(高城町)

古川北遺跡(益城町)

高知県



宮地遺跡

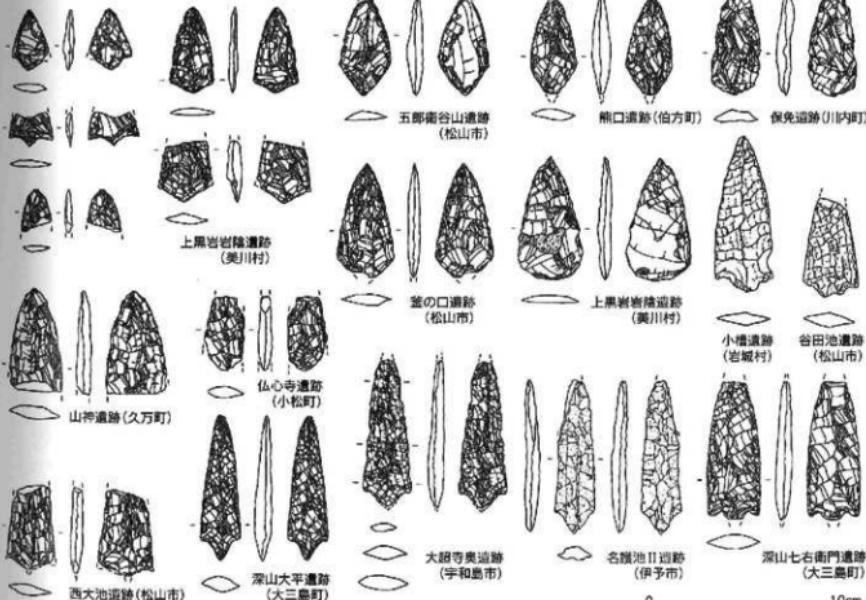


森社堵遺跡



長野A遺跡(福岡県)

愛媛県西部



0 10cm

第51図 神ノ原遺跡およびその周辺地域の有舌突頭器

りの出土であるが、本遺物を早期の遺物と判断するには躊躇する。

そのほか九州の有舌尖頭器の場合、土器と明確に共伴する例が僅かに知られる程度であり、土器との共伴が問題のひとつである。本遺跡でも有舌尖頭器の時期の中心である草創期の土器があるかどうか確認したが、結果は本稿の「土器について」で記載したとおりである。

最後に本遺物の形態であるが、第51図のように周辺の有舌尖頭器を集めた。大分県はいうに及ばず、隣接する宮崎県・熊本県・高知県・愛媛県西部と対象とした。こうしてみると、本遺跡の遺物は、同じ県である大分県出土のものとも形態的には似ていない。多数分布する本州に近い愛媛県西部はどうであろうか。当地域は舌部付近の逆刺が強いものが多い。上黒岩遺跡や五郎衛門山遺跡で舌部の形態が逆三角形のものがみられるもののやや形態的開きが感じられる。

こうした中で宮崎県の出土のセベット遺跡（高千穂町）・雀ヶ野第3遺跡（高城町）のものをみてみると、本遺跡のうち刃部が欠損する2点にプロポーションのみならず大きさが類似すると考えられる。

本遺跡のうち完形品のもう1点は、長野A遺跡（福岡県）出土のものが、先端が欠損するものの類似と考えられる。ただし、本遺跡のものが全長3.2cmに対し、長野A遺跡のものはその2倍ほどであると考えられるが……。

このように考えると、本遺跡の当該遺物は、分布の中心により近い愛媛県よりストレートに波及してきたものとは考えづらい。資料が少ない九州内での判断であるが、現時点では九州内の複雑な交流のなかでもたらされたものと判断したい。よって本遺跡で確認できる先端部が欠損する2点と完形品である1点の舌部間にみられる形態的差異も、単純に舌部の退化による型式の山→新を見るべき問題ではなく、形式の内での差異とを考えることも現時点では可能であると考える。

（吉田）

参考文献

大下 明 2002「近畿地方と東海地方西部における梓型紋土器期の石器群について」『第4回 関西縄文文化研究会 講文時代の石器－関西の縄文草創期・早期－』関西縄文文化研究会 など

近沢恒典 2005「雀ヶ野遺跡群」高城町教育委員会

図出典

愛媛県西部・高知県（多田 仁 1997「愛媛考古学」14 愛媛考古学協会、同 2003「紀要愛媛」第3号 財團法人 愛媛県埋蔵文化財センター）、大分県日久保第1遺跡（高橋信武 1993「第3章 3. 日久保第1遺跡」「宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書」大分県教育委員会）、大分県二日市洞穴遺跡（橋 昌信編 1980「大分県二日市洞穴」別府大学付属博物館）、大分県大迫遺跡（豊田徹士 1999「大迫遺跡徳原地区原田第2遺跡原地区」千歳村教育委員会）、大分県出口遺跡（橋 昌信 1986「第2節 縄文時代」「天瀬町誌」天瀬町）、宮崎県セベット遺跡（松岡良一 1984「第Ⅱ章 道標と遺物 5. 石器」「セベット遺跡」高千穂町土地開発公社／高千穂町教育委員会）、宮崎県北牛牧第5遺跡（草薙良雄 2003「北牛牧第5遺跡」「北牛牧第5遺跡 鉢座第3A遺跡」宮崎県埋蔵文化財センター）、宮崎県坂元遺跡（井田 篤・秋成雅博 2005「坂元遺跡」清武町教育委員会）、宮崎県雀ヶ野第3遺跡（近沢恒典 2005「雀ヶ野遺跡群」高城町教育委員会）、熊本県古閑北遺跡（野田包親・濱田彰久 1999「古閑北遺跡」熊本県教育委員会）

集石について

①集石の立地について

集石は1区で1基、3区で6基、4区で5基、都合12基検出した。

これらのうち、1区1号集石、3区1号集石がそれぞれ単独で立地する。この2者は双方とも調査区内では

北寄りで、なお且つ比較的高所に立地する。よって単独立地は、削平によるものの可能性もある3区2号集石・5号～7号集石が、また4区の集石が、それぞれ密集して存在する。これら密集する集石同士の構造は1つのものではなく、後述するように3種類からなり、この構造の相違が問題点として挙げられる。積極的に解釈すれば、この構造が違うもの同士がまとまってひとつの何らかの単位である可能性も指摘できよう。

②構造について

検出した12堆は以下のような構造に分類できる。

- 上部が拳大以上の礫、下部が人頭大を中心とした礫で構成され、なお且つ掘り込みをもつもの。
(1区1号集石・3区2号集石・3区4号集石・4区1号集石・4区3号集石・4区5号集石)
- 拳大～人頭大の礫を中心に構成され、上記のように上部と下部で礫の大きさが違わない。つまり下部構造をもたないタイプである。ただし浅い掘り込みをもつ。(3区1号集石・3区7号集石・4区2号集石)
- 拳大～人頭大の礫を中心に構成され、上記のように上部と下部で礫の大きさが違わない。つまり下部構造をもたないタイプで、ここまでb類と同様である。ただし本c類は掘り込みをもたない。(3区5号集石・3区6号集石・4区4号集石)

これら3分類のそれが、遺構の性格を異にすると考えることも可能であろう。以下その可能性に関して検討する。

隣接する3区2号集石と3区5号集石、および4区4号集石と4区5号集石の構成礫が、それぞれ接合した。3区2号集石・4区5号集石がa類、3区5号集石・4区4号集石がc類と、それぞれa類とc類の組み合わせである。これらは少なくとも接合する集石同士が同時併存、もしくは同時併存と言わないまでも、近接する時期に使用されたものと考えることが自然であると考える。

同時併存と考えた場合、それぞれ構造の違う集石であることから、その性格の違いを考えなければならない。集石が調理(蒸す)時の遺構であるという前提に立脚して話を進めた場合、

- ・調理前に礫を集め熱して、一部は使用し、一部は使用されずそのままの状態
- ・調理をおこない、集石を構成する礫を一部破壊し調理したものを取り去り、放置した状態
- ・調理したものを、取り去る時に集石を構成する礫を一部取り去り、集めた状態

などが、妥当なところであろう。これらのどれかの状態に当てはまる可能性を指摘できよう。

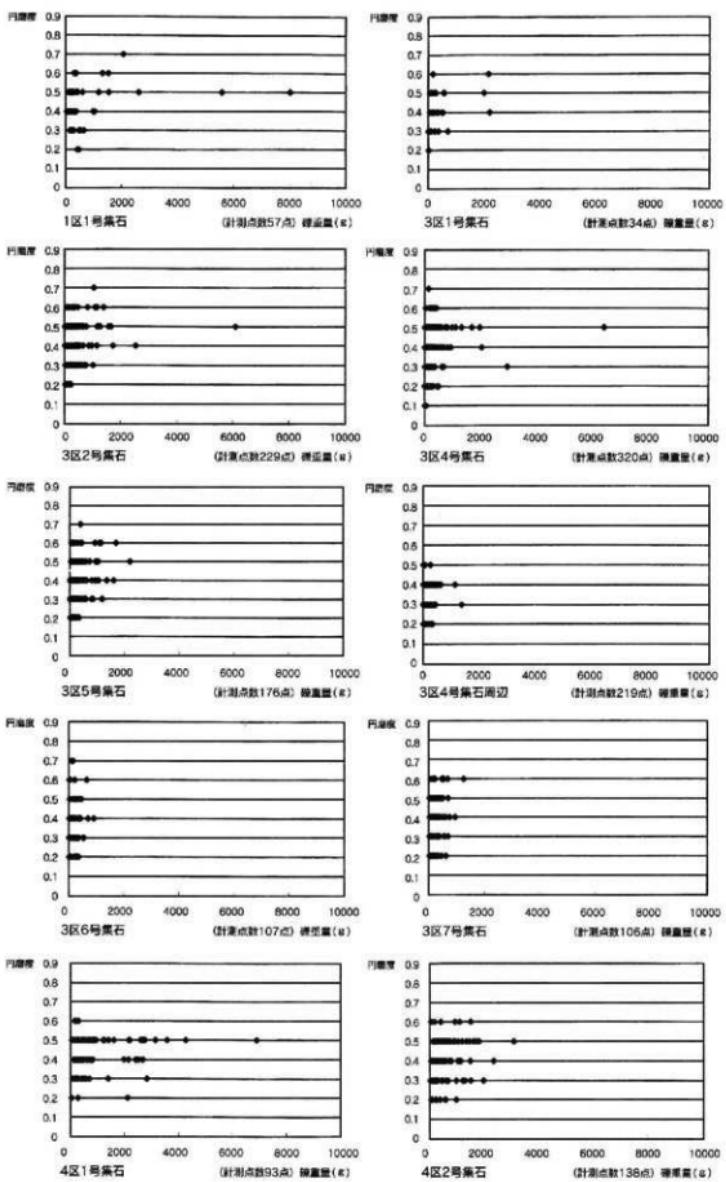
逆に同時併存ではないと考えた場合、上記3点の可能性のほか、時期的な違いによる形態差とも考えることが可能である。つまり同様に蒸すという行為をおこないながら、時期によってその構造が違うということである。その場合、何度も同じ様な場所で、同じ様な礫を使用したということが指摘できる。

③集石および礫層の構成礫について

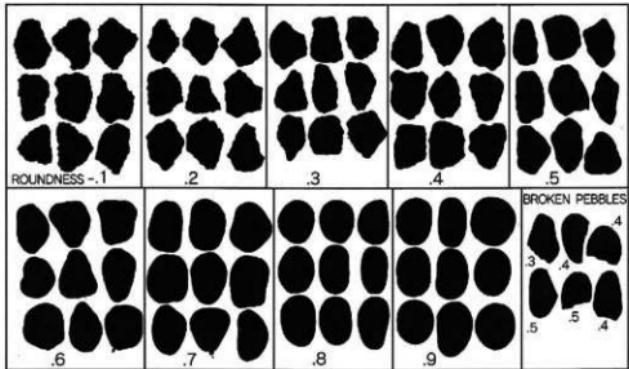
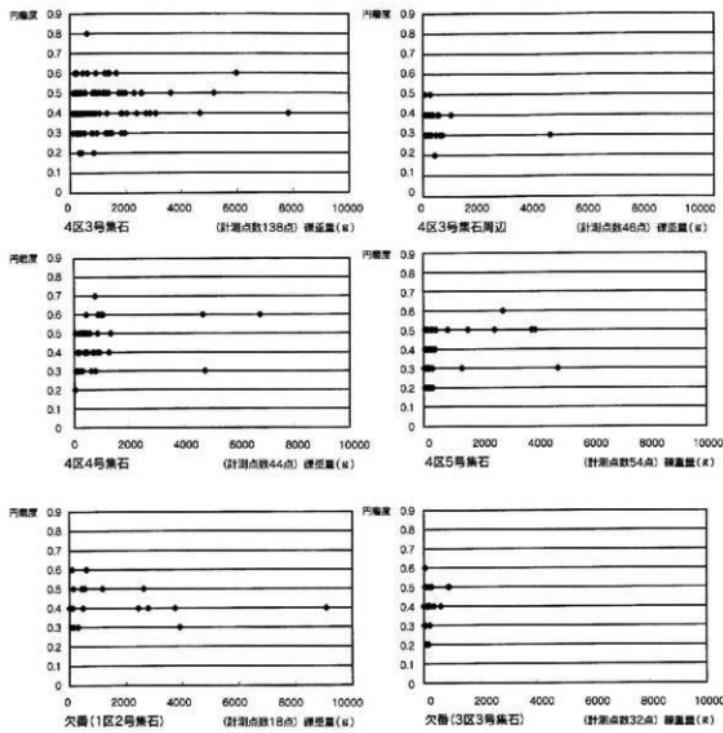
集石および、包含層中に含まれる礫の重さと摩耗度をみる円磨度(Krumbein 1941、第53図下の表参照のこと)を計測し、グラフ化を試みた。なお、集石は計測可能な全ての礫を、トータルステーションで取り上げをおこなった包含層上位の集石および、下位のグリッドで取り上げた礫層の礫は、すべての礫の計測はおこなわず、無作為に選び計測をおこなった。

まず集石のグラフ(第52・53図)を見てみると、概ね2000g前後を頂点に、円磨度0.4～0.5の礫が集中することがわかる。4区の集石の中には3000g前後が頂点であるものもあるが、これは第55図の下を見て分かるように、4区の集石が立地する周辺の礫層の礫がやや大きめであるからであろう。

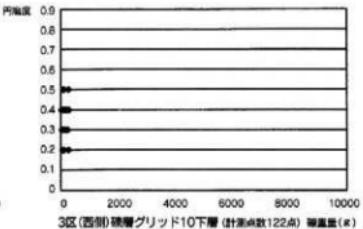
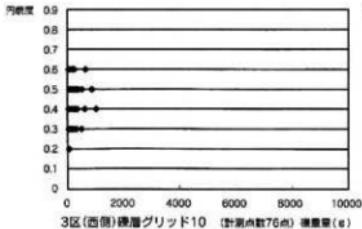
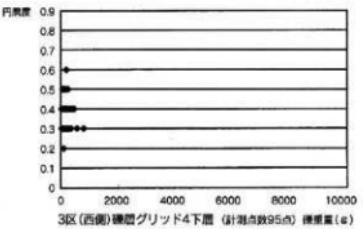
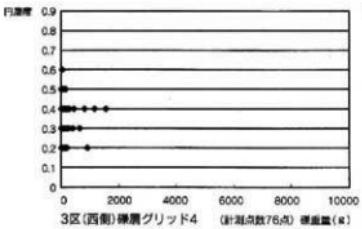
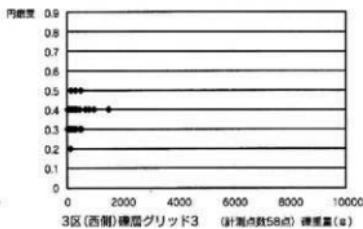
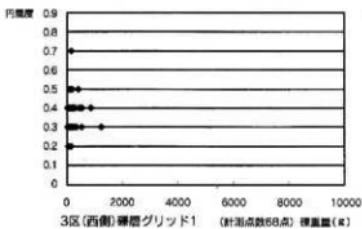
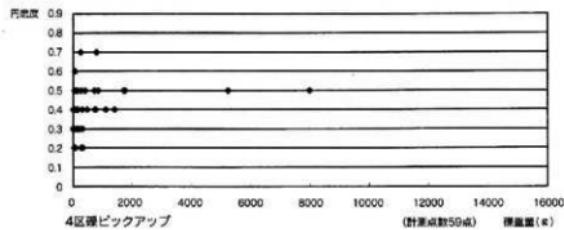
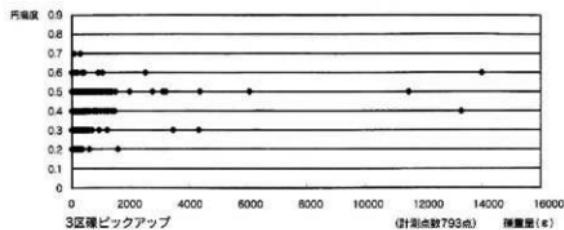
このことをふまえ、集石に隣接する礫を取り上げた3区4号集石周辺(第52図)、4区3号集石周辺(第53図)を見てみると、1000g前後が頂点で、円磨度の数値が1ランク少ない。これはこの2集石周辺のみではな



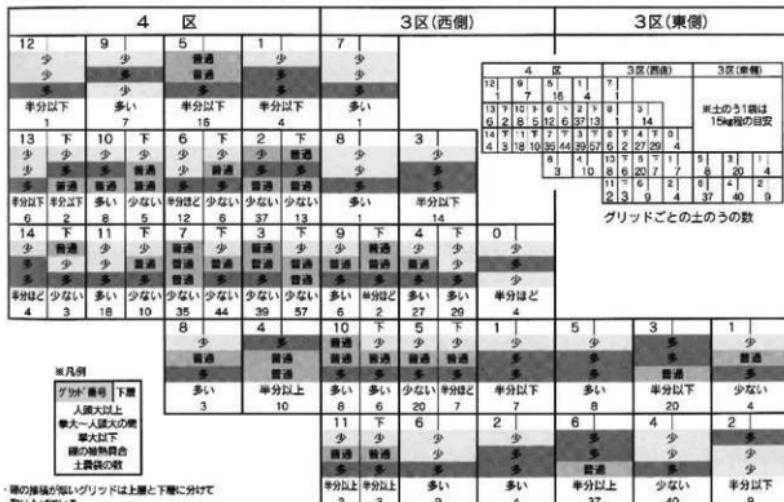
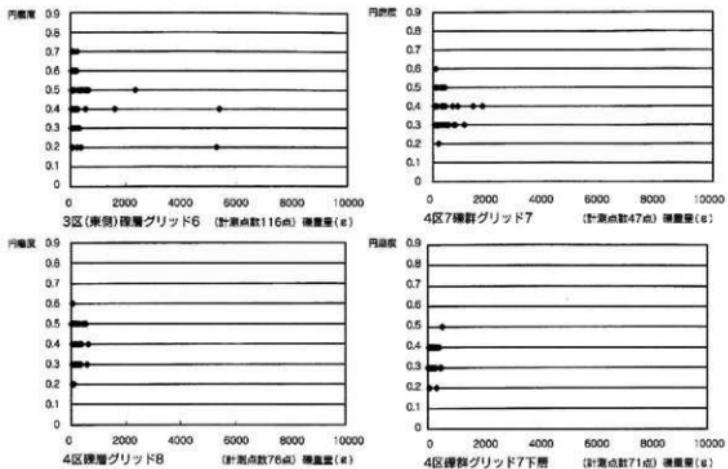
第52図 集石の構成砾の計測（その1）



第53図 集石の構成砾の計測（その2）と砾の円磨度（下）



第54図 縄文早期包含中の構成砾の計測（その1）



第55図 調文早期包含中の構成様の計測（その2）

く、礫層自体が概ね1000g以内で構成され、円磨度が0.3~0.4と集石に比べ1ランク少ないとからも、礫層自体が、このような礫で構成されていたと考えられる。また下層ほど礫が小さいことも指摘できる。いずれにせよ、第55図下の表も考慮にいれながら考えると、集石の上部を主に構成する礫はもっとも近場であるその辺、もしくは礫層が厚く堆積する3区と4区の境あたりで獲得した可能性を指摘できる。

さて、集石には前述の礫より重い礫も、また円磨度の数値も高いものも存在する。これらは礫層のグラフでは、3区（東側）礫層グリッド6（第55図）で確認することができる。この場所は調査区中最も低所に位置する。よって、下部遺構を構成する大きめの礫はより、川岸に近い低所から獲得してきたと考えられる。

最後に第54図上の、トータルステーションで取り上げた礫の3区・4区ごとのグラフをみてみる。その状況は、集石のグラフの分布状況に似る。これらの礫の大部分は被熟しておらず、上述したような礫層を構成する礫のみでは決してなく、集石に使用された礫を多く含むものと考えられる。

Krumbein 1941 "Measurement and geological significance of shape and roundness of sedimentary particles" Journal of Sedimentary Petrology, vol.11, no.2, pp.64-72

④集石群の立地について

集石は調査時の遺構ということを前提にたって話を進めていく。ここで今一度本遺跡の立地を確認すると、久留須川にむかって迫出している立地である。遺跡付近での久留須川は決して直線ではなく、南に向かって弧を描くような形である。山間であるため時期を巡っても下流のように流路がそれほど変化しているとも想定できない。繩文海進という大きな気候の変化があったとしても、山間であるためそれほど変化はないものと考える。ただし、長年の流れにより、より弧が強調されたものになったことは想定できる。よって繩文時代早期における久留須川は今よりも遺跡に近い位置を流れていたと考えられる。遺跡の南側から出土した礫層は、まさに当時の久留須川の河原であったと考えられる。ただし、実際川が流れる場所と一定の距離をもった場所、つまり雨などによる増水がない限り、つかってしまうようなことはない場所であったと思われる。このような場所に集石が営まれた。

ここで目の前に流れる川を素材に大胆な想定を行う。山間の小さな川を歩いてみると分かるが、川底は結構凹凸である。上流から流れてきた礫や砂は、川が曲がる最初の曲がりばなの箇所で一定の量が下流に流れきれなくなってしまって、やがてあまたの礫や砂などが集まり、水深を著しく浅くしてしまう。曲がりばなの次の曲線ではそういう現象が起こっているわけではなく、水深は深い。川の蛇行箇所は、これの繰り返しで水深が浅いところと深いところが隣り合わせである。よって、水深が浅い箇所に石などでせき止めをつくりそこに魚を追い込み、水面を板などで叩き、魚を気絶させ捕獲することも可能である。

捕獲した魚をさばく、調理する、場所として河岸段丘、とくに弧のように川に向かって迫出した場所は絶好の立地であったと考えられる。そのような場所に木遺跡の集石は営まれていると考える。 (吉田)

中世後期～近世初頭

土師器塊について

本遺跡では第42図1のような土師質の塊が出土した。大分県では、戦国期に土師質や瓦質の同様なプロポーションの塊の出土が知られている。前者の調整はナデやケズリで、また成形段階についたと思われる布目痕がみられる。後者の調整はミガキである。また大分市横尾遺跡出土のもの（永松1999）のように外側に青磁の運弁を模したものもみられる。

さて、本遺跡のものの調整を今一度確認すると、やや摩耗するものの、外側は回転ヨコナデ？、内側はミガキである。布目痕は現状確認できない。という具合に調整は瓦質のものに近い様相を呈するものの、同様なプロポーションから同様な性質のものと考えてよいと思われる。現時点では横尾遺跡出土のものに輸入陶磁器を模したと考えられるものがあることから、輸入陶磁器を模すことによって成立した土師器もしくは瓦質のと考えておく。

なお、これらの大分県内の分布は、国東半島、大分市、豊後大野市で確認されていた（塙地1997）。よって今回の資料は、その南限を拡大したことになる。よってこの遺物の歴史的意義についても今後重要なものと考える。

参考文献

塙地潤一 1997 「戦国時代土師器塊についての一考察」『大分・大友土器研究』第16号、大分・大友土器研究会

永松正大 1999 「XV 横尾遺跡群第72次調査（多武尾遺跡）」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.10 1998年度、

大分市教育委員会

掘立柱建物について

本遺跡では、合計7棟の掘立柱建物を確認することができた。1区では2棟確認できた。3区と4区で夥しい数の柱穴が検出され、逆に建物を探すのに困難を極めたが、とりあえず5棟確認することができた。柱穴が夥しいこと、等高線に沿って柱穴の下端が似たようなレベルになることから、柵列の存在も想定したが、確認できなかった。隣接する2区では逆に柱穴の数も極端に少なく、また建物も確認できなかった。この柱穴の少なさは、2区と3・4区の柱穴の下端レベルが似たような数値を示すことから、決して後世の削平によるものではないといえる。よって建物が集中したのは3・4区であり、2区は空白地帯であったと指摘できる。その空白の具体的な機能については、発掘調査では確認できなかった。比較的早い段階で田畠化していたとも考えられるが、これ以上は筆者の力量の外である。いずれにせよこの2区と3区の柱穴の密集相違から、両者の境を、原敷地の境とは言えないまでも、少なくとも建物の範囲と想定できる。

なお、これらの柱穴の時期は、出土遺物の状況から16世紀～17世紀中頃までが主であると考える。

墓について

本遺跡では、中世後期～近世初頭に造墓されたと考えられる墓が4基出土した。これらの平面プランはすべて指円形と考えられる。3区1号墓と3区2号墓、3区9号墓と3区10号墓が、それぞれ隣接する。規模も前

者が長軸0.7m台、後者が長軸1mをこえるくらいと、隣接するものの同士で規模が似通っていることからそれぞれ近接する時期を想定できる。墓壙の主軸は1号墓と2号墓は相違し、9号墓と10号墓はほぼ同一である。よって9号墓と10号墓はより近接する時期、極端に言えば併存を考えることも可能であろうか。1号墓で李氏朝鮮系白磁（生産年代：16世紀後半～末）が1点出土していることから、タイムラグを考慮して3区1号墓と2号墓の2基は中世末以降と考える。また3区9号墓と10号墓は、9号墓で寛永通宝2点（古寛永）が出土しており、その鋳造年代1636年～1659年、および後述するように墓石をともなわないことから、近世初頭と考える。早桶などの使用が考えられないことも証左になると考える。

出土遺物は、それぞれで骨片が、そのほか1号墓で李氏朝鮮系白磁が1点、9号墓で寛永通宝2点（古寛永）がそれぞれ出土している。李氏朝鮮系白磁の碗の完形品は大分県内では本遺跡が初と考えられる貴重なものである。生産年代は前述のとおりである。また墓に副葬する輸入陶磁器は、大分では中国産の青磁の場合が多く、白磁であることは稀であることも注目に値する。一方、出土した寛永通宝（古寛永）2点に関しては六道銭を想定し、残りの4つの有無を確認したが出土しなかった。また青銅に変色した上も本2点の周辺のみであった。6つで構成されていたと仮定した場合、残り4つ（同じ銅銭の場合）は腐ってなくなってしまったと考えられてもないが、青銅色化した土が他では確認できなかつたことから木や紙といったものでの六道銭専用の錢の形代であった可能性もある。が、一方で最初から2つであった可能性もある。大分市中尾近世墓地（吉田1999）では、夫婦の墓と考えられる2基の墓のうち、夫と考えられる墓からは6つ、妻と考えられる墓からは2つ、それぞれ錢の出土をみ、男女間で錢の副葬数に差があることが指摘されている。これはこの遺跡に限ったことではなく、大分市女狐近世墓地（田中1996）でも男性で6つ、女性で2ないし1つ、またはなし、幼児で1つまたはなし、と年齢性差で副葬する錢の枚数が相違する傾向が指摘されている。

いずれにせよ、六道銭の習俗は中世からも散見されるが、むしろ増加するのは近世であり、本例もこれに合致するものと考える。

3区10号墓では、遺構平面検出時に検出面で自然石がたった状態で確認でき、墓の墓標の可能性も考えたが、最終的には前述のように墓石とは確定しなかった。このように17世紀初頭～中葉にかけて墓石がみられなくなる現象は、大分のみならず、当時の日本の中核以外の九州～東北という周縁地域で認識されており、本遺跡もそれを追認する形となった。

これらの中世後期～近世初頭に造墓されたと考えられる4基の墓であるが、ここに中世～近世に社会の枠組みが変化するに至っても、墓の上ではまだ変化がみられないということが指摘できる。このことがひとつの遺跡の中で確認できるという点で本遺跡は重要である。

参考文献

- 田中裕介 1996 「銭貨」「女狐近世墓地」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5、大分県教育委員会
吉田 寛 1999 「中尾近世墓地」大分県教育委員会

墓と建物について

本遺跡では、3区と4区で夥しい数の柱穴が検出され、逆に建物を探すのに困難を極めたが、とりあえず5棟確認することができた。これらの柱穴の時期は、出土遺物の状況から16世紀～17世紀中頃までが主である。よって一部前述した4基の墓と併存していた可能性を指摘できる。よって現象的には「屋敷墓」の様相を呈していると考えられる（註1）。

これらの墓の被葬者は屋敷の当主層と想定する。では、この屋敷の当主層はいかなる階層であったのであろうか。

本遺跡が存在する小字が「神ノ原」であり、東側には「神内」「市屋敷」といった有力者の邸の存在を物語せるような小字が存在するし、またもう少し東側、1 km程のところの高台には繩文～弥生時代にかけての良好な資料が発掘された源六原遺跡が立地し、その眼下は「向船場」という地名が残る地区である。第2章で述べたとおり、当遺跡周辺は、久留須川・赤木川・横川川の3川が合流する交通の要所であり、現在でも旧直川役場（現：佐伯市真川振興局）・幼稚園・保育園・小学校・中学校・郵便局・農協と重要な施設が集中する場所である。これらの中で最も好立地なものは、高台にある小・中学校である。現在は戦後の校舎造営により良好な遺構の存在は確認できない。しかしこの場所は、当遺跡が立地する背後の高台にあたり、墓や掘立柱建物が存在した時期に、この周辺に実際に住み治めた在村領主層とも言うべきクラスが、この高台に存在した可能性は十分にあり得る。

神ノ原遺跡で確認できた墓の被葬者は、この階層を支える1ランク下の階層のものであると想定できる。

さて、現在でも見られるような墓碑をもつ墓の形態になるのは17世紀後半である。当初は少数であり、限られた程度である。ごく限られた家の家長のみ墓碑が伴なう墓に葬られる程度と想定されている。18世紀以降徐々に墓碑を伴なう被葬者は家長からその妻や子にまで及び、そして全てに及んでいく。

この流れのなかで、神ノ原遺跡の墓の被葬者像を想定すると、在村領主層ともいるべきクラスを支えた1ランク下の階層の家長と想定することが可能である。

註1：「屋敷墓」に関しては中世前期假定する考え方のほか、中世前期と近世とする立場、中世前期～近世にかけてとする立場があるが、これらの見解は論者の立脚する立場によって相違する。これらひとつひとつの立場を検討するべきであろうが、ここではその紙幅もなく、また筆者の力量の外である。現時点で筆者は、現象としては屋敷と単独もしくは数基の墓というセット関係は中世前期から近世まで確認できるものと考える。そしてその意義についてはさておき、ここではその現象を便宜上「屋敷墓」という言葉で言い換えて使用している。

(吉田)

参考文献

後藤一重・浜田教育 編 1995『幕後田原別符の調査Ⅲ 波多方の歴史』大田村教育委員会

橋田正徳 1991『屋敷墓試論』『中近世土器の基礎研究』VII、日本中世土器研究会

写真1



1. 調査区：調査前（東から）



3. 1・2区全景（東から）



2. 調査区遠景（西から）



4. 調査区近景（西から）



1区全景 (東から)



2区全景 (北東から)



1区全景 (北西から)

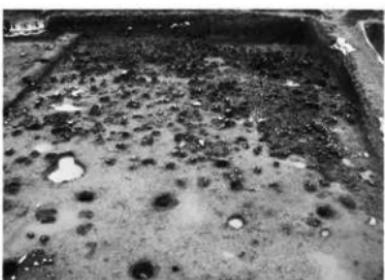


2区全景 (南東から)

写真3



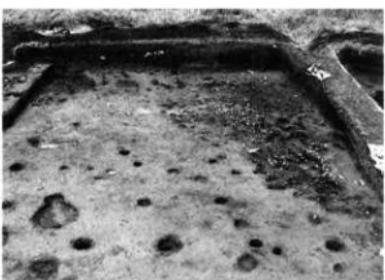
1. 3区（東側）：縄文早期検出面（その1）（北から）



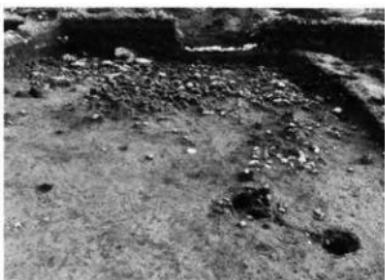
5. 3区（西側）：縄文早期検出面（その1）（北から）



2. 3区（東側）：縄文早期検出面（その2）（北から）



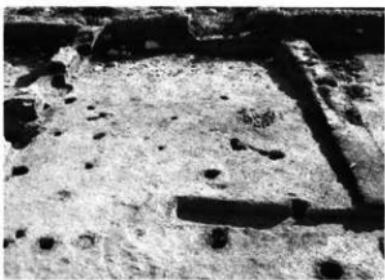
6. 3区（西側）：縄文早期検出面（その2）（北から）



3. 3区（東側）：縄文早期検出面（その3）（北から）



7. 3区（西側）：縄文早期検出面（その3）（北から）



4. 3区（東側）：縄文早期検出面（その4）（北から）



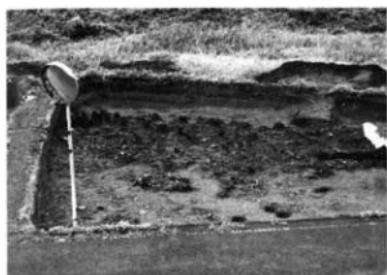
8. 3区（西側）：縄文早期検出面（その2）、礫層（南から）



9. 4区：縄文早期検出面（その1）（北から）



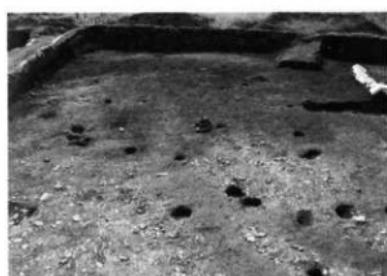
13. 3・4区：縄文早期包含層検出途中（北西から）



10. 4区：縄文早期検出面（その2）（北から）



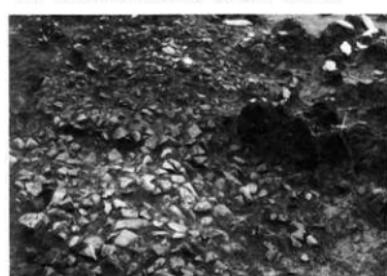
14. 3・4区：縄文早期包含層検出途中（北西から）



11. 4区：縄文早期検出面（その3）（北から）



15. 3・4区：縄文早期包含層最終検出面（北西から）



12. 3区 (西侧): 縄文早期検出面 (その2)、礫層 (南東から)



写真5



1. 3区中央土層サブレンチ (南から)



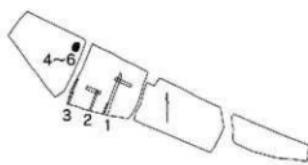
2. 3区 (東側) 中央サブレンチ (南から)



3. 3区西壁面サブレンチ (北から)



4. 4区 1号土坑 (北から)



5. 4区 1号土坑土器検出状況 (北から)



6. 4区 1号土坑完掘状況 (北から)



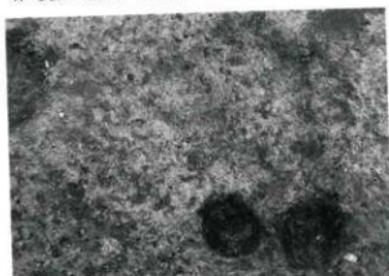
1. 1区1号集石：検出時（西から）



4. 3区1号集石：検出時（北から）



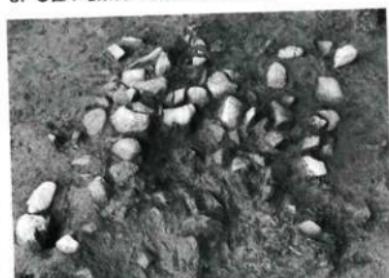
2. 1区1号集石：上部礫除去後（西から）



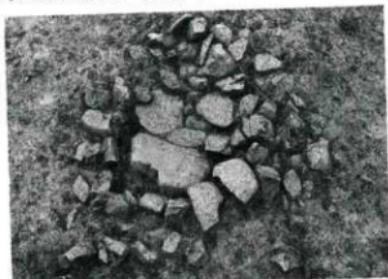
5. 3区1号集石：礫除去後（北から）



3. 1区1号集石：下部礫除去後（西から）



6. 3区2号集石：検出時（南から）



7. 3区2号集石：上部礫除去後（南から）

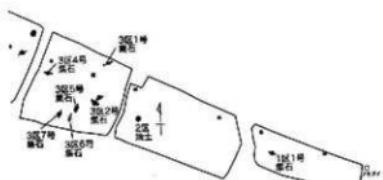
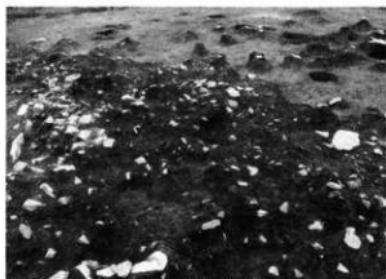
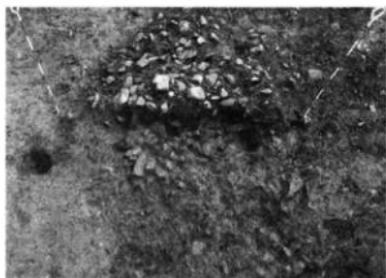


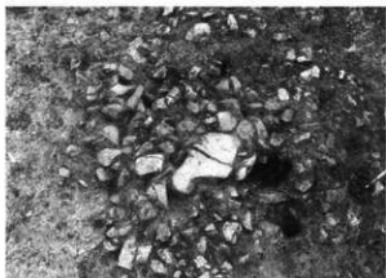
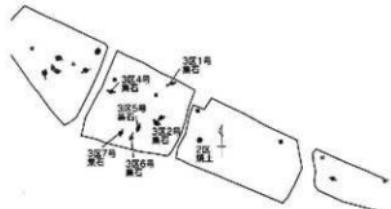
写真7



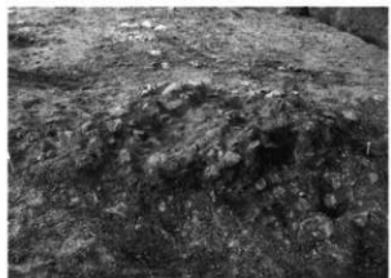
1. 3区4号集石：遠景（西から）



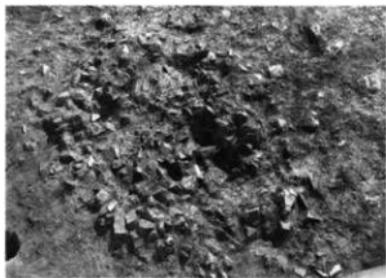
2. 3区4号集石：上部礫半切状況（北から）



3. 3区4号集石：上部礫除去後（北から）



5. 3区4号集石：下層（礫層）半切状況（北から）



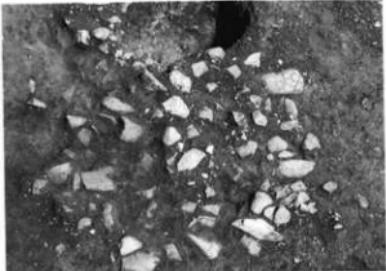
4. 3区4号集石：下部礫除去後（北から）



6. 3区4号集石：下層（礫層）半切断面（北から）



1. 3区5号集石：検出時（東から）



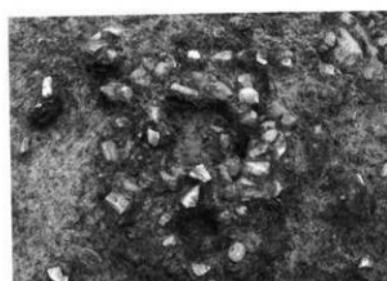
5. 4区1号集石：検出時（東から）



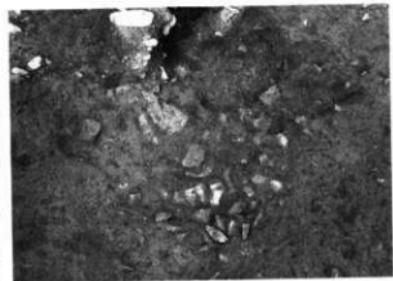
2. 3区5号集石：礫除去後、下層の検出（東から）



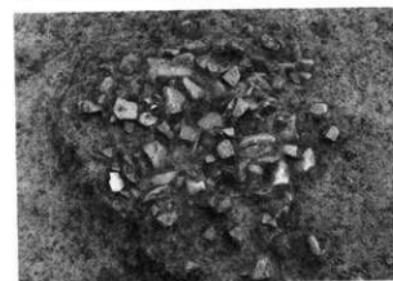
6. 4区1号集石：上部礫除去後（東から）



3. 3区6号集石：検出時（南から）



7. 4区1号集石：下部礫除去後（東から）



4. 3区7号集石：検出時（南から）

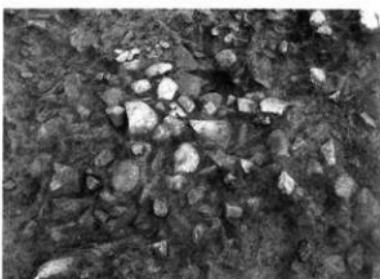


8. 4区1号集石：被熱薦しい礫（東から）

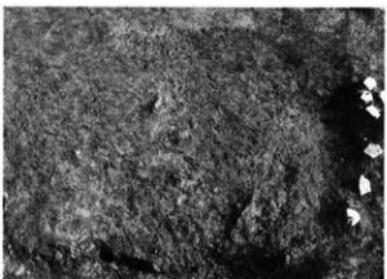
写真9



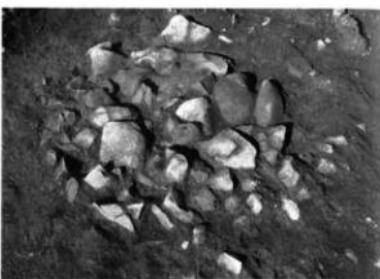
1. 4区2号集石：検出時（南から）



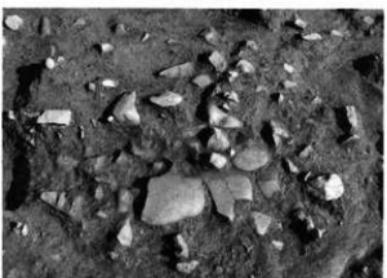
5. 4区3号集石：検出時（南から）



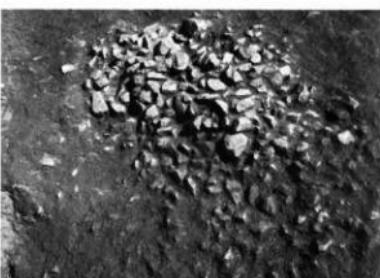
2. 4区2号集石：礫除去後（南から）



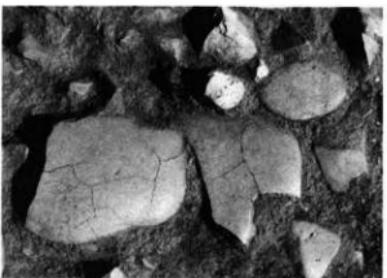
6. 4区3号集石：上部礫除去後（南から）



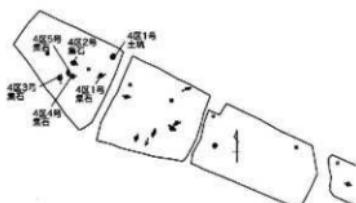
3. 4区4号集石：検出時（南から）



7. 4区3号集石：下部礫除去後（南から）



4. 4区4号集石：被熱着しい礫（南から）

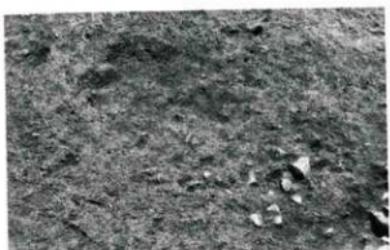




1. 4区5号集石：検出時（西から）



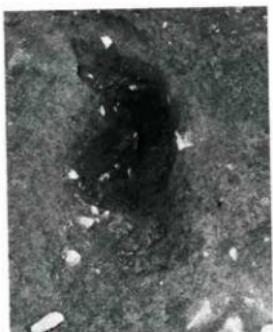
5. 2区焼土（西から）



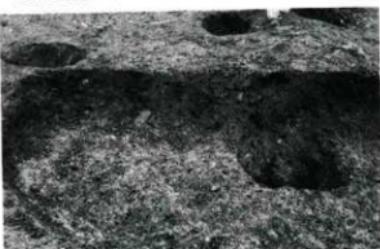
2. 4区5号集石：疊検出時（西から）



6. 2区焼土半切（東から）



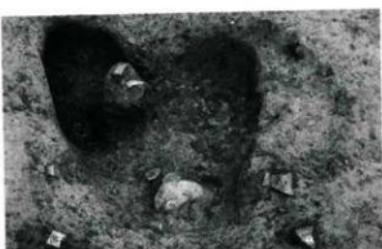
3. 2区2号土坑（南から）



7. 2区焼土土層断面（東から）

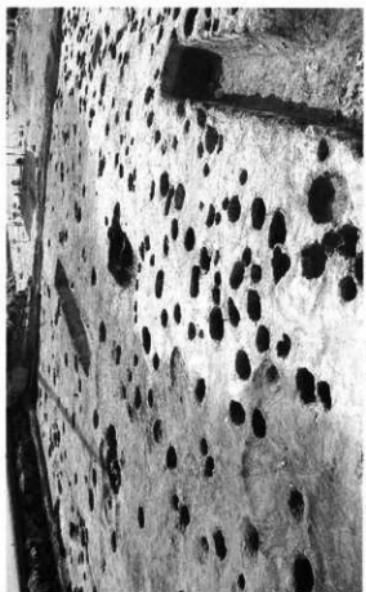


4. 2区1号土坑（東から）

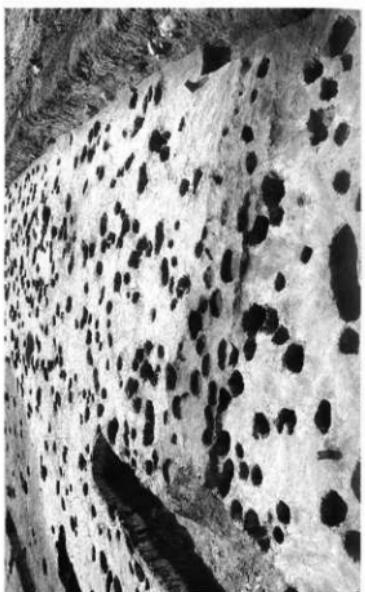


8. 2区3号土坑

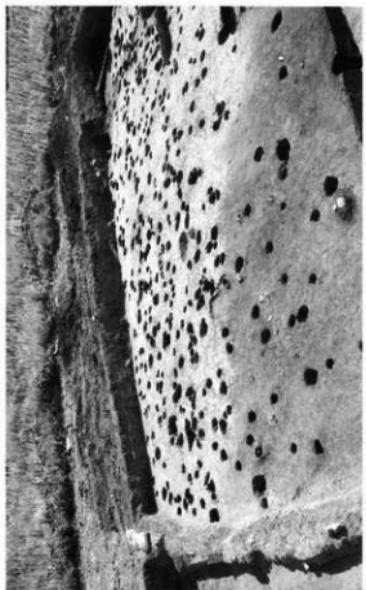
写真11



3. 3区1次候出面：東側（西から）



4. 3区1次候出面：東側（西から）



1. 3区1次候出面：南東側（北から）



2. 3区1次候出面：南西側（北東から）



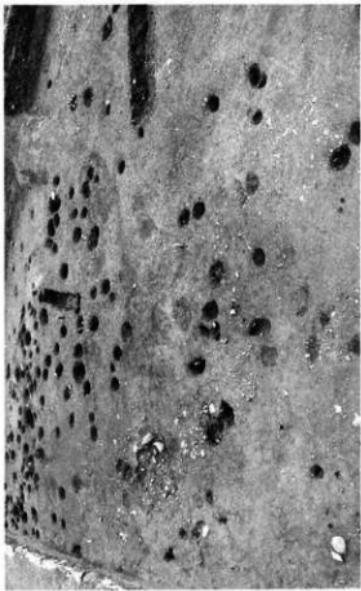
4区1次検出面：西側（北東から）



4区1次検出面：南東側（東から）

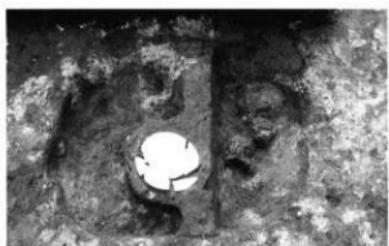


3区1次検出面：東側（北西から）

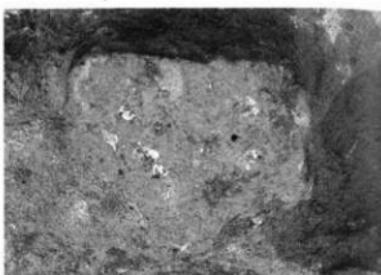


4区1次検出面：東側（北から）

写真13



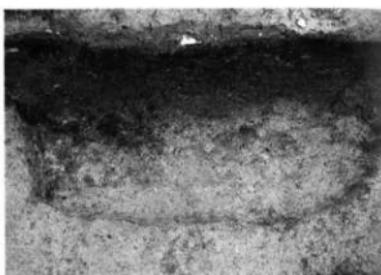
1. 3区1号墓（東から）



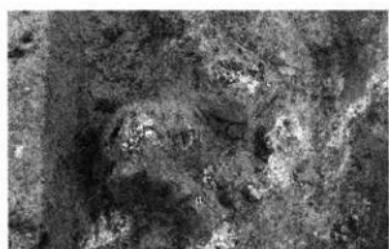
5. 3区2号墓：歯片（東から）



2. 3区1号墓：白磁除去後（東から）



6. 3区9号墓（西から）



3. 3区1号墓：頭骨（東から）



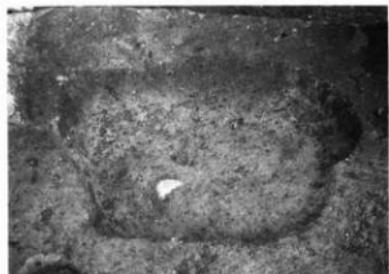
7. 3区9号墓検出状況（西から）



4. 3区2号墓（東から）



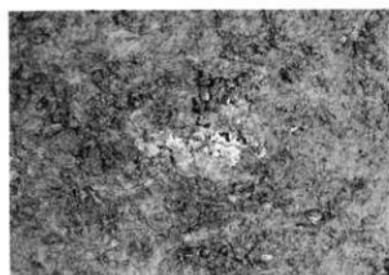
8. 3区9号墓土層（西から）



9. 3区9号墓完掘状況（西から）



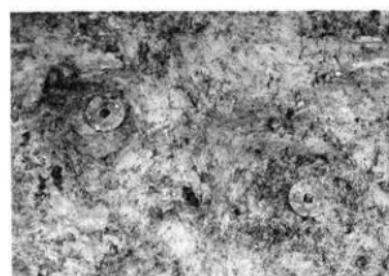
13. 3区10号墓：横から（西から）



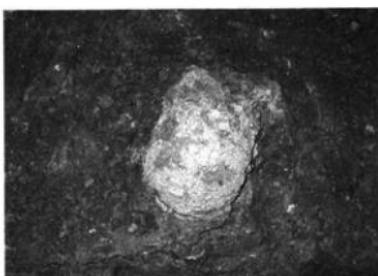
10. 3区9号墓：歯片（西から）



14. 3区10号墓完掘状況（西から）



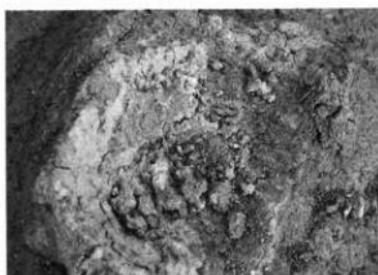
11. 3区9号墓：出土銭貨（西から）



15. 3区10号墓：頭骨（西から）



12. 3区10号墓（西から）



16. 3区10号墓：頭骨除去後（西から）

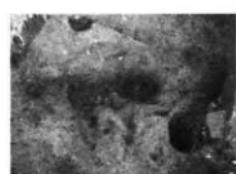
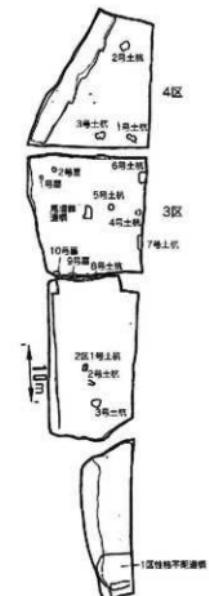
写真15



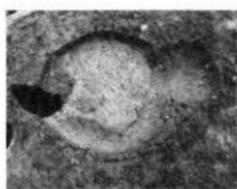
1. 1区性格不明遺構（北から）



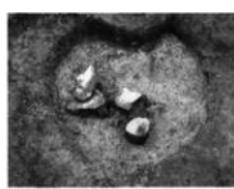
2. 1区性格不明遺構（東から）



6. 3区8号土坑（西から）



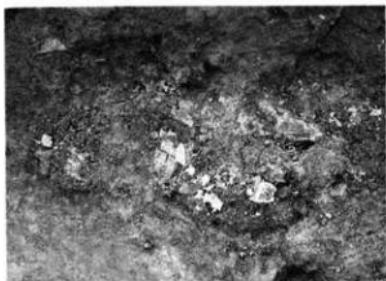
3. 3区4号土坑（北から）



4. 3区5号土坑（北から）



5. 3区5号土坑土層断面（西から）



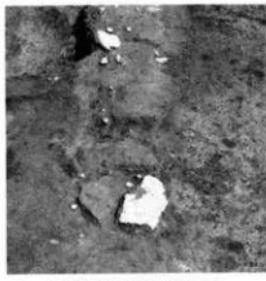
7. 馬頭骨（東から）



11. 3区6号土坑完掘状況（右）と3区道路状遺構（北から）



8. 3区馬埋葬遺構（南から）



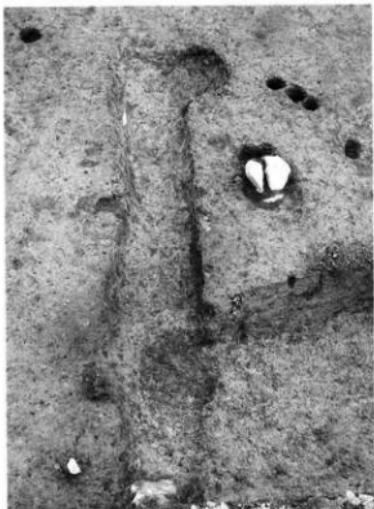
12. 3区道路状遺構（南から）



9. 3区馬埋葬遺構完掘状況（南から）

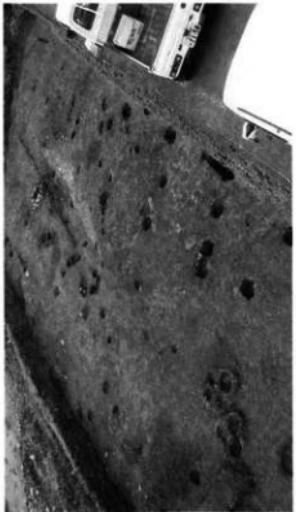


10. 3区6号土坑（北から）

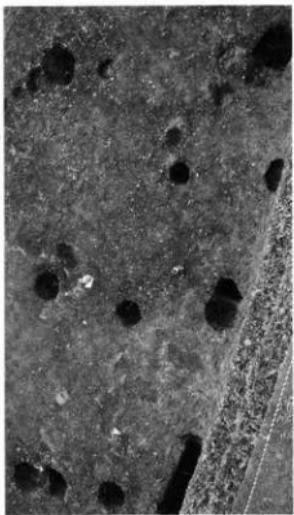


13. 3区道路状遺構：石抜きとり後（北から）

写真17



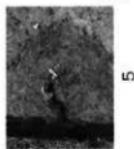
1. 1区掘立柱建物 (北東から)



2. 1区4号掘立柱建物 (北から)



3. 柱穴検出状況



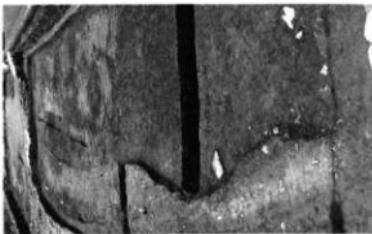
4. 柱穴断面



8. 新旧道路 (東から)



7. 1区道路検出状況 (東から)

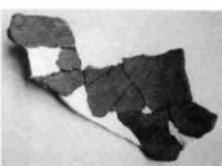


6. 1区道路検出状況 (東から)

調査実績Ⅲ出土
状況 (北から)



1. 4区1号土坑出土土器外面



2. 4区1号土坑出土土器内面



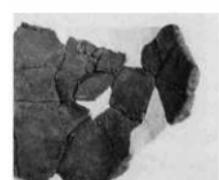
3. 4区1号土坑出土土器外面



5. 4区1号土坑出土土器内面



4. 4区1号土坑出土土器内面



6. 4区1号土坑出土土器内面調整



7. 4区1号土坑出土土器底部外面



9. 4区1号土坑出土石器（北から）



10. 4区1号土坑出土石器



8. 4区1号土坑出土土器底部内面

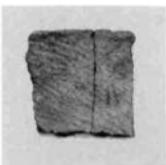
写真19



12. 第17図10 (条痕文: 口縁端部ナテ調整)



13. 第17図17 (条痕文)



14. 第17図18 (条痕文)



15. 第17図22 (条痕文: 口縁部直下剥突)



16. 第18図12 (溝の深い条痕)



17. 第19図1 (無文: 外面)



19. 第19図3 (無文: 外面)



21. 第19図12 (無文: 外面)



18. 第19図1 (無文: 内面)



20. 第19図3 (無文: 内面)



22. 第19図12 (無文: 内面)



23. 第12図1 (無文: 工具ナテ)



24. 第17図7 : 口縁端部剥目



25. 第21図1 (撚糸文)



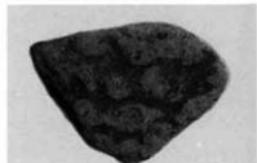
26. 第21図5 (撚糸文)



27. 第21図6 (撚糸文)



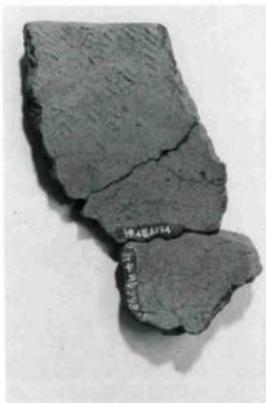
28. 第21図2 (撚糸文)



29. 第21図12 (押型文 : 横円)



30. 第21図7 (押型文 : 山形外面)



31. 第21図7 (押型文 : 山形内面)



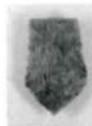
32. 第22図1 (底部外面)



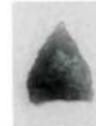
33. 第23図7 : 有舌尖頭器



34. 第23図8 : 有舌尖頭器



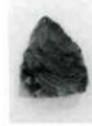
35. 第23図9 : 有舌尖頭器



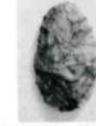
36. 第23図1 : 小型石鎌



37. 第23図5 : 石鎌



38. 第23図6



39. 第23図10 : ラウンドスクレイパー



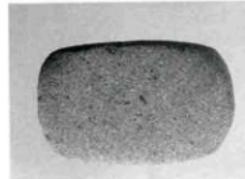
40. 第26図1 : 片刃研磨器



42. 第33図6 : 弥生土器底部



44. 第42図6 : 土師質土器



41. 第30図7 : 石錠形磨石



43. 第33図6 : 弥生土器底部



45. 第42図4 : 土師質土器

写真21



46. 第20図5：無文（ミガキあり）



47. 第18図3：内面や白色の構文土器



48. 第42図1：土師質土器碗



50. 第42図12：青磁底部



51. 第42図19：景德鎮



49. 第42図1：土師質土器碗内面



52. 第42図20：漳州窯碗



53. 第42図20：漳州窯碗外顔



54. 第42図17：白磁



55. 第42図13：青磁



56. 第42図13：青磁（見込みの文様）



57. 第42図13：青磁高台



58. 第42図14：青磁



59. 第42図14：青磁高台



60. 第42図11：青磁（焼成不良）



61. 第37図1



62. 第37図1：高台



63. 第43図7：擂鉢



64. 第43図8：唐津溝縁皿



65. 第43図9



66. 第43図10：陶胎染付



67. 第43図11



68. 第43図13：灯芯押正面



69. 第43図13：灯芯押背面



70. 第43図12：内面



71. 第43図12：外面



72. 第47図5



73. 図化していない陶磁器：外面



74. 図化していない陶磁器：内面

報告書抄録

ふりがな	ごうのはるいせきはつくつちょうさほうこくしょ
書名	神ノ原遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	清水宗昭・田中良之・石川健・加藤久雄・戸高浅生・竹中伸吾・吉田和彦(編集)
編集機関	佐伯市教育委員会
所在地	〒876-8585 大分県佐伯市中村南町4番1号
発行年月日	西暦2006年3月31日

所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 綏	調査期間	調査面積	調査因
		市町村 コード	道 路 番 号					
ごうのはるいせき	さいきしなおかわ おおあさかみなおみ	420	453008	32度 53分 42秒	131度 46分 26秒	2005.06.07 2005.10.13	1270m ²	調査整備
神ノ原遺跡	佐伯市直川 大字上直見							

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構築	主な遺物	特記事項
神ノ原遺跡	包蔵地	縄文時代早期	集石	縄文土器・石器 (有舌尖頭器など)	・中世後期～近世初頭 (上層)と縄文早期(下層) の複合遺跡。
	集石墓	中世後期～ 近世初頭	墓・獨立柱物・ 七塙・柱穴 馬埋葬遺構	陶磁器 (李氏朝鮮系白磁碗・ 肥前焼芯押など)	・県内で出土例の少ない 有舌尖頭器出土。 ・墓より李氏朝鮮系白 磁碗出土。

神ノ原遺跡報告書

編集・発行 佐伯市教育委員会
〒876-8585
佐伯市中村南町4番1号
電話 (0972) 22-4059

印 刷 佐伯印刷株式会社
〒876-0823
佐伯市女島9032
電話 (0972) 23-0170
